

309.023
NA

アレクサンドル・ゲルツェンの思想を中心とする
近代ロシア社会思想の包括的研究

課題番号 13610643

平成13年度~平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))
研究成果報告書

横浜国立大学附属図書館



11643453

平成17年3月

研究代表者 長縄 光夫
横浜国立大学教育人間科学部

平成13年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書

研究課題 アレクサンドル・ゲルツェンの思想を中心とする近代ロシア社会思想の包括的研究

課題番号 13610643

は し が き

以下に収録した諸論文は「アレクサンドル・ゲルツェンの思想を中心とする近代ロシア社会思想の包括的研究」という課題のもとで、平成13年度から16年度にかけて4年間、科学研究費補助金を得て研究した成果の一端である。

ゲルツェンの生年は1812年、没年は1870年。19世紀の中葉をカバーする彼の思想活動・社会活動は、彼が受けた18世紀から19世紀初頭にいたる近代ロシア思想の影響と、彼自身が19世紀の中葉から21世紀の今日にいたるロシア思想に与えた影響とによって、近代ロシア思想の結節点に位置すると言ってよい。

本研究の代表者(長縄光夫)は大学在学当時からゲルツェンの思索と生涯の軌跡に惹かれ、その研究は断続的ながら孜々として継続され、40年後の今日にいたっている。私事ではあるが、私は近い将来、大学教員としての生活を終えるにあたり、あたかも「卒業論文」を書くかのように、自らのゲルツェン研究の集大成を目指している。本研究はそのための準備作業の一部である。

本研究は遺憾ながらゲルツェンという人の思索と活動のすべてを包括していない。その意味で、私の研究はまだまだ続けられなくてはならない。

大きな著作としてのまとまりの完成は他日に期すとして、ここではこの4年間の研究成果を提示するに止めたい。

研究代表者 長縄 光夫 (横浜国立大学教育人間科学部)

研究経費	平成13年度	90万円
	平成14年度	80万円
	平成15年度	60万円
	平成16年度	50万円
	計	280万円

研究発表

印刷物

- (1) 「ゲルツェンとロジチェフ」(『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ(社会科学)』no.5. 2002 年、pp.25-40.)
- (2) 「ゲルツェンの見たチャアダーエフ」(『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ(社会科学)』no.6. 2003 年、pp.1-16.)
- (3) 「ゲルツェン『学問におけるディレッタンチズム』覚書」(『ロシア思想史研究』第1号、2004 年、pp.57-71.)
- (4) 「アイリーン・ケリーのゲルツェン論」(『ロシア思想史研究』第2号、2005 年、pp.20-42)

目 次

第一章 アイリーン・ケリーのゲルツェン論

Aileen Kelly *Toward Another Shore – Russian Thinkers Between Necessity and Chance*, Yale Univ.Press. 1998, pp.ix+400 (『もうひとつの岸に向かって－必然と偶然との間にあるロシアの思想家たち』) 4－26

第二章 ゲルツェンの見たチャアダーエフ 27－45

第三章 ゲルツェン『学問におけるディレッタンチズム』覚書 46－63

第四章 ゲルツェンとロジチェフ 64－88

第一章

アイリーン・ケリーのゲルツェン論

Aileen Kelly *Toward Another Shore - Russian Thinkers Between Necessity and Chance*, Yale Univ.Press. 1998, pp.ix+400

(『もうひとつの岸に向かってー必然と偶然との間にあるロシアの思想家たち』)
を読んで

I

標記の本はケリーがこの三〇数年のうちに書いたロシア思想史関係の論文を集めたもので、表題の『もう一つの岸』から推察されるように、いずれの論考においても中心的役割を果たしているのはゲルツェンである。

まず、本書の目次を紹介することから始めよう

序論

第I編 方法論とアプローチ

第1章 複雑なヴィジョン

第2章 レオナード・シャピロのロシア

第II編 洞察と動揺

第3章 知識人たちのカーニヴァル

第4章 ドストエーフスキーと引き裂かれた意識

第5章 懐疑するトルストイ

第6章 イヴァン・ツルゲーネフのニヒリズム

第7章 リベラルのディレンマとナロードニキ的解決

第8章 インテリゲンツィアと自己検閲

第9章 道標はどちらか?

第10章 混沌の都市

第III編 妄想と遁辞

第11章 ボリス・チチェーリンの合理的現実

第12章 バクーニンと千年王国の魅惑

第13章 ボリシェヴィキ哲学?

第14章 勇敢なる新世界

第4編 もう一つの岸

第15章 ゲルツェンとドストエーフスキーにおけるアイロニーとユートピア

第16章 ゲルツェン対ショウペンハウアー

第17章 神なる発明者ー偶然

本書に言う「the another shore」がゲルツェンのエッセイ集『Сторо берега (向こう岸から)』(1847年－1850年)に由来していることは自明のこととして(念のために書き添えておけば、この本の英訳の表題は”From the Other Shore”である)、ではケリーは「もう一つの岸」にどのような意味を付与しているのか。そのことは序論の冒頭の次の一文によって知ることができる。

「〈ここにおいてわれわれは家に着いた、と言ってよいかもしれない。そして、嵐の海を長い間航海した後のように、今やわれわれは土地の見たことを祝うことができるだろう。〉(『歴史哲学講義』から)ヘーゲルは(デカルトと共に始まる)近代哲学の歩みを叙述して、このように書いた。この時、人間の思想はその全ての知識と価値とを理性を通じて自立的に導き出す術を探し始めた、というのである。これらの数行を引用しつつ、当時ロシアにおける指導的な急進的ヘーゲリアンであったアレクサンドル・ゲルツェンは、1843年にヘーゲルの隠喩をもじってこう書いた。〈ヘーゲルは自分の哲学こそ、思想が平和な港として目指した岸に他ならないと信じていた。しかし、われわれは、逆に、今自分たちの立つこの岸を、順風が一吹きしたならばすぐにでも後にしようと身構えているのだ。〉(『学問におけるディレクティビズム』より、ゲルツェン 30 巻著作集Ⅲ・242)」(1)[以下、引用文末尾のカッコ内の数字は本書のページ数を表す。]

つまり、著者はゲルツェンがヘーゲルの行き着いた岸から船出をして、首尾よく行き着いたところを「もう一つの岸」と呼んでいるのである。それがいかなる場所であったかについては後の記述に譲るとして、今は本書の狙いについてのみ言えば、それは『向こう岸から』を中心としたゲルツェンの思想をポスト・ヘーゲルの西欧とロシアの思想の歴史の中に位置づけ、併せて、ゲルツェンの思想の現代的意義にまで言及しようということにあるのである。

ゲルツェンの思想の大まかな位置づけは副題「必然性と偶然性の間でのロシアの思想家たち」に示されている。「必然性」に与する思想家たちは、世界(宇宙)に唯一の絶対的・究極的・超越的価値あるいは原理が普遍的に存在することを認め、歴史あるいは社会の場にそのような価値(原理)の実現を目指す、宿命論、決定論、終末論を信奉し、何らかのユートピアを持つ人々であるのに対して、「偶然性」に与する思想家たちは、このような価値(原理)の存在を認めず、あるいはこうしたものの存在に対して懐疑的(アイロニカル)であり、むしろ価値(原理)は多元的であり、しかも普遍妥当性を持たないと考え、社会のあり方や歴史の方向は偶然的な諸要因を前にした人間の自由で主体的な選択と判断に委ねられていると考える人々である。そしてゲルツェンはこの内の後者に位置づけられているのである。

これまでゲルツェンは、ソヴィエト時代のロシアと西欧とを問わず、多くの場合、ラジシチェフあるいはデカブリストに発するロシアの革命思想の淵源に立つ思想家として、ロシア社会主義の提唱者として、したがってナロードニキ主義の先駆けとして、さらには、

ロシア（ボリシェヴィキ）革命を準備した者の一人として描かれてきた。ソヴィエト期のロシアでは、このことが概ね肯定的に評価されてきたのに対して、西欧の思想史家によっては、ゲルツェンは逆に正にそのこと故に多かれ少なかれ、否定的に評価されてきたのである。即ち、西欧の思想史家たちは、「道標派」のインテリゲンツィア（政治的急進主義の知識人）神話を継承しつつ、かれらの最大限綱領主義的な心理と手段がボリシェヴィキ革命を、ひいてはスターリン体制を呼び招いてしまったという点において、ゲルツェンもその一半の責任を負っている、というのである。いずれにしろ、このようなイメージによれば、ゲルツェンの思想は初期社会主義の一つの変種として、社会主義思想の歴史、革命思想の歴史の枠内に閉じ込められてしまうことには変わりはないのである。

だが、ケリーに言わせれば（そしてわたしも全く同感であるが）、ゲルツェンの思想の最も魅力的な側面は、彼が「イデオロギーの抽象化が人間存在に対して持つ破壊的な力を予見し、これを告発した」「反イデオロギーの思想家」であることにこそあるのだ。(3) 既存の価値や原理の有効性を疑い、そのような価値や原理の体系の中に閉じ込められた人間の自由と主体性を取り戻すこと、これこそがゲルツェンの思想的課題であった。ケリーが提示しているのは、このようなゲルツェンのイメージである。

人間の自由意志と主体的判断の回復を目指す思想家・ゲルツェンというイメージは、しかし、ケリーをもって嚆矢とするのではない。このようなゲルツェン像の原型は既にイギリスの哲学者にして思想史家、サー・アイザイア・バーリンによって示されているのである。バーリンのロシア思想史論の集大成ともいえるべき『ロシアの思想家たち』(*Russian Thinkers*, London, 1978) に序文を書いているのが、他ならぬケリーであることから推測されるように、ケリーのゲルツェン論はバーリンのその強い影響下にあることは明らかである。(現に、A の第 1 章「複雑なヴィジョン」はこの文章である。) ケリーの一連の論文はバーリンのゲルツェン像を下敷きとして、これを思想史の幅広いパースペクティブの中で細密化したということに意義があるのである。

II

私の思うに、バーリンのゲルツェン論は『向こう岸から』の英訳版に対する序文に最も雄弁に語られている。それ故ここでは、一旦ケリーの著作を離れ、バーリンのゲルツェン論を見ておきたい。それによってわれわれはケリーのゲルツェン論の原型を知ることが出来るだろう。

だが、その前に、われわれはここで再三話題になっており、これからも話題になるはずの、ゲルツェンの『向こう岸から』とはどんな状況の中で書かれたいかなる作品であるについて、大まかな知識を確認して置くことは、後の議論のためにも必須の前提であるように思われる。

『向こう岸から』は 1847 年から 1850 年にかけて断続的に書き継がれたエッセイ集である。この時期と言えば、フランスの 1848 年 2 月革命が、6 月事件を経て崩壊し、さらにル

イ・ボナパルトが先ずは大統領として、ついで国王として政治の舞台に登場する時代である。私生活について言えば、ナタリアとヘルヴェークと不穏な関係に落ちいつてゆく過程と重なる。(1847年12月～50年4月)

これは全部で以下の8篇のエッセイから成っている。①嵐の前、②嵐の後、③単一にして不可分なる共和国の第57年、④VIXERANT! (彼らは生き残った!)、⑤CONSOLATIO (なぐさめ)、⑥1849年へのエピローグ、⑦OMNIA MEA MECUM PORTO (われはわがすべてを自らと共に運ぶ)、⑧ヴァルデガマス侯ドノソ・コルテスとローマ皇帝ユリアヌス。

この著作をそれが書かれた時代状況の中において読めば、直接的には何よりも「1848年革命」を批判する書物である。ゲルツェンによる「48年革命」観ポイントは、この革命がフランス革命と同様、「民衆(ナロード)の革命」が「ブルジョアジー」に篡奪され、自由と民主主義と共和国との名の下に、大量の民衆の血が流されたことへの批判である。しかも、根本的な異議申し立てをしていたはずの「社会主義」者もこの惨劇のなかでいかなる役割も果たしえず、むしろ、事件後の官憲の探索を前に、「ペテロの否み」を繰り返し、他方、既に破綻した「革命」の宗主権を巡って内輪もめの耐えない有様をまのあたりにして、西欧の「進歩の思想」に幻滅し、ついには西欧文明そのものの崩壊と破壊を叫ぶことになるのである。6月事件の直後に書かれた「嵐の後」はこんな文章で終わっている。この著作の中でも最もエクセントリックな文章なので、以下に引用しておく。

「パリは裁判もしないで銃殺を行った・・・この血から何が出てくるのか。誰も知らない。しかし、何が出てこようと、この狂乱と復讐と軋轢と報復の業火が、新しい人間を圧迫し、その生きることを妨げ未来の到来を妨害しているこの世界を滅ぼすことで十分であろう。それで結構なのだ。混乱と破壊こそ万歳なのだ。

Vive la mort! (死よ、万歳!)

しかして、未来が確立されるように。」(ゲルツェン; VI-48ページ、外川継男訳『向こう岸から』、現代思潮社、1970年、71ページ)

このような議論のプロセスで、彼は、啓蒙主義の説く合理主義の有効性、キリスト教思想の説く調和した未来の約束など、「大きな歴史理論」、「文明理論」、進歩史観といった、中世以降、近代も含めて西欧思想が大切に守ってきた規範的思想に対して懐疑の目をむけることになる。そして、遂には歴史の必然性を否定し、「偶然性の哲学」を説くにいたるのである。

おおよそこのような本への序文の中で、バーリンはゲルツェンを同時代の人であるトクヴィルとマルクスのそれと比較して次のように書いている。

『『向こう岸から』は1848年の壊滅を扱っているが、そこにはトクヴィルの有名な『フランス革命の日々』トクヴィルの回想』(岩波文庫)に見られるような超然とした皮肉な調子はないし、また、カール・マルクスの同じテーマについての二つのエッセイ『ルイ・ボナパルトのブリュゲル18日』『フランスにおける階級闘争』のように、特別の歴史理

論の応用として書かれているわけでもない。ゲルツェンは個々人や党派を正当化するために書いているのでも、特別の歴史哲学を披瀝するために書いているのでもない。しかし、彼もまた状況を叙述し、さまざまな党派や個人や階級の見解や野望や希望や、そして更には彼らの社会的歴史的ルーツを検証しようとしているという点でトクヴィルやマルクスと似ている。」「時代の鋭い予言的な観察者としては、おそらくマルクスやトクヴィルに比肩されるが、モラリストとしてはそのどちらよりも興味深く、独創的である。」(Berlin Introduction to *From the Other Shore* by A. Herzen Oxford Univ. Press, 1979. xv)

その所以はゲルツェンが歴史や社会の理解あるいは解釈における普遍的・究極的原理の有効性を疑い、むしろそのような原理が先ずは思想における、ついでは政治におけるデスポチズムを生み出す危険性を察知する慧眼さを持っていたからである。バーリンはさらに続けて書いている。

「普遍的で究極の規範を定式化することは原理的に可能であるということを、バイロン風の自己脚色やニーチェ流の誇張なしに否定するということは、19世紀には滅多にお目にかかれない考え方である。しかもそれが、道徳的想像を授けられた経験主義者と語るべき真に知的な何かをもつ実存主義者とを結ぶ架け橋が形成されている今日よりもはるか以前に徹底して語られているのである。それは右をも左をも撃つものであった。ロマン的歴史家もヘーゲルも、そしてある程度カントも、功利主義者も、超人も、トルストイも、芸術の宗教も、〈科学的〉〈進化論的〉倫理も、ありとあらゆる教会も。・・・ゲルツェンが特別の怒りをもって糾弾するのは、ある種の抗し難い、しかし遠い未来の至福の名に於いて未曾有の悲惨と不正を大目に見ることによって、野蛮な残酷さを正当化するために普遍的原理に依存する者たち、今日に生きる千人を殺すことを、それによって見えないいつの日にか、百万人が幸せになるのだと約束して、擁護する者たちであった。」(同前、xviii)

さらに、バーリンはゲルツェンのこのような思想を近代ヨーロッパの啓蒙家、懐疑家の伝統の中に位置づけている。

「20世紀に生きる者には、偉大な利他的体系の専横は殆ど思い返す必要もないほど、記憶に新しいところだ。一方に、鎮圧する解放者、〈普通選挙の算術的汎神論〉そして〈共和国への迷信染みた信仰〉、そして他方に、少数派に対する情け容赦のない傲慢。ゲルツェンはしかし、一世紀前の、民主主義の雄弁がその極に達した時の作家であった。その時代、冷たい心の個人主義者は敵であった。あるいは聖職者の専制も王朝の専制も共に敵であった。そして、これらに抗して社会主義者やカトリック信者やヘーゲル主義者や実証主義者たちの壮大なヴィジョンをもったユートピアやその他ありとあらゆるユートピアが、19世紀の偉大な形而上学者や教団の創始者の間に興っていたのである。これが支配的な潮流であった。そしてゲルツェンは知的にも、道徳的にも、このような潮流に抵抗したのである。何故ならば、それは彼には個人の自由を脅かすものに見えたからだ。西欧の伝統の中の思想家として、彼は啓蒙家的であり、懐疑家的である。彼はエラスムス、モンテーニュ、バイル、フントネッリ、ヴォルテール、コンスタン、フンボルト、そしてイギリスの急

進的哲学者たち、そして、いどこにあってもあらゆるデスポチズムに対して、それが司祭か王か、あるいは独裁者のそれであるか関係なく、個人の役割を極小化し、その自由を抑制し、その自己表現への希求を抑圧し、彼に向かって揺るぎなく全能のそして永久不滅の宇宙の偉大な法や制度に平伏するよう命ずる、巨大な宇宙論の非人間的現れにおけるデスポチズムに対して、抵抗する人々に属している。」(同前、x ix)

以上で私はバーリンのゲルツェン論を自己流に紹介してきた、しかし、念のために言っておけば、これは私の視点からするバーリンのゲルツェン論であって、ケリー自身によるバーリンのゲルツェン論ではない。ここは本来ケリーのゲルツェン論を紹介する場であるから、何も私のゲルツェン論はおろか、私の要約によるバーリンのゲルツェン論が顔を出すまでもないことは重々承知しているのだが、それにも拘らず何故私の要約によって敢えて掲げたのは、バーリンのゲルツェン論のこの部分にケリーが研究していないことが余りに惜しく思われたからだ。かと言え、ケリーの要約による「バーリンのゲルツェン論」と私のそれとの間には重点の置き方において若干異なり、それが私のゲルツェン論とケリーのそれとの違いを反映しているように思えたからだ。(本稿Ⅷを参照)

私が『向こう岸から』への序文におけるバーリンに依拠しつつ、「反デスポチズムの思想家ゲルツェン」というイメージに注目したのに対して、ケリーは『ロシアの思想家たち』におけるバーリンに依拠しつつ、バーリンがゲルツェンを多元主義的な世界観や政治的複数主義を指標とする「リベラル」の一人として位置づけていることに主として着目している。ケリーはバーリンの見解を以下のように紹介し、自説の開陳に代えている。

「バーリンのロシア思想への関心は リベラル派のそれと同様、リベラルな価値への信念と結びついている。しかし、彼らがこれらの価値は立憲民主主義の法的政治的構造と分かちがたいと信じているのに対して、真にリベラルな多元主義は社会的存在の諸問題の普遍的な解決法は一つだと言う考えとは両立しない、とバーリンは言うのである。ジョン・スチュアート・ミルも、代議制民主主義が望ましいが、これはあくまでも〈時と場所と環境〉による、と言っている。ロシアのナロードニキたちの無政府主義的社会主義を、共産主義者やリベラルな歴史家たちはともに安易に捨て去ってきたが、バーリンに言わせれば、これは正しくない。彼の示唆するところによれば、ロシアの急進的思想家たちは彼らを批判する人々によって強調されてきた教条的功利主義のみならず、1917年に初めて打ち碎かれたリベラルなヒューマニズムの強い伝統の礎をも築いたのだ。いずれの流れも従来の政治的カテゴリーの一角を占め、1830年代の末から1840年代にかけてロシアを風靡したヘーゲルの圧倒的な影響にまで遡ること可能である。一方において、急進派も保守派も共に、ヘーゲルの肯定的なドクトリンや、歴史は真実と正義の目的に向かって進むというヘーゲルの歴史的・神義論に魅惑されたのである。しかし、バーリンが強調するように、人間とそれに関わる事物は類別されうるし、その振る舞いは厳しい科学的法則によって予見されうるという啓蒙主義的楽天的信念を掘り崩す、ヘーゲル主義の否定的側面に深く影響された思想家が少数ながらも存在したのである。」(2・3) ゲルツェンとはそのような少数の思想家

の一人であると、ケリーはバーリンと共に規定するのである。

さらに別の箇所（第一章「複雑なヴィジョン」）からも引用して置く。「一元論（monism）的ヴィジョン」の歴史的・心理的ルーツと、「多元論（pluralism）的ヴィジョン」の希少性に関するバーリンの所説を説明した部分である。

バーリンによれば、「ヘーゲルやマルクスの基盤の上に築かれた偉大な全体主義的構築物」は、一元論的ヴィジョンの大いなる事例であるが、これは「恐るべき異常」というよりはむしろ「西欧の政治思想の主流流によって分け持たれた中心的仮定の論理的展開」であり、その根底にあるのは「一つの普遍的な目的から派生する基本的統一（fundamental unity）である。」（16）「諸個人を抽象的な歴史の力の道具と見なす非人間的ヴィジョン」ともなるこの一元論的ヴィジョンの「最も極端な形態は、政治的実践の場で犯罪的な適用を見てきたとは言え、バーリンはこの信念そのものを病んだ心の産物として片付けることは出来ない」と強調する。それはあらゆる伝統的道德律の基礎であり、人間の内的分裂の意識と失われた神秘的統一性への憧れに発する、深い癒し難い形而上学的要請に根差しているのである。」（16）

このように、一元論的ヴィジョンが「人間の基本的な要請に答えようとするもの」であるのに対して、「真に首尾一貫した多元主義」は、それを保持し続けるために「強い意志と知的勇氣」を必要とするがゆえに、「歴史上稀にしか見られない」と、バーリンは信じている。「それは諸々の価値のあらゆる争いはシンテーゼによって最終的に解決され、望ましい諸々のゴールはすべて和解させられるはずだ、という考えを拒否する。それは人間の生み出す諸々の価値と言うものが、等しく神聖で、等しく究極的でありながら、お互いの間に位階秩序的な関係を打ち立てるいかなる可能性も持たず、お互いに排除しあうものであるということ」を認める。従って道徳的行為には、普遍的な基準の助けも無いままに、両立し難い、しかし等しく望ましい諸々の価値の間に苦しい選択を為すことが含まれることになる。」「バーリンの考えによれば、道徳的不確実性は永遠に続くかもしれないが、それは己の自由の真の本性を認めることに対して支払われなくてはならない代償である。国家や教会あるいは党による方向付けに抗してでも自らの方向に拘ろうという個人の権利は、人間の多様な目的や志がいかなる普遍的な基準によっても評定されたり、なんらかの超越的な目的に従属させられたりすることがありえないと考える以上、明らかに最も重要なものである。しかし、この信念はある種のヒューマニストやリベラルの気構えの中では自明のものであるとはいえ、首尾一貫した多元主義の帰結は痛みを伴い、人間関係を損ないかねず、そして、西欧の知的伝統の中心的でいかなる批判もなく受け入れられてきた仮説の幾つかをラジカルに掘り崩すことになるが故に、こうした気構えが余すところなくはっきりと語られるということは滅多にない、ともバーリンは述べる。ヴィコやマキャヴェッリ、ゴットフリードやヘルダーについての珠玉のエッセイや『歴史の必然性』（1954年）の中で、バーリンは多元主義の諸々の帰結を明瞭に語った数少ない思想家たちは、常に理解されなかったし、かれらの独創性は正当な評価を受けなかった、ということを示した。」（17）

バーリン（とケリー）はゲルツェンの多元主義的世界観をヴィコやマキャベッリらのそれと同列におき、彼を『『ロシアの思想家』のヒーロー』（22）と呼び、さらにこう書いている。「ツルゲーネフ流の繊細なヴィジョンとトルストイにも比肩しうる真実への自己犠牲的関わり方とを併せ持ったゲルツェンは、その意味において、勇敢でもあったし同時に気品があった。彼は、バーリンにとって政治的知恵のエッセンスである、一貫した多元主義的観点を極めて豊かに持っていたのである。」（23）

III

ケリーはバーリンの「多元主義のリベラル」というゲルツェン論を下敷きとして、それをさらに拡張し、現代思想におけるゲルツェンの存在意義にまで言い及ぶ。つまり、「ポスト・モダンの思想」状況への警告をゲルツェンに読み取ろうというのである。

では、ケリーはポスト・モダンの思想はどのような問題を孕んでいるのか。彼女の見るところによれば、「〈ポスト・モダン状況〉はさまざまに定義されてきたが、一致するところは、われわれはもはや神とか理性とか歴史といった、何らかのユニヴァーサルな基盤に信を置ける礎を持つことは出来ないという認識を、その基底的な内実として受け入れることである。」「現実はもともと断片的であり、歴史は決まった方向のない流動体だと言う考え方が、知的分野のあらゆる範囲に及ぶ新しい理論的発展の共通の地盤である。」（4）

だが、伝統的な信念が融解することによって日常生活に瀰漫しつつある「ペシミズムとシニカルなニヒリズム」は、現実においていかなる機能を果たしているかと言えば、精々「社会や政治の現状に対する姿を変えた弁明」に過ぎず、結果においてそれは「《現実》は意味と価値、即ち現実を現に構成している議論（ディスクール discours）によって徹頭徹尾成り立っているという言い分」に墮し、「現存制度への確固たる理論的根拠に則った批判すらも、無視されて省みられないのである。」つまり、ケリーには、「ポスト・モダン」の論法が複雑化した社会現象を前にして、不可知論、判断停止の弁明として使われているに過ぎない、という認識があるのである。そしてこのような雰囲気再びファシズムの温床になかねないことを危惧する。「同じようなムードは、〈自己生成 self-becoming〉や〈人格的現実性（personal authenticity）〉についての生半可に理解されたニーチェの思想によって煽り立てられ、かつては大量殺戮に熱心に参加する者たちを生み出した。」（5）

そうした危機的状況を前にして、「私の信ずるところによれば、ロシアの経験は時期を失する以前に関心を払われるべき教訓を含んでいるのである。」（5）

では、「われわれ」が「教訓」とすべき「ロシア思想の経験」とは何か。

「ロシア革命の先立つ一世紀において、ショウペンハウアーやダーウィンやニーチェや、今日ポスト・モダンの思想の鼻祖と見なされている草分け的思想家たちの理論は、知識人たちが捉え、行動できないことへの代償として、知的大胆さという偉業へと駆り立てて行った。彼らの議論は、ロシアの専制が近代国家に似た何者かに自身を変貌させようとする、加速度的な社会的変化を背景としてなされた。今日のポスト・ソヴィエトのロシアにおける

ように、多数の知識人たちは社会の道德統合が崩壊して行く過程を目の当たりにして恐れをなし、終末論的信仰を再確認することに逃げ場を探した。ある者たちがドストエフスキーのように、信仰と懐疑の間で逡巡していたのに対して、ニーチェのように、哲学を〈自ら進んで氷の中や高い山の上に〉住むことと同じと理解した少数者は、1830年代にドイツの急進的ヘーゲリアンたちによって始められた、形而上学的思想への批判の知的帰結を仮借なく追及した。」(6)そして、ゲルツェンの行き着いた「もう一つの岸」は、数ある体験の中のから得られた、もっとも注目するに値する思想的境位である。「われわれは彼(ら)から今のポスト・イデオロギーの時代における自由の幾つものヴィジョンの中で何を選ぶべきか、よりよい選択の術を学ぶことになるだろう。」(7)

IV

ケリーは19世紀ロシアの思想を総括して、そこに3つのタイプを認める。第一は、「存在の葛藤の中に超越論的な意味を見出そうとする態度」「ヘーゲルの海に踵を浸しながら、形而上学の岸边に戻り、そこから時代の知的混乱や社会的統合の崩壊を、宗教や合理主義のタームによって様々に定義された、より完全な秩序への移行過程と解釈しようとする」タイプ、すなわちユートピア志向のタイプと、第二に、このユートピア志向と「葛藤こそが存在の中にあるすべて」と観念し、ペシミズムに陥るアイロニー志向とに引き裂かれるタイプ、そして第三に「転変して止まるところを知らない偶然的な存在を予見し規制しようとする、普遍的なシステムや理想の権限を疑問視することによって、形而上学に対する反逆を徹頭徹尾貫徹しようとする少数者」の立場。これはアイロニー志向とユートピア志向を共に克服することを目指すタイプで、ケリーによればその中心にいるのがゲルツェンなのである。(7)

第2編以下の各章では、これらの三つのタイプに即した叙述(特に大改革期以降)がなされることになるのだが、序論は最後に書かれたものであるのに対して、いずれの章も様々な機会に書かれた独立した論考なので、必ずしも序論の問題設定、あるいは論述の枠組みに沿っているわけではないし、また記述に重複も多い。しかし、それでもゲルツェンが全編を貫く赤い糸としての役割を果たしているという点において、かろうじて統一を保っているのである。

第2編では「ユートピア」と「アイロニー」に「引き裂かれた」思想、つまり、上のまとめに従えば、第二のタイプが扱われている。具体的には、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、トルストイ、そしてナロードニキが主たる論述の対象である。

第3章「知識人たちのカーニヴァル」では大改革期の思想的分岐が概観される。ケリーによれば、この時期はこれまで疑問の余地なく受け入れられてきた信念に疑問符がつけられる時期で、これらを否定することこそが「唯一正しい生き方に向かっての最初の一歩であると信ずる者たち」と「芸術を政治の具にすることによって人間の創造性を規制しようとする急進的な批評家たちの願望に抗議するリベラルなヒューマニストたち」との間に戦

線が設定されるのを見ることができる、と言う。そして、かれらはいずれも「確実なものがなくてはならないという思い」と、「教条的な思想に対する抵抗」との葛藤にいかなる解決をも見出すことができなかったのである。(7)第4章、第5章、第6章はこの葛藤の跡をそれぞれドストエフスキー、トルストイ、ツルゲーネフの生涯と作品の中に探ろうとしている。以下、その総括的部分を引用しよう。

「ドストエフスキーは自分自身を不和と統合の崩壊との年代記作者と見なしていたし、ツルゲーネフによる左翼の教条的オプチミズムへの挑戦は、これに劣らず教条的なショウペンハウアーのペシミズムに究極的な根を持っていた。また、芸術観と道德観における矛盾を解決しようとするトルストイの格闘は、思想の歴史における大いなる悲劇的ドラマの一つである。」(7)

第7章ではナロードニキ運動が取り上げられている。これについての総括は以下の通りである。「ロシアのナロードニキ運動は急進的な社会変革と、権威主義的方法や体系の拒否とを和解させようとした。しかし、それはリベラルなエトスとその構成メンバーに対する全人格的な献身への要求との間の葛藤を解決することができなかった。」(7)

第8章に言う「自己検閲」とはベリンスキー以来の「急進的批評家たち」に固有の伝統で、「革命の大義」に悖る思想への仮借なき批判を本質としている。このような傾向をゲルツェンは『向こう岸から』の中で「民主主義の正教」と呼び、革命が本来的に指向する自由と解放のエトスとは相容れないメンタリティとして批判しているが、この章で取り上げられているのはこの伝統で、ケリーはこれを「ナロードニキ運動の道德的エトスの所産」(135)とも名付ける。

ナロードニキを直接の継承者とするこの「伝統」が齎す「道德的な腐食作用」に対して、20世紀の初頭に手厳しい批判が現れる。これが第9章の課題で、「道標派」によるインテリゲンツィア批判が中心となる。ケリーは「道標派」のインテリゲンツィア批判を「革命の内外から起る〈価値の再評価〉を求める声」と名付けている。(7)

第10章に言う「混沌の都市」というのはペテルブルグのことで、一方では「革命」が生み出す新しい価値の実現へのユートピア的期待と、他方、「革命」の現実が齎す幻滅と懐疑の間で揺れ動く、ペテルブルグの知識人たちが主人公である。

第3編は宗教的信条に基づくか合理主義的判断に基づくかは問わず、宇宙にある種の秩序の存在することを認め、その実現を目指す「ユートピア」志向タイプが取り上げられる。第一がチチャーリン(第11章)。彼はしばしば「原型的な政治的穏健派とか左翼の行き過ぎに対する漸進主義の擁護者」(9)などと言われ、「ソヴィエト的社会主義に行き着いた19世紀の急進派の議論に対する有力なオルターナティブ」と評価されているが、ケリーはこの見解には批判的で、つまるところ、「急進的な変化への彼の反対の立場のモチーフとなっているのはリベラルなプラグマチズムではなく、ヘーゲルの理論の保守的変種であり、彼の確信の源にあるのは、ロシアの専制政治は全ての歴史的発展が向かいつつある〈合理的国家〉への途上の必然的な段階であるという認識である。」(9) しかも、彼自身、「リアリズム

ム」を標榜してはいるものの、ヘーゲル「法哲学」の理論・理想をロシアに援用しようという発想そのものが、すでに「ユートピア的」であったと、ケリーは言う。その意味で、彼は「リベラル」と言うよりはむしろ「官僚のサン・ジユスト(フランス革命時の山岳派の最左翼の論者。国王の即時処刑と革命的独裁を提唱。急進的国権主義者というほどの含意)」(225)と呼ぶべきだというのが、ケリーの結論である。

確かに、1863年のポーランド蜂起に対するチチューリンのポーランドに対する徹底的な弾圧の提言、学生運動への高圧的な論調などを見ると、少なくともリベラルな「メンタリティー」の持ち主ではなかったという印象は拭い難い。果たして、心性的にリベラルでなければ思想的にもリベラルと呼ぶべきでないかどうか、判断は難しいところではあるが、少なくとも、ケリーの次の文章には全く同感である。

「リベラリズムがいかに多様なコンセプトを持つといえども、それは恣意的な権力を正当化する理論だけは排除されねばならない。しかし、チチューリンはそれをした。しかも一時的な逸脱としてではなく、40年以上にわたり、それをした。」(238)

第12章の主人公バクーニンは原型的な自由の精神として、あらゆる体系創造者に対する反逆におけるアナキーな自然発生性の体现者として、西欧のラジカルの中に追随者を引き付けてきた。しかし、ケリーに言わせれば、「彼の〈絶対的自由〉という目的はあらゆる葛藤を最終的な全一性(wholeness)の中で解決しようと言う夢によって駆り立てられた、ドイツ観念論の構築物である。」(9)

第13章に言うロシアの〈ニーチェ的マルクス主義者〉はボリシェヴィキの権威主義に対する草の根的なチャレンジを代表するものと解釈される。だが、「確かに彼らが唱導したのは、人間は新しい環境に適応する過程で、真実を発見したというよりは作り出したのだということである。しかし、彼らもまた、人間の個人性は一時的な適応形態であって、歴史が向かう最終的段階においては、個人の目的と集団の目的との間には葛藤も区別もなくなるだろう、と主張している。」(9)

第14章でケリーはロシア・アヴァンギャルドの芸術家たちについて、次のように書いている。「彼らはスターリンによって未熟児のままに圧殺されたが、ロシア人たちがポスト・ソヴィエトの世界に生きるためのインスピレーションを求めて向かうべき、創造的な観念論の活気に満ちた岸辺を体现していると言われてきた。しかし、集団意識という神話と機械への信仰に基づいた新しい種類の人間という彼らの理想は、スターリンの手先たちに格好のインスピレーションを提供することになったのである。」(9)

かくして、第3篇の総括は以下の通りである。「これらの諸個人あるいは運動は合理的なユートピアにとって中心的な全ての目的の究極的な調和を公言しており、いずれの場合にも、この信念はデスポチズムとの共謀(collusion)に行き着いたのである。」(9)

V

第4部の3つの章の主人公は、言うまでもなく、ゲルツェンである。

まず、長くなるが、序論におけるケリーの包括的評価を引用することから始めよう。

「ゲルツェンは世界の包括的で目的論的な説明への信念が腐食したことの意義を把握した最初のヨーロッパの思想家の一人であった。自然科学の経験論的方法に対する若い頃の関心は彼をして歴史や自然における直線的発展と言う理論に疑問を持たせた。『種の起源』よりも 10 年も早く、彼は『向こう岸から』（ヘーゲルが到りつくことの出来なかった岸）というエッセイ集を刊行し、その中で、宗教的、合理主義的進歩の理論が、観察しうる世界を作り物の目的や終末の光で価値付けることをわれわれに教え、偶然を単に破壊的な力と見なすことを教えた、一つの文化状況の所産にすぎないと説明した。歴史の進歩が持つ固有な合理性への信念に対する彼の批判は、ドストエフスキーの『地下生活者の手記』にその反映を見出している。しかし、ドストエフスキーは自らの宗教的信念と世界における摂理的秩序の不在とを和解させることは出来ずなかった。そして彼はゲルツェンを破壊的なペシミズムのゆえに批判した。この見解は後のロシアの思想家に影響を与えたが、その中にはロシア哲学の優れた歴史家ゼンコフスキーをもいた。彼はゲルツェンによる世界におけるア・プリオリな秩序の否定を絶望の表明と解釈したのであった。

しかし、ゲルツェンは哲学的ペシミズムを厳しく退けた。彼に言わせれば、これは、われわれこそが宇宙の中心だというお気に入りの幻想を喪失したことに苛立ちへの不機嫌な過度の反応であり、時間と偶然に従属する存在としてのわれわれの地位のもたらす帰結を直視することを拒否するものであった。少数ながらも重要なロシアの思想家たちが彼に従い、予め計画されていない世界においても自由も道徳も存在しうると主張した。〈どちらの道標か〉の中で示したように、思想家ストルーヴェが 1917 年の革命に連なる数年間、インテリゲンツィアの終末論的信念に抗してヒューマニスティックな十字軍を興した時、彼はゲルツェンに依拠していたのであった。歴史の高みから見ると、ゲルツェンと二人の他の作家、チャーホフとバフチンとの間に類似を認めることも出来るだろう。彼らは時間と自由の間の関係についてのわれわれの理解を形成することを助けてくれたのである。」(10)

この概評を踏まえて、ここでは第 15 章以下をやや詳しく見てゆきたい。その際、第 15 章「ゲルツェンとドストエフスキーにおけるアイロニーとユートピア」は第 4 章「ドストエフスキーと引き裂かれた意識」とをまとめて紹介する。

これら二つの章を併論する場合、第 4 章から見て行った方が分りやすいと思われる。

第 4 章の表題「引き裂かれた意識」とはドストエフスキーにおける理性と信仰の葛藤のことを言っている。一般には 1854 年 2 月、流刑地からフォンヴィーヅナに宛てて書かれた手紙を根拠として、ドストエフスキーの内心において理性と科学に対して信仰が勝利するのは、流刑時代の体験によるとされている。しかし、ケリーは、むしろこの時代に「どこに行き着くことになるのか定かならざる葛藤」が始まると考えている。この手紙の中で、ドストエフスキーは自分のことを、「〈時代の子〉、〈われながら抗し難い言い分が募れば募るほど、己が魂のなかにいよいよ強くなる信仰への飢え〉によって墓場まで悩むことを運命付けられた」〈不信仰と懐疑の子〉と呼んでいる。そして、彼の唯一の安らぎの瞬間は、

〈キリストより美しく深遠で共感を呼ぶ、理性的で勇敢で完全な存在はない〉という信仰から来る。〈もし誰かが私に、キリストに真理はない、現実の中では真理はキリストのうちにはないと証明して見せたとしても、わたしはむしろ真理とよりもキリストと共のあることの方を良しとするだろう。〉(59)

「理性に対する信仰の最終的で明白な選択」を証明するとされるこの告白に、ケリーは別様の解釈を施している。

「私の考えによれば、問題のこの箇所もこの問題についてのその後の彼のたくまざる自己表白も、いずれも、ドストエフスキーが理性と信仰を巡る議論において、この種のヒエラルキーをすでに確立していたとか、彼がこの葛藤をよくあるキリスト教のディレンマと見なしていた、といったことを示すものと解釈することはできない。上に引用した最後の文章は、自分が究極の真理についての互いに排除しあうヴィジョンに引き裂かれているという感覚を、明白に示しているように見える。ドストエフスキーはこのような状況をキリスト教徒なら必ず体験する常なる苦悩としてではなく、彼の時代に特有の苦悩と見なしていたのである。」(59-60)

では、帰還後のドストエフスキーの前にあったのはいかなる現実であったか。何よりも、人間関係を損なうおぞましい個人的体験、保守派の思想的な破綻、正教会の墮落、その一方で、社会改革に献身する 70 年代の純真な若者の登場—こうした現実を前にして、ドストエフスキーと己の若き日の情念を改めて想起する。ベリンスキーがドストエフスキーの中で復権するのはこの頃のことである。ケリーは書いている。

「1872 年にロシアに戻ってから、彼は超保守主義の新聞『市民』の編集を引き受けることにより、極右勢力と緊密に結びついた。しかしながら、次の 10 年間を通じて、彼はロシアにおける道徳的力の配置関係は国外で見えていたのとはかなり違うことを発見することになる。彼は同時代の保守派と急進派の戦いを、西欧からの唯物論の毒に対して〈ロシアのキリスト教〉を守る戦いとしてよりも、むしろ、現存社会秩序を是認するために宗教を用いる体制派的保守主義と、ベリンスキーの急進主義や若かりし頃の自らの社会主義を彷彿させる急進的なヒューマンイズムとの対立と見なすにいたる。」(63)

そして、若かりし日の彼と若い世代とが分け持つ兄弟愛というヒューマンな理想とキリスト教倫理とが似ているというこの認識は、本来キリスト教にのみに帰属させるべき道徳観念を脅かすものであり、当時自分が果たしていた西欧的理性の批判者という社会的役割に疑問を抱かせるものであった。ケリーはこの葛藤を「プロパガンディストと芸術家との衝突」(73) と呼び、晩年の大作を貫くモチーフを「この分断された本性の解剖」と規定する。そして、ドストエフスキーの「引き裂かれた意識」を総括して次のように書いている。

「理性に抗する感情の励ましに従うべしという、1854 年に彼が為した選択は消えることなく残ってはいたが、しかしまた、(彼の政治的ジャーナリズムの耳障りなドグマチズムにもかかわらず)、この選択に由来する内的分裂の感覚もあった。彼のもっとも偉大な作中人

物たちは、闘うだけでなく自分を貶めることも、そして、自分を裏切ることも真の道徳的生活から切り離し難い性質であるという、彼の個人的発見を具現している。こうした見方を大衆的に公言するわけには行かなかった。確たる道徳やイデオロギー的絶対者を支持する立場から、彼は自作に、より肯定的なメッセージを託さねばならなかった。もっとも偉大な道徳的絶対主義者の一人であったトルストイが、倫理的選択についてのドストエフスキーの観念の真の本質を最初に見破った（そして不快の念をあらわした）最初の人の人であったというのは注目に値する。ドストエフスキーが亡くなったすぐ後、批評家ストラホフに宛てた手紙の中で、彼は、ドストエフスキーがすでに預言者、あるいは聖人として崇められているという事実に、憤りと危惧の念とを表明している。『絶えざる葛藤の中にあった人間を、後世の人々の啓発のための台座に祭り上げることはすべきではない。』（1883年12月5日、トルストイ20巻著作集17：550）（78-79）

第15章「ゲルツェンとドストエフスキーにおけるユートピアとアイロニー」ではゲルツェンの「アイロニー」の特質が語られ、ドストエフスキーはそのような「アイロニー」の影響下にあったことが指摘されている。

そもそも、「ユートピア」的世界観とは何か。それはケリーによれば「神の摂理であるか普遍的理性であるかを問わず、あらゆる単一の一元的原理を、存在するすべてのものの意味と目的とに対するキイとして、また、これを一旦理解し承服すれば人間を調和と幸福という予め定められた状態へと導いてくれる永遠の法の源として提示する、形而上学的世界観」のことである。他方、「アイロニー」はこのような世界観に対して、「世界は本質においてパラドキシカルであり、アンビヴァレンツな態度だけがその矛盾に満ちた総体と把握することができるという事実を承認すること」によって挑戦しようとする。（308）

だが、「アンビヴァレンツな態度」とはゲルツェンにおいては単なる「相対主義」を意味しているのではない。多くの場合対話形式で進行する『向こう岸から』の諸章は、ともすれば、ゲルツェンのこのような「アンビヴァレンツな態度」の現われと見なされ、しかも、ゲルツェン自身と目されているアイロニストがその論敵（多くの場合、若いロマンチストと設定されている）の反論にたじたじとなることを取り上げ、「自らの寒々しい懷疑主義に苦しめられたゲルツェンは、二人の登場人物たちの間を行きつ戻りつしながら、引き裂かれている」とすら言われている。『向こう岸から』が「絶望の書」とか「深いペシミズムの書」とか「ニヒリズムの書」と評される所以である。

だが、ケリーに言わせれば、「テキストを虚心に読めば、このような考えが生まれるはずはない。ここでは歴史の事実や人間の本性や、ゲルツェンが（痛みを伴いながらも）自らのものと認めている世界観と、自らを欺く心もとない慰めとの間には明確な選択がなされているのである。さらに、これがペシスティックな、ニヒリスティックですらある著作だという見方は、ゲルツェンの主要な主張を読み違えていると、わたしは信ずる。彼は人間存在の意味と目的を否定しているのではなく、人々はこれらの意味や目的をお門違いの場所に探している、といているのだ。未来や来世にではなく、現在のそれを探すべきだとい

っているのだ。偶然性から逃げる術を探す代わりに、われわれはこれを自分たちの自由と創造性の源泉として受け入れるべきだ。」ケリーによれば、ゲルツェンはそう言っているのだというのである。そしてケリーは、相対主義に陥って主体的な判断力を欠如させた現代思想を乗り越える契機を、ここに見出そうとしている。(310-311)

これに対してドストエフスキーは、一方において西欧合理主義に汚染された青年の道徳的墮落を語り、その元凶としてゲルツェンの名を挙げ、正教を紐帯とした民衆的ロシアの共同体国家という「ユートピア」を対外的には喧伝してはいたが、しかし他方で、ゲルツェンがいち早く公言していたアイロニカルな世界観にも密かに共鳴していた、とケリーは言う。その端的な現れが『地下生活者の手記』であった。ケリーは「地下生活者」とゲルツェンとの表面的な相違にも拘らず、この作品は内的にゲルツェンと繋がっている、と考えている。というのも、彼女によれば、『地下生活者の手記』には『向こう岸から』の二つの中心的テーマが見て取れるからだという。第一は、「歴史における最終的目的という観念」煮に対する疑念であり、第二は「現代の知識人たちの形而上学的渴望を心理の文化的歪み」のせいだとする思想である。そして、「ゲルツェンのアイロニストと同様、地下生活者は自由を、偶然性を受け入れることに基づいた自己創造の不断の過程とみなし、生の法則を見つけるよりも、むしろ自分の生を創造しようとしている、そして、否定とパラドックスを通じて最終的な決定を逃れようとしている。」(315)

また、『作家の日記』の中の「皮肉屋」の相貌も表面的にはゲルツェンとは似ても似つかないが、しかし、内的にはゲルツェンに通じている。ここには「ゲルツェンが至るところにいる。」とケリーは書いている。例えばその西欧のプチブル批判はゲルツェンのそれと同じだ。

この他にも、例えばこんな記述もある。「1876年12月の『日記』の中で、ドストエフスキーはゲルツェンが『向こう岸から』の中で真面目な若者をからかう調子を髣髴させるようなやり方で、教条的な信念を攻撃している。彼は文学と実生活の双方から『多面性』が消え、代って新しい現象として『直線性』が現れつつあることを嘆いている。」(320)

何よりも興味深いのは、ゲルツェンの娘の自殺に関する日記にまつわる話である。

ゲルツェンの娘、エリザヴェータが1875年12月にフィレンツェで自殺した。このことをドストエフスキーは翌年10月の『日記』の中でと取り上げ、次のように書いた。

「そこには父親の家で子どもの頃から感染した生活現象の『直線性』に我慢が出来ず、それに対して憤激している魂が感じられる。……魂が無意識に直線性に耐え切れなくなり、無意識的に何かもっと複雑なもっと複雑なものを求めたくなったのである。」

ここでは娘の自死は父親の思想的破綻の所産と見なされている。

しかし、これには全く別の趣旨で書かれた未発表の草稿が残されている。そこでは娘の死は「天賦の才人、思想家にして詩人たるゲルツェン」の娘にふさわしくない。「ゲルツェンの娘ならもう少し『精神性』を持った人間でなければいけない」と書かれているのだ。

ドストエフスキーの作品の中でゲルツェンは西欧合理主義の汚染された急進的インテリゲンツィアの元祖として、概ね芳しからぬ役回りが与えられている。そして、ゲルツェ

ン流の無神論、主知主義、人間中心主義がもたらす道徳的な落とし穴を回避し、克服する道として、正教信仰という超越的原理によってロシアを、ひいては人類を救うというのが、ドストエフスキーの思想のライトモチーフであった。しかし、同時に、彼はこの原理の究極的な有効性を疑っている。そして、この懐疑にゲルツェンの影を認めざるをえなかった。書き換えられた日記のそのことがはしなくも露呈された、というのがケリーの所論である。この章の末尾の一文には「ゲルツェンとドストエフスキーの関係」についてのケリーの考え方が集約されている。

「ここ(日記の書き換えられた部分＝引用者注)におそらく、ドストエフスキーが『日記』の中で何故ゲルツェンをかくも明確に否定的に描いたか、ということの理由がある。ゲルツェンの個性がドストエフスキーの命題—生きることへの愛着、人間の人格への信頼は宗教的な信仰なしにはありえないという命題—に対する余りに強烈な反証であったがゆえに、彼はこの部分を印刷に付すことができなかったのだ。印刷された『日記』の中に現れているゲルツェンのひどく歪められた姿は、ゲルツェンのアイロニーが彼のユートピアに負わせた脅威感を雄弁に物語っているのである。」(325)

VI

第15章「ゲルツェン対ショウペンハウアー」では両者のペシミズムの相違がテーマである。そして、このテーマは必然的に第16章「神なる発明者—偶然性」の議論に連なる。以下の紹介ではこの二つの章を一体として扱っている。(因みに、「発明者たる神—偶然性 Случай, бог изобретатель」とはプーシキンの詩の一節からの引用である。その全体を訳出しておく。「啓蒙の精神が、／困難な誤りの子たる実験が、／パラドックスの友たる天才が、／そして、神なる発明者—偶然性が、／おお、いかに多くの奇跡的な発見を、／我々のために用意してくれていることだろう。」)

ショウペンハウアーは1788年の生まれだから、ゲルツェンよりは24歳年上にあたる。彼の主著とされる『意志と表象としての世界』が世に出るのは1819年のことであったが、この時、この著作は全く無視された。彼がヘーゲルの向こうを張って、同じ時間帯の哲学講義を開講し、人が誰も集まらなかったと言うエピソードが、この時代における彼の思想の不人気を象徴している。その彼が知識人たちの記憶の底から蘇るのは、やっと51年、『余禄と捕捉』によって主著を改定した時からである。これはゲルツェンの『向こう岸から』を書き終えたころのことである。

ショウペンハウアーにはヘーゲルに対する敵愾心に満ちていた。その敵愾心の根底にあったのは、ヘーゲル流の「グランド・ドセオリー」のまやかしへの懐疑であった。その歴史哲学に凝縮されているように、ヘーゲルにとっての現代は歴史の到達点であり、歴史が終焉した時代であったが、その内実はプロイセンによって統合された、あるいはその方向が確定したドイツ国家の未来への賛美にすぎなかったものであり、このまやかしを衝いて登場するのが若い世代のヘーゲリアン、「左派ヘーゲル主義者」であった。中流から下層の社会層の出身者であるある彼らにとって、ヘーゲルの美化したプロイセン国家は新しい抑圧

の体系以外の何ものでもなかった。彼らはヘーゲルの論理を援用することによって、新たな「グランド・ドセオリー」を模索した。その最大の成果がマルクス主義であった。

このような時代にショウペンハウアーは反ヘーゲルということで若いヘーゲル主義者たちと軌を一にしながらも、その根本的な相違は彼が絶対的な普遍妥当性をもったヴィジョンそのものへの懐疑を持っていたと言うことにある。彼の思想について概括的に言えば、彼にとって世界とそして歴史の真の動因は、人間の自らの〔生〕への非合理で盲目的な意志であった。この立場が神の摂理や自然科学や社会科学に基づく必然の法則という考え方と相容れない考え方であることは、明らかであろう。しかも、眼前にある現実、没落に瀕したダンツィヒの豪商の息子の目から見れば、嘆かわしいものでしかなかった。そこから「この世界は考えうる限りで最悪だ」というペシミズムが生まれることになる。そしてそのような現実からの出口として彼は東洋的なニヒリズム、神なき宗教である仏教に「救済知」を求めることになるのである。

再三触れているように、48年革命の挫折は、一方でヘーゲル流の「グランド・セオリー」やブルジョア自由主義の破産宣告であり、他方で、これを超えると証した諸々の社会主義や左派ヘーゲリアンの社会理論の未熟宣言もあった。しかも新しい「セオリー」はまだ見つかる気配もなかった。ショウペンハウアーのペシミズム、ニヒリズムが思い起こされるのは、このような思想的権威の不在の時代、空位の時代のことであった。そして、この流れはやがてニーチェに引き継がれることによって、19世紀後半以降の西欧思想に一つの流れを形成することになる。ニーチェの「権力への意志」という考えがショウペンハウアーの「意志としての世界」という考えにインスピレーションを得ていること周知の通りである。特に世紀末から第一次世界大戦へといたる時代、既存の社会秩序が崩壊し、従来頼みにしてきた価値の基準が権威を失い、方向感覚を失って浮遊する西欧の知識人たちにとって、闇雲な生への衝動を語るショウペンハウアーやニーチェの思想は格好の慰藉を齎すものとして復権した。ファシズムが生まれ育ち、そして成長するのはこのような時代のことであった。フッサールが「ヨーロッパ諸学の危機」(1935年)として認識したのは、そのような思想状況であったことも周知の通りであろう。

ゲルツェンにも目の前にある現実に対する深いペシミズムがあった。彼もまた、ブルジョア的民主主義、自由主義、そして社会主義の無効を宣言するが、しかし、それに代る「理念」、超越とか絶対とか永遠と言う観念と結びついた普遍妥当性をもったそのような「理念」そのものに疑問を呈する。そしてそのような「理念」の名の下で、生身の人間が犠牲に供せられてきた過去の歴史を振り返り、そのような「理念」そのものを「人間の自由と尊厳」の名の下で拒否する。例えば、彼は書いている。

「王冠を憎悪するだけでは足りない。フリジア帽をも尊敬することも止めなくてはならない。不敬罪を罪として認めないだけでは不十分だ。〈公共の福祉〉をも罪と認めなくてはならない。共和制、立法、代議制、市民の概念とその他の市民及び国家に対する諸関係についてのあらゆる考え方といったものを、今や人間が裁きにかける時が来ているのだ。」(IV

このような人間を犠牲に供して省みることのない超越的・絶対的「理念」を根底に於いて支えているのは、宇宙には人間と言う存在を超えたところに、法則（かつては摂理）と称するそれ自体の存在理由を持った価値が存在しているという、楽観的なヴィジョンである。ゲルツェンが撃つのはこのようなヴィジョンのオプチミズムである。『向こう岸から』の中で語られるゲルツェンの「ペシミズム」と「ニヒリズム」はこのようなヴィジョンを否定することに由来している。このことに関連するゲルツェン自身の言葉の幾つかを以下に引用しよう。

「新しい世界がわれわれの計画通りに建てられると考える根拠はどこにもない」のだ。(VI-25 ; 外川訳 34)

「もし、人類が何らかの結果を目指してまっしぐらに進んで行くな、そこのあるのは論理であって歴史ではない。」(IV-35 ; 外川訳 51)

「歴史においてはすべてが意志であり、全てが即興だ。前途には境界もなければ航路もない。あるのは諸々の条件であり、聖なる不安であり、生命の炎であり、また、道がある限りどこへでも進め、自分の力を試せという闘う者への永遠の呼びかけなのだ。」(IV-36 ; 外川訳 52)

歴史における偶然的要因の強調する立場は、歴史がどこかに向かって進んでいると言う中世のキリスト教思想や近代に啓蒙思想の前提それ自体を否定するまったく新しい立場である。ケリーはそのようなゲルツェンのことを「19 世紀の全ての偉大な楽観的な体系 - キリスト教神学、ユートピア社会主義、マルクス主義、コントの実証主義 - の根拠となった、宇宙には目的があるという信念が腐食しつつあることを予見した最初の思想家の一人」と呼び、さらに更に続けて書いている。「進化の過程において果たす偶然性の原初的な役割についてのダーウィンの発見、生の流転に見せかけの不動性を刻印する、仕組まれた言語の使用法に対するニーチェの暴露、フロイドによる無意識の力の開示、そして政治的ユートピアの失敗 - これらは全て世界が本来時間と偶然のなすがままに浮遊する断片的存在にすぎないという感覚を形成することを助けた。」(345)ゲルツェンの思想もそのような感覚の形成に寄与したと、ケリーは言うのである。

では、ゲルツェンの「ペシミズム」とショウペンハウアー（そしてニーチェ）のそれとはどこが違うのか。

ケリーによれば、「ショウペンハウアーのペシミズム」が「偶然性に依存することの帰結をひ弱にも回避しようとする」ことに根を持つのに対して、ゲルツェンが掲げる「足場」(scaffolding) はむしろ「アンチ・ペシミズム」のためのもので、それは「物事は深刻に悪いほうに向かっていることを理解してはいるが、チャンスはあることを希望してもいる」という。(327)これを別の箇所（第6章「ツルゲーネフのニヒリズム」。ツルゲーネフとショウペンハウアーのペシミズムの共通性を述べ、ゲルツェンの立場を説明した箇所）からの引用によって敷衍すれば、以下のように言い換えられる。

「ゲルツェンは歴史における偶然の持つ支配的な役割を、宇宙論的なペシミズムの原因とは考えず、むしろ、創造的な即興曲へのわれわれの能力を鼓舞するチャレンジとみなしていたのである。」(112)

(ケリーを離れることになるが) わたしは先にも引用したゲルツェン自身の言葉を、ここで改めてもう一度想起したい。

「歴史においてはすべてが意志であり、全てが即興だ。前途には境界もなければ航路もない。あるのは諸々の条件であり、聖なる不安であり、生命の炎であり、また、道がある限りどこへでも進め、自分の力を試せという、闘う者への永遠の呼びかけなのだ。」(IV-36; 外川訳 52)

ゲルツェンは不分明な将来を前にして、「偶然」(それも概ね不愉快な「偶然」)の出来事の集積たる「今現在」の現実を前にして、決してたじろいではないのである。このような気構えは究極的・絶対的・普遍的原理を否定するという意味において「ニヒリズム」と呼んでも、最早「ペシミズム」と呼ぶことは出来ないだろう。

ゲルツェン自身は「ニヒリズム」に二つの種類を区別している。それはロシアの60年代以降に登場した若い急進派の「ニヒリズム」とツルゲーネフを始めとする40年代の知識人の「ニヒリズム」である。ゲルツェンは前者を「エネルギーと憤激のニヒリズム」、後者を「倦怠と絶望のニヒリズム」と名付けている。日本語で言えば「否定主義」としての「ニヒリズム」と「虚無主義」としての「ニヒリズム」に該当する。

この区別はゲルツェンの論文「バザーロフ再論」の中でなされていることだが、ここではツルゲーネフのニヒリズムをショウペンハウアーのそれと比較した件があるので、(またしてもケリーの著作を離れることになるが)その前後を引用しておきたい。ゲルツェンとショウペンハウアーの違いについての理解を深める一助となるだろう。

「ニヒリズムとは構造をもたない論理であり、ドグマをもたない科学である。それは経験に無条件的に従属し、あらゆる帰結を一それらが、観察の結果として得られたものか、あるいは理性の求めるものであるかを問わず、いかなるものであれ一諦めを持って受け入れる。ニヒリズムは何ものかを何ものでもないものに変えるのではなく、何ものかと思われていた何でもないものが光学的なイリュージョンであることを示す。そして、また、それは、あらゆる真実が、われわれの幻想的な空想といかに矛盾しようとも、実際以上にまともであり、いずれにせよ、われわれが受け入れることを義務づけられているものであることを示している。

勿論、もしわれわれがニヒリズムを、事実や思想を何ものでもないものに変え、不毛な懷疑に変え、傲慢な腕組みに変え、無為に導く絶望に変えるものと理解するならば、最大のニヒリストの一人はツルゲーネフだろう。そしてもう一人はかれのお気に入り哲学者、ショウペンハウアーであろう。」(XX-349『バザーロフ再論』より)

「倦怠と絶望のニヒリズム」ーそれは「ペシミズム」以外のなにものでもない。だが、「エネルギーと憤激のニヒリズム」には「ペシミズム」を乗り越える契機ある。ゲルツェンの「ニヒ

リズム」はそのような「ニヒリズム」であった。ニーチェは目的の宇宙を直視するショウペンハウアーの勇気を讃えたが、ゲルツェンに言わせれば、これを「勇気」と呼ぶのは「虚勢」に過ぎず、有体に言ってしまうと、現実からの逃避に過ぎない。ケリーは『過去と思索』の一節(第6部9章「ロバート・オーウェン」)におけるゲルツェンの言に依拠して、こう書いている。

「有限な存在の計画をたてることも予見することもできない[この世界の]本質は、そこに生きる者の意気を阻喪させることも出来るが、同じように、励ますことも出来る。ゲルツェンが後のエッセイで指摘したように、誰でも歴史の切れ切れの即興曲の中に自分たちの詩句を挿入する自由がある。そして〈もし歴史が共鳴するならば、歴史は、彼の詩句が廃れるまで、過去がその血と思い出の中で沸き返っている限り、それを保持し続けるであろう。〉(XI-246、邦訳『過去と思索』第3巻262)」(348-349)

VII

「誰でも歴史の切れ切れの即興曲の中に自分たちの詩句を挿入する自由がある」とゲルツェンは言う。しかし、それは際限のない自由だろうか。ニーチェの言うように(そしてドストエフスキーが「憑かれた人々(悪霊)」に言わせているように)「神が死んだ今、人間には全てが許されている」のだろうか。ケリーは書いている。

「もしゲルツェンがニーチェに応えることが出来るほどに長生きしていたなら、おそらく彼は、自分たちのパースペクティヴを現実の上に移し変えることから独立した現実など存在しないとか、〈真実なるものは存在しない、全てが許されている〉とか、われわれの諸々の観念は(道徳的、社会的観念、そして科学的観念すらも)、全ての生ある事物を動かす唯一の力―権力への意志―のプラグマチックな戦略を正当化するために用いられる便宜的なフィクションに過ぎないとかいう、ニーチェの考えを受け入れることはなかったであろう。」(349)

ケリーに言わせれば、ゲルツェンから見ると「世界を非合理主義的諸力の混沌たる戦場であるとする考え方は、非現実的な期待の挫折に対する過剰反応」であり、それ自体すでに否定したはずの「形而上学的な偏見」にすぎない。(ケリーの解釈する)ゲルツェンによれば、世界を支配しているのは単なる混沌ではない。

「観察と経験が明らかにするところによれば、偶然性が作用するのは蓋然性を計算したり、出来事のある枠内で制御したり、(ユートピアに向けてではなく)進歩することをすらわれわれに許す諸々の法則の大枠の範囲内のことである。ゲルツェンの世界は、ニーチェのそれとは異なり、超人たち―自分たちのために自分たちで創った法以外のいかなる法にも従わず、あらゆる社会的規範や社会制度は生を否定する衆愚の価値に過ぎないと見なし、これらを勝ち誇ったように無視する超人たち―のための抜け道がない。ニーチェのファンタジーはポスト形而上学の時代に人間の社会がなりうるもの―すなわち、多様な道徳的哲学的ヴォキャブラリーをアイロニックな遊びの精神において実験する〈自己を実現する〉

諸個人の共同体一へのエキサイティングな期待として解釈されてきた。ゲルツェンならこのヴィジョンを歴史からのロマン主義的後退と見なしたことだろう。」(349-350)

偶然性は混沌から生まれるのではなく、蓋然性の枠内にあるという発想は、極めて経験的であり、いっそのこと常識的ですらある。このような視点をゲルツェンにもたらしたものは、彼の自然科学の素養である。この点に、ショウペンハウアーやニーチェとの大きな違いがある。

周知の通り、ゲルツェンは若い頃から従兄弟の化学の実験室に深い関心を寄せ、長じてモスクワ大学の「理数学部」に学び、学生時代には既に「自然界における人間の位置」(1832年)を書いて人間もつ生物学的側面に目を開き、「1月28日」(1833年)では惑星の合法的運動に対する彗星の非法則的(偶然的)運動の持つ宇宙的意味を考察し、これをピョートル大帝の改革の意味づけに援用している。そして卒業論文のテーマは「コペルニクスの太陽系の分析研究」であった。その後も自然科学への関心は途絶えることはなく、40年代の半ば、モスクワ大学の解剖学の講義に出席している。そして、哲学史の論文集に『自然研究書簡』という名を冠したことは、ゲルツェンの自然科学指向の強さを何よりも象徴している。47年以降、1870年にヨーロッパに滞在することになるが、その間、自然科学者で俗流とも称される唯物論者、カール・フォークトとの交流は途切れることはなかったし、息子のアレクサンドルはフォークトとの指導のもとで、生物学者となっている。

このような自然科学への関心をもってしては、自然をただ単なる混沌とする考え方を取ることは出来ない。自然界における変化は(これを進化と呼ぶかどうかは差し当たり措くとして)ある一定の可能性の枠内で生じているのである。そして、人間もまた自然の一環とみなすゲルツェンの見方からすれば、歴史もまた自然の変化の特質の枠内にあるのである。彼は早くも『自然研究書簡』(第一論文「経験と観念論」1845年)の中で「歴史的世界の形相は物理的世界の形相と同じように自然である」(Ⅲ・92)と書いている。

ゲルツェンのこのような考え方は、『向こう岸から』の書かれた10年後に、ダーウィン・ヴィンの進化論によって、科学的に実証された、ケリーは言う。以下、長い文章ではあるが、極めて説得力にみちた議論なので、煩を厭わず訳出したい。

「これらの文章をゲルツェンが書いて10年後に、人類は科学的証明によって侮辱された。それによれば、人類が地上に現れたのは目的に向かう過程の頂点としてではなく、一地方の環境の変化に対して適切に反応した結果だというのである。ゲルツェンとその想像上の友人との対話は、ダーウィンと苛立ち立腹した文通相手たちとのやり取りを、恐ろしいほどに先取りしている。彼らの信ずるところによれば、彼の革命は自分たちを非情な宇宙に漂わせることになってしまったというのだ。自然淘汰の理論によれば宇宙が全く盲目的な偶然によって形作られたということになりかねないということを恐れたキリスト教的進化論者アザ・ 그레이に対して、ダーウィンは生の広い河床を方向付ける諸法則が存在する(下線引用者)ことを認めながらも、良し悪しの細部は〈偶然と名付けてもよいものによって作り出されるに任されている〉と主張している。一般的法則というものははっきりと構想さ

れて来たと考えるべきなのか否か―一生の究極的な起源と目的について彼の意見を求める者たちに、ダーウィンは、科学はこのような問題を明らかにすることはできない、と答えた。ゲルツェンもまた同様の不可知論を告白している。…知の存在の第一原因は何かと意見を求められたのに対するダーウィンの有名な答えはこうである。〈最も安全な結論は主題の全体が人知の及ぶ範囲を超えているということのように、わたしには思われます。〉ゲルツェンは彼の時代の粗雑な科学的唯物論に対する自由意志という観念を、すくなくとも、それなくしてはわれわれが社会的存在として機能できない〈心理学的、あるいは、お望みとあらば、人間学的現実〉として擁護する。彼は種の起源が知的活動の諸部門における目的論的思想に課した挑戦の重要性を認識した最初の人たちの一人であった。彼はこの著作をロシアの読者たちに現今のヨーロッパ思想の深い保守主義に対する解毒剤として推薦している。彼はダーウィンと同様、現象的存在の偶然性を受け入れることが、決してこれを貶めることではない、と信じていた。進化の全体を蔽う摂理的シェーマというある種の慰藉的な印を認めるように求められたダーウィンが答えて言うには、あらゆる証拠からして、自然淘汰は〈その働きにおいて完全ではなく、ただ、千変万化する複雑な環境の中で、他の種と生存を賭けた闘争において、できうる限りの成功を収めたそれぞれの種に当てはまる傾向があります。〉彼はノートの一つで書いている。〈人間を作り出したのは何と言う偶然であろうか!〉この感嘆符は不可思議の念を表しているのもであって、けっして絶望を表しているのではない。ゲルツェンは宇宙の歴史の中でも周辺的で脆い発展である人間理性を作り出した諸々の偶然的出来事の摩訶不思議さを前にした時の不可思議の念を分け持っていた。彼の信ずるところによれば、自由と道徳的責任に関してわれわれが求めている再確認は、あるアクセス不能な超越的領域にではなく、われわれを取り巻く、毎日の生活の千変万化する環境の中にこそ基礎付けられるべきである。そしてこの日常生活は、いかなる道徳的選択も、いかなる創造的行為も、いまだかつて唯一無二ということがありえなかったことを保証してきたのである。』(350-351)

VII

以上、ケリーのゲルツェン論のあらましを、私見を交えながらではあるが、批判的検討を抜きに、切り張りの紹介することに終始して来た。それは主として評者が著者の見解に瞠目するところが多かったからである。なんといっても、本書はゲルツェンの思想をショウペンハウアーからニーチェへといった近代の哲学的ペシミズムの流れの中に位置づけつつ、さらにダーウィンとの近似性を指摘することによって、この流れの中でのゲルツェンの特殊性、あるいは、これを乗り越える要因を指摘した点において卓抜な視点を示しており、大いに教えられた。この本が New York Times Book Review によって 1998 年の Notable Book of the Year に選ばれたということも頷ける。

だが、最後におこがましくも、敢えて批判がましいことを言えば

- 1) ケリーの所論はケリーがゲルツェンの思想にバーリン的な意味でのリベラリズムを読

み取っている点については同意できるが、これをポスト・モダンを批判する思想として読んでいる点については留保したい。概して、思想研究には、それへの思いいれの余り、ともすれば、自分たちの課題とストレートの結びつけ、そこから直接的な教訓を得ようとして、現代思想の最先端に位置づけようとする傾きがあり、しかもダミーを作ってそれを叩き、自説の正当性を主張することも、しばしば見られるところである。ケリーの著作がその落とし穴に落ち込んでいると言い切る心算はないが、しかし、少なくとも、私のゲルツェン研究はそのような落とし穴からは自由でありたいと思う。

- 2) ケリーは従来のソ連の研究、あるいはこれに対抗する同時代の西欧のゲルツェン論を批判するあまり、ともすればゲルツェンの思想を「社会主義」思想から切り離そうとしているが、やはり、彼の思想の根幹にあるのは「社会正義」としての「社会主義」であることは忘れられるべきではないと思う。ゲルツェンを「社会主義者」と規定するか、「リベラル」と規定するかの別なく、ゲルツェンが西欧近代思想の淵源にある「ヒューマニズム」の心情を分け持っていたという点は、見逃されるべきではないだろう。
- 3) ゲルツェン研究についてだけの問題ではないが、概して言えば、思想を時代状況や伝記的事実関係と切り離して論ずることはできないと思う。思想を論理構造だけから論ずるのは一面的である。ケリーの思想史論に感ずる難点はここにある。

ともあれ、私自身、ゲルツェン研究を最終的にまとめたいと考えている矢先に、充実した豊穡なゲルツェン論に出会えたことは、私にとって大いなる僥倖であった。

ケリーにはゲルツェンを巡る著作がもう一冊ある。*Views from the Other Shore Essays on Heerzen, Chekhov and Bakhtin*, Yale Univ. Press, 1999, 260pp. である。これも *Toward* に劣らず興味深い著書で、当初ここで併せて紹介する心算であったが、筆はついにこちらに到らなかった。こちらの紹介は他日を期したい。

なお、著者の Aileen Kelly はケンブリッジ大学ロシア研究所 (Russian Studies) の講師 (lecturer) で King's College の研究員 (fellow)。年齢は不詳である。

第二章

ゲルツェンの見たチャアダーエフ

序

ピョートル・ヤーコフレヴィチ・チャアダーエフが『哲学書簡』を発表したのは、ニコライ一世治下にあつて「ジンゴイズム（国威発揚主義）」もたけなわの、1836年のことであつたが、「ロシアには過去も未来もない」と断じたその言説の過激さの故もあつて、爾来、この著作と著者への関心は途切れること続き、今日に至っている。先ごろ、彼の二つの著作集⁽¹⁾とチャアダーエフ論の集大成とも言うべき論集⁽²⁾とが相前後して刊行されたことは、彼への関心が今なお高いことを如実に立証している。本稿はこうした関心の驥尾に付して、筆者年来の課題であるゲルツェン研究の場から、チャアダーエフに言及しようとするものである。

エルミチョフによるチャアダーエフの研究史あるいは言及史の整理⁽³⁾によれば、ゲルツェンはチャアダーエフをロシアの革命思想史の一角に位置づけることによって、その後のチャアダーエフ論、取り分けソヴィエト思想史学におけるチャアダーエフ論の典型を示したという。こうしたチャアダーエフ論に真っ向から反対したのがゲルシェンゾーンであつた。彼によれば、チャアダーエフはデカブリストの友人として彼らの社会的な関心を共有しながらも、その思想の本質はキリスト教的神秘主義であつたとし、ゲルシェンゾーンは彼の思想を「社会的な神秘主義」と規定し、ソロヴィヨフに始まりながら、やがてキリスト教的社会主義へと行き着くことになる思想の河床の先端に位置づけているのである。⁽⁴⁾

最近書かれた Н.Н. ステパノフによる「ゲルツェンとチャアダーエフ」⁽⁵⁾は両者の思想を比較しつつ、ゲルシェンゾーン説を退け、最終的にはソヴィエト思想史学のチャアダーエフ論の集約ともいうべき結論に到達している。本稿はこの論文に事実関係において多くを負つてはいるが、敢えて差異を言い立てるとすれば、本稿は軸足をゲルツェンの側に置き、ゲルツェンの問題関心の枠内でチャアダーエフを扱っていると言う点にあるうか。とまれ、本稿は筆者によって今進められている、より広範なゲルツェン研究の一つの章のための、「習作」という域を出るものではない。《研究ノート》と銘打つ所以である。

注

(1) Чаадаев П.Я. *Статьи и письма*, Сост., вступ.ст. и коммент. Б.Н.Тарасова. М.: Современник, 1987; 2-е доп. Изд.М., 1989; П.Я.Чаадаев, *Полное собрание сочинений и избранных писем в 2 томах*, под ред. З.А.Каменского, М., 1991

(2) Петр Чаадаев *Pro et contra*, СПб., 1998.

(3) А.Ермичев, А.Златопольская П.Я.Чаадаев в русской мысли. Опыт историософии, в кн. *Петр Чаадаев Pro et contra*, СПб., 1998, стр.7-40

(4) П.Я. Чаадаев. Жизнь и мышление, М. Гершензон *Избранное* Том 1., М.-Иерсалим, 2000. стр.381-563

(5) Н.Н. Степанов. Герцен и Чаадаев *Общественная мысль в России XIX в.* Выпуск 16. Л., 1986, стр.91-107.

I

まずはクロノロジカルな確認から始めよう。

チャアダーエフが生まれたのは1794年、ゲルツェンは1812年の生まれ—つまり18歳の違いということになるから、「叔父・甥」の関係位の年齢差といえるだろうか。

この18年の間には、アレクサンドル1世と登極(1801年)と、何よりもナポレオン戦争(1812年)がある。他方、チャアダーエフの死んだのは1856年、ゲルツェンの死んだのは1870年、つまり、14年間ゲルツェンは長生きしているということである。この14年の間にはアレクサンドル2世の登場による大改革の時代があり、ナロードニキの時代があり、そしてロシアをも含めたヨーロッパでは資本主義の発展と、それと表裏をなす労働運動の高揚という社会状況があった。

両者が共有した主な出来事と言えば、デカブリスト事件(1825年)、ニコライの警察体制(1825-55)、ヨーロッパの48年革命、クリミア戦争(53-56)などがある。

まず、ナポレオン戦争であるが、チャアダーエフはこの年18歳、セミョーノフ連隊に勤務し、ボロジノーの会戦以後のあらゆる戦いに参加し、アレクサンドル一世の側近の一人として、パリ入城を果たしている。ゲルツェンはといえば、まさにこの年に誕生した。そしてデカブリスト事件(25年)。この年ゲルツェンは13歳、チャアダーエフは31歳。ゲルツェンにとってこの事件が生涯にわたる「反専制」「反農奴制」の運動のスプリング・ボードとなったことは、われわれにはすでに周知の事柄に属する。他方、チャアダーエフはこの時外国を遍歴中であつた。嘱望された将来をなげうって軍務を退き、若くして隠遁生活に入るのが1821年(27歳、ゲルツェン9歳)、そして23年(29歳、ゲルツェン11歳)以降、外国を遍歴していたのです。そして、3年にわたる遍歴を終えて帰国したのは1826年6月、つまりデカブリストたちが処刑された後のことであつた。友人の多くはシベリアに流され、中には絞首刑に処せられたものもあつたという事情を考えれば、並々ならぬ決意が抱いての帰国であつたと言うべきだろう。この時、チャアダーエフは32歳、ゲルツェン14歳のことである。

この二人が最初に出会つたのは、1834年7月10日、元「デカブリスト」、ミハイル・オルローフ邸で行われた晩餐会の席上でのことであつた。これは丁度オガリョフが逮捕された日でもあつた。この日の未明にオガリョフ逮捕の知らせを受けて以来、少々パニック状態にあつて終日情報集めに奔走していた彼は、チャアダーエフとの出会いそのものにつ

いて詳細に記憶に留めてはいないが、後に彼は記憶を辿ってこの時のことを以下のように書いている。

「わたしは流刑前に一度チャアダーエフにあったことがある。それはオガリョフが逮捕された当日のことであった。前に書いたように、その日ミハイル・オルローフの家で夕食の会があった。すべての客が集まったところへ一人の人物が冷ややかに挨拶をしながら入ってきた。その美しく鋭い独特の風貌は、いかなる人の注意も引き付けないではいなかった。オルローフが私の手をとって、彼に引き合わせた。それがチャアダーエフであった。わたしはこの最初の出会いのことを余りよく覚えていない。わたしはそれどころではなかったからだ。彼はいつものように、その時も、冷たく、冗談一つ口にせず、知的で辛らつであった。食事の後で、オルローフ夫人の母親であるラエーフスカヤ夫人がわたしに言った。

『どうしてそんな悲しそうな顔をしているんですか。ああ、若い人たち、この頃の若い人たち、貴方がたは変わりましたね。』

『だが貴女は』とチャアダーエフは言った。『この頃でも若い人たちがまだいるとお考えなのですか。』

これがわたしの記憶に残っていることのすべてである。」(G・9・141、邦訳2・40)(1)

この時、チャアダーエフは40歳、ゲルツェンは22歳であった。

このような出会いがあつて間もなく、ゲルツェン自身が逮捕され、そして流刑に処せられ、個人的な関係はしばらく途切れることになるが、ゲルツェンにとってチャアダーエフという人は余程印象に強く残ったようで、彼は30年代、流刑地で書かれた二つの習作的小説『第一の出会い』(34-36年)と『一青年の手記』(39-41年)の中に、それぞれ「ドイツ人旅行者」と「トレンジンスキー」という人物を登場させ、彼らの風貌にチャアダーエフのそれを付与している。例えば、『第一に出会い』では

「それは年配の男で、背丈は中くらい、痩せぎすで髪は薄かった。ほの暗い笠に覆われたランプの乳色の光は、彼の顔に何か蠟のような色合いを与えていた。その顔は年の割には柔和で色白、カララ産の大理石で作った出来の良い彫像を見る思いがする。灰色の目は若者のそれのように輝き、口元には微笑みに似たものが浮かんでいた。その微笑みは一寸見には善意を湛えているように見えるのだが、よくよく見るとそれは嘲笑であった。が、更に見ると、それは微笑ではなく、この口では微笑むことなど出来ないようにも思えた。概して彼の顔はひどく冷たかったが、その冷たさの中にはランプの冷たい反射鏡の中に見るような炎が見えるのであった。」(G・I・108)

ゲルツェンは作中でこの人物にフランス革命の最中に植物の分類学に没頭するゲーテを批判させており、また、『一青年の手記』のトレンジンスキーには、理想家肌の「私」に現実の厳しさを教える地主にして工場経営者の役割を与えている。この時期、ゲルツェンがチャアダーエフという人の物の見方考え方を知る暇はなかったし、現に後年彼自身が二人の人物にチャアダーエフの風貌を借りたと証言している(1864年5月18日付の二人の娘

宛の手紙参照、G・27・470) ことから知られるように、二人の作中人物にチャアダーエフの内面が写し込まれているというわけではないが、それでも、これらの人物描写や状況の設定の仕方を見ると、ゲルツェンがチャアダーエフから、内に烈々たるものを秘めるが故に周囲とは馴染めず、冷ややかな目であたりを見回している孤高の人と言う印象を得ていたことが窺える。

やがて、例の『哲学書簡』の発表される 1836 年夏がやってくる。彼は流刑地（ヴァトカ）でこれを読むのだが、そのときの衝撃について彼はこう書いている。

「最初の 2, 3 ページでは悲しげな真剣な調子がわたしの注意を引いた。一語一語から既に冷たくなってはいるが、まだ怒りのこもった長い苦しみが感じられた。長い間沢山考え、多くのことを経験した人々だけがこのような書き方をするものだ。人がこのような見解に達するのは、理論によってではなく、生活によってである……。先を読むにつれて『書簡』はその力を増し、ロシアに対するくらい告発状となり、耐え忍ばれたすべてのことに対して、心に積もったことの一部でも語ろうとしている人間の抗議の書となって行く。

わたしは 2 回ほど中断して、休息し、思想と感情を鎮めねばならなかった。それから再び読み進んだ。これは不明の著者によって書かれ、ロシア語で印刷されているのだ。……わたしは頭が狂ったのではないかと心配になってきた。それからわたしはこの『書簡』をヴィトベルクに読んで聞かせた。さらにヴァトカのギムナジアの若い教師であるスクヴォルツォーフに読み聞かせ、それからもう一度自分に読み聞かせた。」(G・9・139-140、邦訳 2・38)そして更にゲルツェンによる『書簡』についての総括的な評価が続く。これは思想史関連の書物の中でよく引かれる一節ではあるが、ここでも敢えて引用したい。

「チャアダーエフの『哲学書簡』は一種の到達点であり、境界であった。それは闇夜に響いた銃声であった。それは何かが溺れて死んだことを告げ知らせる合図なのか、それとも夜明けは近いという知らせなのか、あるいは夜明けは来ないだろうという知らせなのか——いずれにせよ、目を覚ますことが必要であった。」(G・9・139、邦訳 2・37)

因みに、ステパノフは、この時の感激にも関わらず、同じ時期に書かれたモスクワの友人への手紙の中で、ゲルツェンがこの書簡について、また、チャアダーエフについて一言も触れていないことに不自然さを感じているが⁽²⁾、ゲルツェン自身回想の中で書いているように、「著者の名前をわたしは数ヵ月後に知った。」(G・9・140、邦訳 2・39) のだから、この不自然さも氷解するというものだろう。

さて、ゲルツェンが許されてモスクワに戻るのは 1840 年の春のことだが、彼も回想しているように、それ以後、二人の間柄は一段と親密さを増した。様々な人のサロン、あるいはチャアダーエフその人の書斎で、彼は会話を交わしていますが、勿論、その多くは論争的なものでした。その論点については後に立ち戻るとして、今は、ゲルツェンによるチャアダーエフの回想の中でも、筆者にとって最も印象深い一節を引用するに留めたいと思う。それはロシアで、又、モスクワでチャアダーエフが如何に孤独であったかを語って

いる部分である。

「彼の親しい友人たちは流刑地にいた。初めのうち彼はモスクワで一人ぼっちだった。やがてプーシキンと二人になり、最後にプーシキン、オルローフと三人になった。チャアダーエフは二人の死後、長椅子の後ろの壁についた小さな二つの斑点を、しばしば指し示した。そこに彼らが頭を寄せ掛けていたのだ！」。(G・9・146、邦訳2・44)

しかし、やがてゲルツェンにはロシアを去る日がやって来る。それは1847年1月19(31)日のことだが、それに先立ち、ゲルツェンの家でお別れの夕食会が開かれた。(46年12月?) その宴にはチャアダーエフも出席していた。ゲルツェンはそのときの模様を後に『未来の友への手紙』の第4の手紙(64年5月1日付け)の中でこう書いている。

「わたしがロシアを後にするに先立ち、お別れの夜食の席で、わたしは誰よりも先に、出席していた者たちの中で最年長の人—チャアダーエフのために乾杯することを提案したものです。チャアダーエフは感激していましたが、しかし、すぐに例の冷たい顔つきを取り戻し、酒盃を干し、一旦は腰を下ろしましたが、やおら立ち上がると、わたしに歩み寄り、わたしを抱擁し、わたしたちの道中の無事を祈り、『申し訳ありませんが、帰る時間ですの』という言葉を残して出てゆきました。わたしは引きとめることはせず、戸口で見送りました。チャアダーエフのすらりとした、年の割には背筋の延びた容姿は、静まり返った酒席を後に、戸の向こうに消えて行きました。その姿は今もわたしの脳裏を離れません。彼と会ったのは、これが最後でした。」(G・18・90-91)

ゲルツェンが国を出てからというもの、両者の付き合いはそれなりに途絶えてしまうのだが、ゲルツェンの方はその書き物の中で頻繁にチャアダーエフについて言及している。その詳細は後の話題なるはずだが、ここではゲルツェンが1851年に書いた『ロシアにおける革命思想の発達について』に対する、チャアダーエフの反応を紹介して置こう。チャアダーエフはこの論文に触発されて、ゲルツェンへ宛てた(現在発見されている限り)唯一の手紙を書いているからである。

チャアダーエフはこの本のことを親友ミハイル・オルローフの兄でニコライの側近であったアレクセイ・フョードロヴィチ伯爵から聞いた。彼はその日あるいは翌日にオルローフに手紙を書いた。その中で彼は、お話によればゲルツェンの著作の中で自分の意見であったことがいちどもなく、またこれから先もないであろう意見が自分の意見であるとされているが、自分としてはこのあからさまな中傷と、この著書全体に抗議したいと考えている。しかし、そのためにはこの本そのものが必要だ。それは伯爵ご自身の手をつうじてしか入手できないだろう。是非、ご助力願いたい。「ロシア人たるもの、全世界がヨーロッパの社会秩序を救うべく神によって定められたお方と見なしているツァーリに忠順なるものは誰もが、その至高の聖なる使命の、たとえささやかなりとも、手段となることを誇りに思わねばなりません。厚かましい逃亡者が忌まわしくも真実を歪め、われわれに己が固有の感情を帰せしめ、われわれの名前に己が固有の汚辱を投げつけている時に、どうして無関心でいられましょうか。」(C・2・255)(3)

こうして手に入れた論文を読んだ彼は、ゲルツェンに次のような手紙（51年7月26日付け）を書いている。これはゲルツェンへの今日に伝わる最初にして最後の手紙であるだけに、全文を訳出するに値するだろう。

「聞く所によれば、貴方が私のことを覚えてくれていて、愛してくれているとの由、まことにありがとうございます。私の方も、世界の様々な出来事が私たちを、おそらくは、永遠に別れ別れにしてしまったことを、心的にも知的にも（душевно и умственно）残念に思いながら、しばしば貴方のことと思っています。貴方がヨーロッパの諸国民とその言葉のいずれかに慣れ親しみ、その言葉でご自分の思いの丈をすべて語ることができたらどんなによろしかろうに、と思います。私には貴方がフランス語をものになされたら良いように思われます。これはそうすることがそれほど難しいことではないということの他に、善き規範を読むに当たり、今日の問題は他のいかなる言葉によっても、的確に語りおおせられてはいないからでもあります。しかし、貴方には、かくも生き生きとした表現を駆使できる母国語と別れてしまうのは辛いことでしょう。いずれにしろ、あなたには手をこまねき、口を噤んで生きて行くおつものないことが、私にはよくわかっています。これは大切なことです。今日、ロシア人がコシーヒン〔筆者には不詳〕の徒輩の風下に立っているなんて、恥ずかしい限りです。

例の件〔くだり〕について貴方に感謝しています。この人物について、貴方は間もなく数言することになるでしょう。そして貴方は勿論、陳腐な意見ではなく、普遍的なご意見を述べてくださることでしょう。おそらくこの人物は人々が抗して立つ抑圧の見本としてではなく、人々がその琴線に触れるある種の感動をもって耐え忍ぶもの、まさにそれゆえに、もし私に誤りがなければ、前者よりもはるかに有害なるものの見本であるべく、運命付けられていました。（どうかこれを陳腐な言い草とお取りにならないで下さい。）どうやら、うまい表現ではなかったようです。

おそらく私はこれからも長く、人類の事柄の現世における証人であり続けることはないでしょう。しかし、私は死後の世界を心から信じつつ、そこから貴方のことを今と同じように愛し続け、今と同じように見守り続けることができると確信しています。ごめん下さい。」（C・2・255-256）

物言えぬ国で口を噤んで生きてゆかねばならない大知識人の苦悩が、ひしひしと伝わるような手紙だ。それにしても、チャアダーエフほどの人をして、ゲルツェンほどの有為の後輩に向かって、君はもう祖国に帰ってくるな、ここに君の働き場所はない、などと言わせるとは、ロシアという国は何と悲しい国だったのだろうか。

余談めくが、ゲルツェンゾーンがチャアダーエフの友人ジハリョフの語るところとして伝える後日談によれば、チャアダーエフはジハリョフにオルローフへの手紙の複写を送って寄越したそう。翌日チャアダーエフに手紙を返す時、ジハリョフは彼に、どうしてこんな「なすもがなの愚行」をしたのか、実に驚いたと言うと、「チャアダーエフはいつも肌身離さず持っている小さな書類鞆にこれを恭しくしい、しばらく黙っていたが、

《Mon cher, on tient a sa peau (君、問題はわが身の安全さ) 》と言った」ということだ。(4)

注

(1) А.И.Герцен *Собрание сочинений в тридцати томах*, Изд.АН СССР, 1961-64 の巻数とページ数を示す。また「邦訳」とあるのはゲルツェン『過去と思索』(金子幸彦・長縄光男訳) 1998年—99年、筑摩書房、の巻数とページ数を示す。

(2) Н.Н. Степанов Герцен и Чаадаев, *Общественная мысль в России XIX в.* Выпуск 16. Л., 1986, стр.92.

(3) П.Я.Чаадаев, *Полное собрание сочинений и избранных писем в 2 томах*, под ред. З.А.Каменского, М., 1991 の巻数とページ数を示す。

(4) П.Я.Чаадаев. *Жизнь и мышление*, М.Гершензон *Избранное* Том 1., М.-Иерсалим, 2000. стр.465

II

以上、両者の付き合いの跡をざっと辿って来たが、この程度のことから、両者が互いに親愛の情によって結ばれていたことがよく分るだろう。チャアダーエフの方には18歳年下の青年について特に言及した文書は無く、辛うじて今引証した手紙がゲルツェンについて感情を披瀝した唯一の資料なのだが、この手紙によって知られることは、思想的な違いにも関わらず、チャアダーエフはゲルツェンに好感情を抱いていたということであり、ゲルツェンの方はさまざまな機会にチャアダーエフについて書いているが、それらを通して知られることは、やはり思想的な違いはさておき、先人を愛し尊敬していたと言うことである。では、お互いに親愛の情を抱き合わせた要因とは何であったか、思想的な違いを見る前に、このことを確認して置こう。

その一つを結論的に言えば、何よりも先ず、ニコライ一世治下の圧制の中で哀しみと苦しみ、そして何よりも、憎しみと憤りを共にするもの同士が抱きあう親愛の情、いわば「同志愛」である。チャアダーエフはロシアの現状を告発することにより、狂人と宣告され、以後、公的な発言を一切禁止され、ゲルツェンはその思想の故に二度にわたる流刑を体験しているのである。

ゲルツェンは『ロシアにおける革命思想の発達について』の中で、チャアダーエフについてこのように評価している。

「チャアダーエフの到達した結論はどんな批判にも耐えないであろう。しかし、この書簡の意義はここに求めるべきではない。その意義はひとの心を揺り動かし、心に長い間重苦しい印象をとどめるところの、厳しい怒りの詩情の中にある。人は著者の冷たさを詰る。しかし、この冷たさにこそ彼の主な功績があるのだ。われわれを容赦する必要はない。われわれは余りにも早く己の立場を忘れ、牢獄の壁の中にあっても余りにもたやすく気晴ら

しを見出すのだから。

この論文は悲しみと驚きとの叫びをもって迎えられた。それはチャアダーエフと意見を共にする人々をさえ驚かせ、傷つけた。だが、彼はわれわれ一人一人のころをぼんやりとかき乱していたところのことを言い表しただけである。人間のあらゆる気高い願いに対してただ苦しみのみを与え、われわれを拷問にかけるためにわれわれを呼び起こすことを急いでいる国を心から憎く思った時の、あの怒りの瞬間を経験しない者がわれわれの中にいるだろうか。地球の四分の一を占めているこの牢獄から、又、すべての警察署長が最高の支配者であり、最高の支配者が王冠を戴いた警察署長であるところの、この醜悪なる帝国から永久に離れ去ることを望まなかった者がわれわれの中にいるであろうか。この氷の地獄を忘れるために、また、しばらくの間でも酒に酔い、気晴らしを求めるために、あらゆる誘惑に身を任せなかった者が、われわれのなかにいるであろうか。」(G・7・222、邦訳・岩波文庫 158) (1)

ゲルツェンへ宛てた唯一の手紙の中でチャアダーエフが感謝の意を表していたのは、恐らく、この箇所のことだろうと推測される。

ゲルツェンにとってチャアダーエフはピョートルによる近代化の副産物たる、「余計者」の系譜の中の一人であった。『ロシア文学の新しい段階』(1864年)に示されているゲルツェンの時代認識によれば、ニコライの時代は「政府の庇護を必要としないほどに力をつけていることを自覚し始めた文明」と「文明を庇護し続けようとする専制」とが衝突し、この闘いで専制が勝利した時代であった。(ゲルツェン 30 巻著作集 18・181) では、「文明」は何故敗北せざるを得なかったのか。それは「文明」を支えるべき「ナロード(民衆)」がいなかったからだ。

「ロシアのナロードの中に有機的な発酵を目覚めさせようような道徳的酵母は、今語っている時期にはまだはっきりし見えていなかった。1825年以降ははっきりしていたのは、上流階級にはこのような酵母がないということであった。〈啓発された社会〉は言うに及ばない。政府もまたこのことに意を用いることはない。その〈啓蒙的な〉役割を終えた政府は、ただひたすら、自ら掌中におさめた力と、それにナロードの無気力に寄りかかってきたのだ。」(G・18・183)

かくしてこの時代、大量の「余計者」が産出されることになる。文学の世界に即していえば、(グリボエドフ『知恵の悲しみ』の)「チャーツキー」(24年)、(プーシキン『エウゲニー・オネーギン』の)「オネーギン」(31年)そして(レールモント『現代の英雄』の)「ペチョーリン」(40年)。そして、ゲルツェンもまた、長編小説『誰の罪か』の中で「ベリトフ」の形象を作り出している。[46年]チャアダーエフもまたそのような形象の運命を分け持っていたのである。ゲルツェンは『未来の友への手紙』(64年)(第4の手紙)の中でこう書いている。

「30年代にわたしはモスクワの上流社会の campo vaccio (墓地) のぬかるんだ土地に立つ古代の円柱のような二つの個性に驚かされました。彼らは自分たちの哀しげな、しかし、

優雅な無用性によって、崩れ去ってしまった何かを想起させながら、並んで乱で立っていました。・・・オルローフとチャアダーエフはわたしが出会った最初の余計者でした。

二人は同じではありませんでした。・・・わたしは多くの人たちよりかれらの欠陥を良く知っていました。しかし、わたしにとってかれらは聖書の登場人物たち、生きた伝説でした。わたしは彼らの瑕をあげつらって値踏みをするようなことはせずに、彼らがあるがままに受け入れました。というのも、わたしが彼らと言う存在の悲劇性を、他の誰よりもよく理解していたからでしょう。かれらは損なわれた人たちだったのです。一方は全く轍からはずれることによって、他方は辱められることによって。」(G・18・89-90)

先の世代の人々の「余計者性」について書くときのゲルツェンの筆致に、幾分憐憫の情が混じっていることに、既に気づかれた事と思うが、これはゲルツェンが自ら余計者に陥る危険性を自覚しつつ、この危険性を克服する道を模索し始めていたからにはほかならない。ゲルツェンの40年代の哲学的著作の課題は、まさにそのような主体を如何に形成するかということにあったのである。この点で、ゲルツェンはチャアダーエフとは全く異なる地平に立ちつつあったと言ってよいだろう。

しかし、ニコライの時代に怒りと憎しみを抱き、それゆえの余計者とならざるをえないのは、チャアダーエフがその時代の「国威発揚主義」的傾向に与することができなかったからであって、この点では、ゲルツェンも考えを同じくしていた。

ご承知のように、ニコライの時代、西欧では資本主義の進展と共に早くも資本主義のメダルの裏側が露呈し始めていた。すなわち、経済的な発展とは裏腹な貧困階層の増大、階層の分化―つまり、資本家と労働者という近代社会を構成する2つの階級の出現とそれに伴う両階級の対立の激化である。1830年と1848年の革命事件が西欧社会の変動振りを端的に物語っている。ヨーロッパのそんな有様を見た時、内部に信仰しつつある矛盾はさておき、強力な警察力を背景としながらも、ともかくも治安の維持に成功している君主制の方が、激動のヨーロッパよりも優れた社会だから、これは維持しなくてはならないと考える者が少なからず現れたとしても、不思議はない。このような雰囲気がナポレオン戦争後の愛国主義と結合して、ロシアのあらゆる事物が西欧のそれらに勝っているという根拠の無い優越感を植え付け、反西欧の「国威発揚主義(ジンゴイズム)」をうみだしたことは容易に理解できることだろう。文部大臣ウヴァーロフによる「正教・専制・国民性」なる「三位一体」の道徳綱領が現れる(1833年)のは、このような時代的雰囲気を背景にしてのことであつた。所謂「古典的スラヴ主義」も「官製の民族主義」と一線を画すべきではあるとは言え、同じ時代的雰囲気を背景として生まれてきたということは否めない。ロシアの現在と過去と未来をトータルに否定するチャアダーエフの『書簡』は、まさにこのような時代の雰囲気に棹をさすものだったのである。しかも、これが発表された1836年といえば、ウヴァーロフの「三位一体」説が発表されてから3年目のことであつた。

もっとも、このことはチャアダーエフが非愛国主義者であつたということでは決してないことは言うまでもないだろう。彼自身の「狂人の弁明」によれば、「祖国への愛は美しい

ものです。しかし、もっと美しいものがあります。それは真理への愛です。」(C・1・523)そしてまた、彼は「わたしは自分の祖国を、ピョートル大帝が教えてくれたように愛しています。」(同533)とも書いている。これはとりもなおさず、ゲルツェンの立場でもあった。

チャアダーエフのこうした姿勢は終生変わることはなかった。そのことは彼の最晩年にあたる1854年1月15日の日付を持つ、クリミア戦争を批判する文章《L'Univers》によっても知ることができる。

「忘れてならないこと—それはロシアとくらべてヨーロッパでは全て—君主も、政府も、民衆も—自由の精神に満たされているということである。このように述べ来たった今となつては、このようなヨーロッパが衷心からなる共感を持ってロシアに浸透することを期待すべきではないだろうか。ここにあるのは光と闇の当然の闘いがなのではないだろうか。われわれが体験しつつある時代において、ロシアに対する諸国民の敵愾心はさらに昂進しつつある、というのも、ロシアが国家としてヨーロッパ的システムの構成員となりながらも、先ごろのヨーロッパが体験した動揺の時代にあつて自ら安定を維持することに成功したのをよいことに、われこそは他の国々に比べてより高い文明を持った国であるなどと、僭称しているからだ。問題は、こうしたことを僭称しているのが決して政府だけではなく、国を挙げてである、ということだ。つい先ごろまでわれわれ[突然[われわれ]となっていることに注意! この文章はフランス人がロシアの状況について報告すると言う体裁をとっているのである。]は聞き分けのよい従順な生徒であつたのに、今や突如として、つい昨日まで自分たちの先生と認めて来た者たちの先生となつてしまったのだ。東方問題なるものをいつそのこと単純化していつてしまえば、こういうことなのである。」(同1・569)

「そんなわけで、ロシアを新しい道に立たせることは、他の国々を益するだけでなく、ロシアそのものを益することでもあるのだ。」(同)

ロシアがヨーロッパに如何に多くを負っているかを書いた、次の文章も引いておきたい。「誰かから誰かへの手紙の抜粋」(54年)の中の一節である。

「とくにわたしたちはヨーロッパが再び野蛮の淵に落ち込もうとしているとか、つい先ごろわたしたちをその伝来の忘我状態から引き出してくれたあの文明の幾つかのかけらをもって、文明を救うべく運命付けられているなどと考えたことはありません。わたしたちはヨーロッパに丁重に、むしろ敬意を払って対してきました。なぜならば、わたしたちはヨーロッパがわたしたちの多くのことを、とりわけ自分たちの歴史を教えてくれたことを知っているからです。わたしたちには、ピョートル大帝がなしたように、偶々思いがけず、ヨーロッパに勝利したこともありましたが、そのときでもわたしたちは、言ったものです。この勝利をわたしたちはあなたに負っているのです、と。」(C・1・570)

これがヨーロッパの列強を敵として一手に引き受けた戦われたクリミア戦争の最中、沸き立つような愛国主義の高揚する中で書かれたものであることに、ここで改めて注意を喚起しておきたい。チャアダーエフという人がいかに時流に与しない、冷めた思想家であつたか良くわかるだろう。

クリミア戦争に対するゲルツェンの対応には、残念ながら、チャアダーエフほどの潔さはない。彼はこの戦争を同じ穴の貉の争いを見てはいたものの、他方で、コンスタンチノープルを奪取することが、ロシアの新生に役立つと考えてもいたのである。だが、そうしたニュアンスに差があるとはいえ、また、すぐ後に見るように、ヨーロッパ文明の本質に何を認めるかに違いはあるとはいえ、ヨーロッパ文明の持つ普遍性を承認する立場は、ゲルツェンのそれでもあったのである。

このように気持ちを一つにするものがありながら、それでもやはり、二人の間には越えがたい溝がありました。それを明らかにするには、チャアダーエフ『哲学書簡』を見なくてはならない。

注

- (1) カッコ内の「邦訳、岩波文庫」とあるのはゲルツェン『ロシアにおける革命思想の発達について』（金子幸彦訳）、岩波書店、1950年のページ数を示す。

III

さて、これまでも何度となく言及されてきた『哲学書簡』とはいかなる著作か。以下、これを見てゆくことにしよう。特に目新しい解釈があるわけではないので、少々解説風にならざるを得ないことは、致し方ない。

『書簡』は今日発見されている限り全部で八通あり、それら発見の経緯についてはそれなりのエピソードやヒストリーがあるが、ここではそうしたディテールは一切省略して、第一書簡だけを中心的に取り上げたいと思う。というのも、この時代に人々が読むことができたのは第一書簡だけであり、人々の耳目を驚かせたのは第一書簡であったからだ。勿論サロンでの話題になったであろうことは十分推測できることではあるものの、ゲルツェン自身、この手紙の続編について知っていたかどうか、知っていたとしたらどの程度か、こうしたことはいずれもハッキリしない以上、これらに依拠することは当を得ないだろう。以下では専ら〔第一書簡〕のみに依拠して話しをすすめるのは、こうした理由による。

この手紙は「ネクロポリス」即ち「死の町」からあるご婦人に宛ててかかれたという設定になっている。「死の町」がモスクワを意味するというのは定説ですが、それが何を意味するかについて、くどくど言う必要はないだろう。また、宛名人の「ご婦人」についても研究があるが、これも省略する。

手紙の発端について言えば、あるサロンでそのご婦人に宗教の話しをしたところ、後日、彼女から手紙を貰う。それによれば、彼女はチャアダーエフの話しを聞いて以来と言うものの、「健康を損ないさえするほど」に思想が混乱してしまったと言うのである。しかし、それはチャアダーエフに言わせれば、ロシアと言う国の「哀しい事態の当然の結果」なのであった。こうしてチャアダーエフはヨーロッパに比べてロシアが如何に惨めな状態にあるか、そしてロシアは如何にあるべきか、を語り始めるのである。

その際、彼の思想の根底には、やがては顕現されるべき普遍的精神＝神の摂理というものが厳然として存在している、そしてその普遍的精神を体現しうるのはキリスト教以外にない、というアプリアリな信念がある。しかもこの精神は宗教を紐帯として一体となった集団意識－それを体現する教会－によって、歴史的に展開され、実現へと向かうと想定されている。従って、歴史には断絶があってはならない。連綿と続く歴史の糸によって紡がれた「伝統＝文明を持つ集団＝民族」のもとで初めてこの普遍精神は顕現されると、チャアダーエフは言うのである。しかも、彼に言わせれば、このような集団はカトリックの西欧、しかも中世の西欧にしかない。従って、ビザンツのキリスト教である正教を受け入れたロシアはこの伝統＝文明の外にあるということになる。

以下、いま少し詳細に議論を辿ると、まず、一体性（*unite единство*）とその具現としての教会については、こう書かれている。

「一体性という至高の原理、真理がこれに仕える者たちの途切れることなき継承性の中で直接伝えられるというあの至高の原理、この原理に基づいた教えだけが、宗教の真の精神に最もよく合致しうるということ、このことを差し当たり知っておけば十分です。なぜならば、この精神とはつまるところ、世界に幾つあるかは問わず、全ての道徳的な力は集められて一つの思想、一つの感情へと結びつけられるという理念に帰着するからであり、また、人々の間に真理の王国をもたらしすべき社会組織たる教会を漸次確立するというところに帰着するからです。」（C・1・321、邦訳 6・73 を参照）(1)

では、西欧ではこのような一体性がどのような形で現れているか。

「ヨーロッパの諸民族は共通の顔、家族としての類似性を持っています。彼らには、ラテン系、チュートン系の別、北と南の別があるにもかかわらず、共通の歴史を深く極めたものには明瞭な、全てを結び付けて一つのまとまりとする共通の絆が存在します。ご承知のように、まだ比較的最近までヨーロッパ全体がキリスト教世界という名で呼ばれ、公法にも記載されていました。万人に共通の性格の他に、それぞれの民族は、どの民族にも共通した性格のほかに、自分たちの独自の性格も持っています。しかし、こうしたことがみな歴史であり伝統なのです。これらはこうした民族の理念的遺産となっているのです。・・・もとより、私が申し上げているのは、学問とか読書とか、文学や科学に関することではなく、子供たちをゆりかごの中で捉え、玩具で取囲み、母親があやしながら囁き聞かせる思想のこと、様々な感情の形で彼の呼吸する空気と共に、骨の髄にまで浸透するもののこと、この世に生を享けて社会の一員となるに先立ち、その道徳的本性を形成しているもののことなのです。」（C・1・327、邦訳 6・78 を参照）

次いで、その一体性がいかに形成されたか、その歴史的経緯はこうだ。

「(ロシアが正教化し、西欧世界と切り離されていたころ) ヨーロッパは一体性という生氣あふれる原理によって息づいていました。あらゆることがこの原理から発し、あらゆることがこの原理に帰着していました。この時期のあらゆる知的運動はただひたすら人間的思想の一体性を確立することを目指していました。あらゆる動機が新しい時代を鼓舞するも

のたる世界理念を見出したいと言う、止むに止まれぬ力強い要求に発していました。」(同 1・331、邦訳 6・81 を参照)

「ヨーロッパの諸民族は、時代から時代へと移り行くにあたり、手に手をとって歩んできました。……思い起こしてください、15 世紀にわたり、彼らにあったのは、神に祈る時の唯一つの言葉、ただ一人の道徳的権威、唯一つの信念だけであったことを。また、思い起こしてください、15 世紀にわたり、同じ年の同じ日の同じ時刻に、同じ言い回しで、彼らは至高の存在に向かって声を揃え、その恩寵の中の最たるものを褒め称えてきたのです。」(C・1・334、邦訳 6・83 を参照)

では、この間ロシアは何をしていたのか。

「北方の諸民族の力溢れる野蛮と高められた宗教の思想との闘いの中で文明の建造物が出来上がって行きつつあった時に、私たちは何をしていたのでしょうか。宿命的な定め的心思により、私たちは自分たちを訓育しなくてはならなかった道徳的教えを求めて、諸民族の深い蔑みの対象たる墮落したヴィザンツ [チャダーエにおけるカトリック的視点] に向かったのです。ついその直前に一人の傲慢な知性 [フォチウスのこと] が全地に遍く同胞組織からこの家族を誘き出し、かくて私たちは理念を人間の情動によってかくも歪められた形で受け入れることになってしまったのです。」(同 1・331、邦訳 6・81 を参照)そして「一体性」という原理から切り離されたまま、「侵略の餌食」となり、「異国の頸木から解き放たれた時、私たちはそれまでに西 (欧) Запад の兄弟たちの間で花開いていた諸々の理念を享受することができたかも知れません。しかし、私たちはすでに共通の家族から切り離されていたのです。私たちは更に過酷な、しかも我が国の解放という事実そのものによって浄められた、奴隷制に身を沈めてしまったのです。」(同)

だが、ピョートルの改革はロシアを文明の道に引き入れた。

「かつて偉大な人物がわたしたちを文明化しようと思い付き、啓蒙への興味を喚起しようとして、わたしたちに文明のマントを投げかけたことがありました。しかし、わたしたちはマントを拾い上げはしたものの、啓蒙には手が届きませんでした。」(C・1・330、邦訳 6・80 を参照)

さらにアレクサンドル一世の時代、ロシア人は敗走するナポレオン軍を追ってヨーロッパを横断し、ヨーロッパの国々を目の当たりにする機会を持った。しかるに

「世界の最も開化した国々を通してこの勝利の行軍から帰った時、わたしたちが持ち帰ったのはただ悪しき諸々の理念と破滅的な迷妄だけでした。そしてそれらの帰結はわたしたちを半世紀も後戻りさせた計り知れない不幸でした。わたしたちの血の中には、あらゆる本当の進歩を拒否する何かがあるのです。一言で言えば、わたしたちははるか後の子孫に対して、彼らが理解しうるような何か偉大な教訓を伝えるために生きてきたし、いまなお生きているのです。」(C・1・330、邦訳 6・81 を参照)

ロシアの潜在的な使命とその現実の姿との間のギャップの何と大きなことか。

「東と西という二つに大きく区分けされた世界の間を身を横たえ、片肘を中国に、もう一

方の肘をドイツに付いた私たちは、精神的本性の二つの偉大な原理たる想像力 *воображение* と理性 *разум* [「信仰」はどこに位置するか＝引用者注] を自らの裡で結合し、地球全体の歴史を私たちの文明において一つにしないでなくてはならないはずなのです。しかし、神慮は私たちにこの役割をお授けになりませんでした。逆に、神慮は私たちの運命に全く関心をお持ちにならなかったかのようです。神慮は私たちが人間の理性に私たちなりの有益な寄与をなすことを拒否しながら、私たちをその為すがままに放置され、私たちのことに意を払われようとなさらず、私たちに教えを垂れようともなさいませんでした。時の教訓は私たちには存在しないのです。幾つもの世紀、幾つもの世代が私たちには無為に過ぎられました。自分たちのことを見ると、人類の普遍的な法則などというものが私たちには当てはまらないとも言えるでしょう。世界の孤児たる私たちは世界に何一つ与えず、世界から何一つ貰わず、数多ある人類の理念に一つ思想ももたらさず、人間理性を進歩させる運動に如何なる寄与もなさず、逆に、この進歩から得た全てのものを、私たち歪めてしまったのです。私たちが社会的に存在し始めたその瞬間から、私たちは人々の共通の富にとって有為なものは何一つして生み出さず、有益な思想は何一つとして我が祖国の不毛な土壤に芽吹くことがなく、偉大な真理が何一つとしてわが国から産み出されたことはなかったのです。想像力の領域で何かを創造しようという努力もせず、他人の想像力によって創り出されたもののの中から、私たちはただ目を欺く外見や無用な華美だけを借用してきたのでした。」(C・1・329-330、邦訳 6・80 を参照)

この種の哀切な嘆きはこの他にも枚挙に暇はないが、こうした考察の果てに、チャダーエフはロシアには過去も未来もない、というきわめて陰鬱な、そしてセンセーショナルな結論に到達することになるのである。

しかし、このように、きわめて激越な反体制の主張ではあるが、仔細に読めば、この思想が所謂革命思想はおろか、自由主義思想ですらないことに気づくのはそれほど難しいことではないだろう。つまり、彼が現実のロシアへのアンチテーゼとして示しているのは、キリスト教によって一つに結ばれた、いわば信仰共同体としての西欧であったということ、しかも、彼の理想とする世界は中世のカトリック世界であったということなのだ。また、彼が歴史を連綿と続く伝統に即して展開される普遍的精神＝神の摂理の顕現過程であるとする神秘主義も、西欧の市民革命の思想である社会契約思想に真っ向から対立する考え方であるし、更に歴史において主たる推進力をなすのが、個人の意思よりも伝承や記憶によって長い時代を経て形成された集団の意識＝民族精神のほうだとする考え方も、啓蒙思想に固有な個人主義の思想に悖る。もう一つ付け加えれば、彼の思想の有機体的文化論・歴史観と言った「ロマン主義」は近代合理主義を批判する思想に他ならない。従って、ロシアと西欧は歩みを共にすべきだという彼の主張は、決して西欧近代つまり、資本主義的西欧、ブルジョア的西欧と同一歩調を取るべきだという主張ではないのである。その意味で、彼の思想はヨーロッパ思想のコンテクストの中に置けば、むしろ保守主義に属すると言うことができるだろう。それが同時代の青年たちにはデカブリスト以後に発せられた反体制

の狼煙と受け止められたところに、ロシア思想のパラドックスがあったといつてよいだろう。

われわれはここでチャアダーエフの思想が初期のイワン・キレーエフスキー、雑誌『ヨーロッパ人』を主宰し、論文「19世紀」を書いた時のキレーエフスキー（30年代初頭）と似通ったところがあることを指摘して置きたいと思う。この時期キレーエフスキーもまた、信仰共同体としての中世の西欧のキリスト教社会を理想視し、そのような西欧世界へのロシアの同化を構想していたのであった。しかし、西欧現代（キレーエフスキーにとっての）の社会対立の根底に唯物論、エゴイズムを見、その根底に合理主義の哲学を、更にその先にプロテスタンチズムを、そして究極の根元にカトリックのスコラ哲学を認めるにおよび、彼は正教ロシアへ回帰していったのであった（30年代末）。これに対して、チャアダーエフは、後に、キレーエフスキーらの影響の元で、ロシアにおける正教の歴史的役割を幾分か評価することになりはするものの、カトリック＝西欧を擁護する立場は、終生崩すことはなかったのである。宗教の持つ社会的生産力を重視するチャアダーエフにとって、政治的は君主に従属し、個人の精神的修養を専ら重視する瞑想的な東方教会とは最後まで折り合うことができなかったのである。この社会的関心には世代を同じくするデカブリストとのモチヴェーションの同一性を指摘することができますし、また、カトリックの社会的生産性の重視には、後の時代のソロヴィヨフとのモチヴェーションの類似性を指摘することもできるでしょう。しかし、ゲルツェンがチャアダーエフを批判するのは、まさにこのカトリシズムの故にほかならなかったのである。

注

（1）カッコ内の「邦訳」とはピョートル・チャアダーエフ『哲学書簡』外川継男訳、『スラブ研究』の巻数とページ数を示す。なお、訳文は必ずしも外川訳を正確に踏襲してはいない。「参照」とはその謂いである。

IV

ゲルツェンによるチャアダーエフ批判の手始めに、40年代初頭の日記の一部を引用してみよう。1842年9月10日の項である。

「チャアダーエフとカトリシズムと現代の諸問題について論争。頭のいい人で、色々な本も読んでいるし、自分の考えを理路整然と展開する術も優れてはいるのだが、恐ろしく古臭い。あれこれ反論するのも気の毒なくらいだ。彼にはカトリシズムの理性的側面が品良く具現化したようなところがある。かれはこの側面に和解と答えを見出した。しかも、神秘主義と経験主義の方法によってではなく、社会的・政治的見解によって。だが、いずれにしろ、これは墓場からの声、死と絶滅の国からの声だ。われわれにはこの声は奇妙だ。」（G・2・226）

また、1843年1月10日にはこんな箇所がある。

「カトリックと正教徒の論争はきわめて滑稽だ。中世の至福の思い出に浸っているのだ。」

これらの論争のテーマはつまるところ、「鬼婆はどこから来たか、キエフからかチェルニーゴフからか」ということに尽きる。鬼婆を信じていない者はあくびをして、力の消耗を嘆くばかりだ。このご連中は教会の歴史を専門家も顔負けするくらい良く研究していて、どうでも良いことをこまごまと知っており、このこまごましたことがかれらの論争のネタになるのだが、それでいて歴史の動きの隅の頭石ともいえるべき真理のことは空つきし知らないのだ。笑止千万だ。」(G・2・259)

まことに手厳しい批判だが、この批判は当時ゲルツェンが構想していた自らの思想史像と無縁ではない。かれはこの時『科学におけるディレクタンチズム』(42-43年)と『自然研究書簡』(45-46年)の執筆中、あるいは執筆の準備中であつた。この二つの論文を中心としたゲルツェンの40年代の思想については、別の機会に譲るとして、ここではかれの哲学史の構想の狙いとその概略と、その中でカトリックがどのような位置づけを受けているかを述べるに留めたい。

すでに別のところでも触れたことだが⁽¹⁾、ゲルツェンの思想的営為のモチーフは「自由」「人間の尊厳」の実現ということに尽きる。しかも、これらの価値が単に外に向かって実現を迫るべき価値であるだけでなく、自らの責任において自らの内において実現させるべき価値として意識され、提起されていたところにゲルツェンの思想の特質があるといつてよい。つまり、制度よりも個々人の精神の在り方の方にウェイトが置かれていたのである。ゲルツェンはこのような価値を「道徳的自立」とか「道徳的自由」と呼んでいるが、これは言うなれば「神」や、それに類するあらゆる超越的権威から自立した「自己完結的に確立された自我」のことであり、「神無きプロテスタンチズム」とも呼ぶべき思想である。この点で、ゲルツェンは西欧の思想の流れのうち、フォイエルバッハからシュティルナー、そしてニーチェへと到る流れの中に置くことができるが、この時代のロシアにあつては、主体性の確立への呼びかけとしての意味を持った。つまり、農奴制と専制の国・ロシアの現実を心にも無く容認したり、あるいは、そのような現実を直視することを回避し、身を持ち崩すことをもって辛うじて抵抗しているような脆弱な知性に、ゲルツェンはこのような自立的な知性の確立を求めたのである。つまるところ、このような脆弱な知性に「余計者」の生まれる根拠があるのであるが、ゲルツェンの思想のモチベーションの中には、そのような「余計者」となることを自ら回避する方途を探るということもあつた。先に、ゲルツェンにはチャアダーエフ的な余計者への憐憫の情が見て取れるといったのは、このようなことを念頭においてのことであつた。後に見るように、ゲルツェンは西欧思想、とりわけ48年革命後の思想状況を批判することになるが、その際の論点は、このような自我が西欧に於いてもまだ十分に確立されていない、ということにあつたのである。

さて、では、ゲルツェンはどのような思想史像、とりわけ近代思想史像を持っていたのか。

周知のように、15世紀から16世紀にかけてのルネッサンスと宗教改革によって西欧は近代市民社会へむけて第一歩を踏み出すことになるのだが、これは思想史の次元からみ

れば、神の権威から人間の自立に向けての第一歩でもあった。しかし、この歩みは当初から神との決別が意図されていたわけではなく、差し当たり批判と懐疑の対象となったのは、カトリック的な「神」、中世の秩序を聖別する「神」であった。従って当初追求されたのはローマ教会の専売的な神学(カトリック神学)に対する新しい神学(「プロテスタント神学」)の確立であった。しかし、その過程で聖書を介して直接神と向き合うという新しい神学には、[神の恩寵]を直接認知しようと言うことの根拠として、人間の知的能力を論証することが求められることにならざるをえなくなるのは、理の当然の帰結であった。かくして、丁度禁欲的なプロテスタントの宗教的・倫理的心情が、時と共に薄れ、やがて利潤の追求を旨とする資本主義の精神に転化していったように、プロテスタントの神学も又「神」から離れ、「人間の学」としての「近代哲学」が展開されるようになったわけだ。本能、直観、情念、心情、知性、悟性、理性など、様々に名付けられた人間の知的心的能力の多角的な考究が進み、「人間」への理解と自信が増大して行く過程は、つまるところ、近代市民社会が政治的・経済的ヘゲモニーを確立させる過程と軌を一にしていたのである。

しかし、丁度、近代市民社会が中世・封建制の遺構を数多く引きずっていたように、「人間の学」としての近代思想もまた、神学から解放されきっていない。ゲルツェンが衝くのはまさにこの点に他ならないのである。ゲルツェンに言わせれば、ルネッサンスと宗教改革以後の歴史は「カトリシズムと封建制の最後の段階にすぎず、近代思想の祖と仰がれるデカルトにしても、折角「思惟する我」を発見したにも関わらず、いわゆる生得観念なるものの名の下に神を取り戻すことによって、原理的に新しい哲学であることに失敗したのであった。また、カントにしたところで、大陸合理論とイギリス経験論を統合して、思惟の自立性への方向を指し示しながら、「物自体」なる観念を設けることによって人間の思惟の限界を示し、そのことによって、そこを神の「御座所」としてしまった。つまり、人知と神慮という「二元論」的理解から脱却することに失敗してしまったのである。ヘーゲルが理性の論理たる弁証法をもって「物自体」の世界に分け入り、存在と思惟の真のあるべき姿、即ち、両者の「同一性」を明らかにしたことは、この「二元論」を克服する上で画期的な一歩ではあったが、しかし、そこで主体と見なされているのは人間ではなく、理性によって弁証された神たる「絶対精神」であった。結局、西欧思想の中にはまだ「神」が生き残っていて、人間は歴史と社会と自分自身の一元的な主人公として然るべき権利をいまだに獲得していないのである。かくしてゲルツェンは『自然研究書簡』の中で、西欧近代の思想の歩みを総括して、次のように書くことになる。

「新しい哲学の運命は宗教改革の運命に似ている。それは大きな前進ではあったが、中途半端であった。純粹思惟なるものは新しい科学のスコラ哲学である。それは丁度、純粹なプロテスタンチズムがカトリシズムの生まれ変わりであるのと同様である。封建制は宗教改革を生き延び、ヨーロッパの生活のあらゆる現象に滲みこんだ。確かに新しい力強いものが生まれはしたが、それらはいずれも封建制の後見の下にある。スコラ哲学は科学の封建制たる位置を占めている。そうである以上、それは十全に科学たりえただろうか。そこ

に人間の住むことができたろうか。」(G・3・242-243)

上の述べてきたことから、ゲルツェンにとってのカトリシズムの位置づけは明瞭だろう。人間の思惟の自立性を妨げる最大の桎梏—これこそが「カトリシズム」にほかならなかったのである。

注

- (1) ゲルツェン『過去と思索』(金子幸彦・長縄光男訳) 1998年—99年、筑摩書房、
3 への解説 「ゲルツェン—時代・人・思想」(長縄光男) 588-589 ページ 参照。

V

ロシアの歴史で言えばアレクサンドル一世とニコライ一世の時代—それはヨーロッパでは市民革命の余波と産業革命の進行する中で、対立と抗争、社会的分断の顕在化する時代であったが、このような時代は、一方において、挫折した「民主革命」の更なる実現を目指して社会主義や共産主義など急進的な思想潮流が台頭する反面、恣意と放縦に堕した自由への志向にたいして、革命以前の社会秩序、可能ならば中世的な社会秩序への意識的な回帰したいという願望も起こる。そうした傾向の最も簡潔で最も急進的な表現はロマン主義のカトリック化であった。とりわけドイツとイギリスのプロテスタントが、かなりの数に於いてカトリックに改宗した。カトリシズムを賛美したのはド・メーストルやその他のフランスの保守的な哲学者だけでなく、シュトールベルク、シュレーゲル、ノヴァーリスなど、「シュトルム・ウント・ドランク」の伝統を受け継ぐドイツ・ロマン主義者でもありました。(もっとも、ノヴァーリスはカトリックに移らなかったが。)

そもそもロマン主義は古典主義への反発として、また合理主義への批判として、いかなる規範も持たない自由な創造活動、情念の解放をその心理的な基盤として持っており、その限りで革命的志向と容易に結びつくことができたが、しかし、無制限な自由や解放などもともとあるはずもなく、その自由や解放への志向がやがて「邪な恣意」と意識される時がやってこないはずはない。ロマン主義のカトリック化はそのような心理的逆流によって説明できるが、そしてロシアにおける「ロマン主義」の心理的逆流はカトリックの垣根を乗り越え、さらに正教へと回帰して行くことになる。キレーエフスキーの思想の歩みはその典型であったと言ってよい。そしてその歩みは、やがてチャアダーエフの忌み嫌う「クワスのナショナリズム」と容易に結びつく。(キレーエフスキーはそのようなナショナリズムを免れていたが)

『哲学書簡』におけるチャアダーエフを思い起こすならば、そこに伝統主義や歴史主義、全一性や一体性の理念、科学や芸術活動の推進力としての宗教の位置づけ、社会組織の唯一の正統的な形態としての教会、歴史的課題の実現者としての民族といった観点に、カトリック化したロマン主義の刻印を認めることは容易であろう。しかし、にもかかわらず、チャアダーエフはオドーエフスキーやキレーエフスキーやホミャコフと手を携えて「ロ

シア・ロマン主義」の道を歩むことはなかった。それは彼がその思想の基底に保守的なロマン主義を持ちながらも、ピョートルの改革を常に支持し、また、デカブリストの友として、西欧的な啓蒙主義的合理主義にも共感しうのような、寛容な普遍主義的立場を終生堅持し続けていたからであろう。ステプーンの指摘するように、そもそも彼がカトリックに引き付けられたのは、キリスト教としての宗教的側面と言うよりは、むしろ「大きな組織の運営能力」であり「社会的文化的伝播力」であった。逆に彼を正教から遠ざけたのは「精神的な集中であり修道院的静寂であり、文化的な非生産性」であった。⁽¹⁾そして、さればこそ、彼は「クワスのナショナリズム」からも自由でありえたのである。

ゲルツェンはそのカトリシズムの故にチャアダーエフに批判的ではあったが、その寛大な普遍主義の故にチャアダーエフを許したのだと言えるだろう。ここにチャアダーエフに呈するゲルツェンのアンビヴァレンツな態度の本質を認めることが出来るのである。

注

(1) Ф.Степун. П.Я.Чаадаев, в кн. *Петр Чаадаев Pro et contra*, СПб., 1998, 372-373

第三章

ゲルツェン『学問におけるディレッタンチズム』覚書

〔序〕 1840年代はゲルツェンの生涯を通じて最も多産な時期に当たる。このことは長編小説『誰の罪か』(46・47 発表)や、短編小説『どろぼう・かささぎ』や『ドクトル・クルーポフ』(いずれも46年執筆)、哲学論文『自然研究書簡』(45-49年発表)、更に47年1月に西欧へ出てからの評論集『向こう岸から』(47・49年執筆)や『フランスとイタリアからの手紙』(47・49年執筆)など、いずれもロシアの思想と文学の歴史を語る上で欠かすことの出来ない文献が、殆どこの時期に書かれているということによっても知られる。そして、今回取り上げる論文集『学問におけるディレッタンチズム』の執筆・発表もまたこの時期に属するのである。

40年代という時代はロシア思想の歴史においても、作家アンネンコフをして「驚くべき10年」と言わしめたほどに、独特の光彩を放つ時期であった。その特質をつづめて言えば、「若きロシア」(ゲルシエンゾーン)の時代、あるいは、ロシア思想の青春時代、あるいは、自意識の目覚めの時代などと呼ぶことが出来るだろう。それはデカブリストの反乱鎮圧後の、政治的に逼塞した状況とは裏腹な、まさに、「内なる黄金時代」(ゲルツェン)であった。

思想の豊穡さは「スラヴ派」と「西欧派」という、向後の思想界を分断することになる二つの陣営が、この時期に形成されたことに示されている。しかも、40年代も後半になると、その「西欧派」が、「右派西欧派」とも呼びうる、やがて自由主義的傾向を顕著に持つに至る流れと、「左派西欧派」とも呼びうる、やがて社会主義的傾向を顕著に持つに至る流れとに分岐するようになるのである。

こうした一連の流れの中にゲルツェンを嵌め込んだとき、彼はベリンスキーやバクーニンやオガリョフらと共に、「左派西欧派」に属して紛れることはない。そしてその思想の表明されたのが、『学問におけるディレッタンチズム』と『自然研究書簡』においてだったのである。

『ディレッタンチズム』の諸論文と『自然研究書簡』の諸論文とは、執筆と発表の時期が近接し、また、テーマも類似していることもあって、40年代のゲルツェンの哲学思想の表明として、あわせて論じられるのが普通であるが、ここで敢えて両者を切り離し、『ディレッタンチズム』論文のみを取り上げるのは、枚数制限や締切日など、非本質的な、しかし避け難い外的制約もさることながら、両論文集の間には課題の違いが明確に見て取れるように思われるからである。このことは本文の中でも述べられることになるのだが、予め約言しておけば、前者が「哲学」する態度、方法、課題などについて概論的に語る、(彼自身の言葉によれば)「入門書」という性質を持つ(Ⅱ-206) (1)のに対して、後者はその応用編とも言うべき性格を有し、しかもその内容は明確に「哲学史・思想史」である。その

意味で、ゲルツェンのアクチュアルな問題関心は、前者においてより明瞭に読み取ることが出来るのである。

更にもうひとつ、両論文集のヘーゲルならびにヘーゲル左派との関係には小さからざる差異が読み取れるように思われる、ということもある。この点の詳細は本論に譲るとして、ここでは以下の行論を念頭に置いて、ごく大まかな図式を示して置くと一

ゲルツェンとヘーゲルならびにヘーゲル左派との関係を通時的に辿れば、一まず、流刑地における左派ヘーゲル主義との出会いが先にあった。(39年)やがて許されて首都に帰ると、そこでは「右派的」ヘーゲル理解が横行し、専制と農奴制ロシアの是認・理想化がまかり通っている。だが、夙に地方都市や辺境の農村の実態に通じていたゲルツェンには、そのようなヘーゲル理解に同意できるは訳がなかった。(40年ごろ) (A) 彼は「敵の武器」を研究する思いでヘーゲルの原典をひもとき、その結果、ヘーゲル、それも初期のヘーゲルはむしろ自分の考えに近いことを知る。(B)あわせて、彼は同時進行的にドイツの若いヘーゲリアンの動向を知悉することにより、自らの思索の歩みが決して孤立した恣意的ものではないことを知るにいたり、ヘーゲル批判的理解を更に深め、「左派」的な独自の哲学に到達する一

このように図式化したとき、これまた大まかに言えば、(A)段階から (B) 段階への至る過程に『ディレッタンチズム』論文が位置し、明確に (B) 段階に属するのが『自然研究』論文だ、とすることができるだろう。

「ディレッタント」論文を独立して論ずるということの背後には、このような認識があるのである。したがって、本稿の課題は(A)から (B) への至るプロセスを同論文に即して明らかにすることにある、ということになるだろう。

I 論文集は全部で四篇からなる。その発表の年と月を記すと以下の通りである。

第1論文(無題): 42年4月ごろ執筆を始め、『祖国雑記』12月号に掲載。

第2論文「ディレッタント＝ロマン主義者たち」: 同誌43年2月号に発表

第3論文「ディレッタントと学者の組合」: 同誌43年4月号に発表

第4論文「学問における仏教」: 同誌43年11月号に発表

本論に立ち入るに先立ち、論文の執筆に至るまでの経緯を、主としてヘーゲルと関わりのあることについて、クロノロジカルに辿ることからはじめたい。

まず、「シェリングは著作を読んだが、ヘーゲルは断片しか読んでいない」「偉大なところは沢山あるが、必ずしも心を捉えない」と書かれている手紙(1839年1月14日付けアストラコフへの手紙、XXII・12)が関心と呼ぶ。つまり、この時期、ゲルツェンはヘーゲルをまだ本格的に研究していなかったのである。

次いで、オガリョフからの手紙に「ヘーゲルに対する反動を見つけた。」「否、諸君、現実的なものは必ずしも全てが合理的ではない。合理的なものが現実的にならねばならないのだ。現代のドイツ哲学の最良の思想は〈行為の哲学〉だ。」(2)とあることから、ゲルツ

エンは当時のロシアの青年たちの間で行われていた保守的なヘーゲル解釈とは異なる解釈が、西欧では既に行われていることを、オガリョフ経由で知ったのである。

翌42年2月3日付けのアルセーニフ宛の手紙は、『現象学』を読みきったことが告げられているということで注目すべき手紙である。(XX-128) ゲルツェンが同年4月12日の日記の中で、「退職後には哲学を勉強したいと思っている人たち向けの哲学入門を書きたい」(II-206)と書いているのは、彼が『現象学』を読了したと無縁ではないだろう。そしてこの「入門書」に当たるのが、『ディレクタント』論文なのである。

この年の暮れ(12月27日)に彼はこう書いている。

「1842年は仕事と言う点からは、無益とはいえないまでも断片的であった。先ず、熱心にヘーゲルを読んだこと。彼の教説を理解し、これを生き生きと再現したこと。その成果が『ディレクタンチズム』の第一論文である。」(II-254)

ところで、この論文の執筆準備に取り掛かった頃、ゲルツェンは41年6月以来のノブゴロド流刑中の身であった。30歳という人生の節目を二度目の流刑地で迎えなくてはならなかったゲルツェンは、その感懷を日記(42年3月25日)の中でこう書いている。

「30歳！人生の半ばだ。少年時代の12年、学生時代の4年、青春期の6年、迫害と追及、そして流刑の8年。思い返せば楽しいことも悲しいこともある。友情と愛と内面生活が多くのことを贖ってはいる。だが、正直のところ、耐えざる迫害と侮辱はひどい痛みのもとになってきた。30歳という年を思うにつけ、空恐ろしくなる。休息すべきときだ。私は15年でもう役目を果たしたのだから、無期の休暇に入ってもいいはずだ。」(II-201)

いかにも老成した低回的心境の中にいたことが分るが、このような心境は家庭内の事情にも由来している。この時妻のナタリアは4人目の子どもを身ごもり、体調が思わしくなかったところから、モスクワでまともな医師に診てもらいたいと切実に願望していたのだが、皇帝ニコライの意向によって阻まれ、杳として叶えられずにいた、という事情があったのである。(結局この時腹の中にいた子どもは42年の11月に水痘症を持って生まれ、生後、数日にして死んだ。)

『過去と思索』の中で回想されているところによれば、論文執筆の直接的なきっかけになったのは、42年の4月頃に行われたノブゴロドのさる夫人との宗教論議であった。相次いで子どもを亡くしながらも、死後の世界と靈魂の不滅とを固く信ずることにより、至極明るい顔をして生きているこの女性について、同じように幾度となく子どもを亡くしてきたゲルツェンはこう書く。

「私は出口のない悲しみを主観的な空想的信念によって癒すと言う、偉大なる秘密に驚きこそすれ、決して羨ましいとは思わない。彼女にあっては不幸が心に溢れかえり、それが狂気染みた至福に変ったのだ。これに引き換え、私の肩は壊れそうだ。しかし、私は悲しみを担って行く。」(II-205)

さりとてゲルツェンにはこのような宗教意識を笑うドイツ人医師の哲学論にも与するこ

とができなかった。この医師は「シェリング主義」と「生理学」を組み合わせると言う奇妙な論法によって、夫人の宗教観を批判しようと言うのであった。(IX - 26、邦訳『過去と思索』1・498) (3)

だが、このような迷信の域に達した宗教意識や俗流の啓蒙的哲学論の瀰漫は、決して田舎町だけの話ではない。ここで彼は首都での哲学論議を想起せざるをえない。そこでは一方で、正教思想が低俗な「国威発揚主義」的なナショナリズムと結託することによって、他方では、彼の目から見れば不可解なヘーゲル理解の名の下に、ニコライ治下のロシアが美化され理想化されているのだった。

だが、既に二度の流刑を通じ、首都や辺境の役人の世界、民衆の生活のあらましを知悉したゲルツェンにとって、専制と農奴制に集約されるロシアの醜惡な現実、如何なる理由によっても弁明し得ないものであった。一体、このような現実を美化しうる思考とは如何なる思考であるのか。この論文の根底にはこのような憤懣が脈打っているのである。

Ⅱ 第一論文は「われわれは二つの世界の境目に生きている」(Ⅲ - 7、邦訳 63 ページ参照) (4) という宣言から始まる。先ず、この一文にこだわることから始めたい。というのは、この文章にはゲルツェンにとって年来の時代認識が凝縮されているからである。

ゲルツェンは1838年、一度目の流刑地ウラジーミルで(より仔細に言えば、当初の流刑地ヴァトカから移送され、この年の一月以来この町に住むことが許されていたのである)『リキニウス(あるいはローマの舞台から)』という戯曲を書いている。この時、彼は「われわれの世紀は過去と未来の如何なる環を為すのか」と言うテーマで「学位論文」を書く準備を始めていたのだが、彼の関心をとりわけ引いていたのは、古代ローマ帝国の没落とキリスト教世界の誕生の時代であった。そしてその研究成果の一つがこの「戯曲」だったのである。物語の舞台はローマ帝政の末期。目の前にある世界の崩壊を予感しつつ、新しい理念を求めて苦悩する主人公「リキニウス」はゲルツェンその人の分身であった。物語の中で、新しい理念を求めながら叶わず若くして死するリキニウスは、パウロの秘蹟によって蘇り、その伝道に従う。このような過渡期感と新しい時代原理への希求は、終生、ゲルツェンの歴史認識と現状認識の根底にあり続けることになるのである。

ゲルツェンがポーランドの哲学者アウグスト・チェシコフスキの『歴史のプロレゴメナ』と出会うのは、翌39年のことである。ヘーゲル左派の歴史哲学の領域におけるヘーゲル批判の書として知られるこの本の中で、著者は師のヘーゲルと異なり、歴史の進歩を現在において完結したものとは見なさず、その理念の実現を未来の課題とした。彼によれば、未来が予測できないと言うのはカントが「物自体」を認識できないと言ったのと同様の偏見であり、ヘーゲルがその「弁証法」の論理によって「物自体」の壁を突破したように、ヘーゲルのこの偏見を乗り越えることこそが、新しい歴史哲学の課題なのであった。チェシコフスキはその立場を「行為の哲学」と名付けていた。これを一読したゲルツェンは、「主要な点で全て完全に一致していた」と手紙の中で書いている。(XXⅡ - 38)

両者の最も重要な共通性は時代把握の仕方であった。チェシコフスキは「東洋世界」「ギリシャ世界」「ローマ世界」「ゲルマン世界」と言うヘーゲルの世界史の四分法に対し、三分法を対置している。それとは「過去」即ち古代全体（経験 - 自然的直接性の時代）と「現在」、即ち今なお支配的なキリスト教の時代（内省 - 思弁の時代）と、「未来」、すなわち人類史上最後の時代（行為の時代）の三つである。これはまさに「戯曲」の中でゲルツェンが描いていた世界史像と同じであった。

このような歴史認識の根底にあるのは、現代を変革の時代と見なす考え方である。片や、非戦闘員としてではあれ、ポーランドの（30年）11月の蜂起に加わり、その鎮圧後には祖国を離れ流転を余儀なくされることにより、片や、この蜂起を熱狂的に迎え、それが直接的な原因ではないにしろ、これを歓迎させる思想の故に流刑の辛酸を味わわされることにより、共に皇帝ニコライとその治下のロシアへの憎悪を分け持つ者たちにとって、現代は正に解体されるべき時代であった。そして解体された現代が向かうのは、当時はいまだ明確な思想として像を結んでいなかったとは言え、「共和主義」とか「社会主義」（チェシコフスキにとってはフーリエの思想、ゲルツェンにとってはサン・シモンの思想）などと漠然と呼ばれる方向、一つまるところ、フランス大革命において唱えられながらも、根源的にはいまだ実現されていないと感じ取られていた「自由・平等・博愛」の理念を核とする方向であり、この方向こそが彼らにとって「理性」の指し示す「未来」の方向であった。やがて神学に転ずるチェシコフスキはともかくとして、少なくともゲルツェンにとって、これは二〇代の半ばにしてすでに「ア・プリオリ」の域に達した強固な確信であり、その確信は生涯を通じて変わることはなかったのである。

ゲルツェンの「宣言」の背後にあったのは、このような意識であった。

Ⅲ 「学問のための時機が到来し、学問はその真の観念に到達した。自己意識の階梯の全て段階において修練を積んできた人間精神に対して、真理は学問という整然たる形を備えた有機体として、しかも命をもった有機体として、自らを開示し始めた。学問の未来に憂慮すべきことは何もない。」（Ⅲ - 8、邦訳 64 ページ参照）

これは第一論文の冒頭近くの文章である。自信に満ちたこのような断定には、ヘーゲル哲学、とりわけ『精神現象学』の刻印が歴然としている。ゲルツェンは後に「わたしはヘーゲルの『現象学』とブルードンの『社会経済の矛盾』とを読み通した経験を持たない者、この溶鉱炉、この鍛錬を通過していない者は、完全ではないし、現代的でもないと考ええる」と書いているが（Ⅸ - 23、邦訳『過去と思索』1 - 494）、この言に偽りはない。

まず、『現象学』の構成のあらましをざっと辿っておけば――

論述は「感覚的確信」から始まる。これは「無反省的」とも「直接的」とも「自然的」とも形容されるような感覚―無意識的意識のことで、具体的な姿としては、幼児や「未開人」が、あるいは「無知蒙昧」と目される民衆が、あるいはいつそのこと、われわれ全てが日常的に感じている好悪、善悪、美醜、寒暖などの根源的な諸々の感覚に根差した「日

常的な」意識といっても良い、この茫漠とした感覚が自らを感覚として認識する(「知覚する)ようになることから「意識」の歩みが始まる。「意識」は自らの意識の裡に自らと違う何か(他者)の存在を意識することによって「自己」を「意識」するに至る。こうして「意識」は「自己意識」の段階へと階梯を上る。次いで、自己の外の他者に他者の自己意識を認めることによって、自他の意識の根底に遍く存在する「理性」の段階にいたる。「理性」は自他の関係性の認識を通じて自らの普遍性を知ることによって「精神」に高まる。「精神」は集団として共同の精神(「共同体」「宗教」「国家」)となり、さらに諸々の共同体の精神もまた同じように自他の関係性の認識を通じて「絶対知」に登りつめる――

「自己意識の階梯の全て段階において修練を積んできた人間精神」とゲルツェンが書いた時、彼の念頭にあったのは『現象学』のこのような構成であった。

だが、ここで留意されるべきことは、彼が「絶対精神」あるいは「絶対知」といったヘーゲルのタームを用心深く用いていないということである。これは、つまり、ヘーゲルにおける「絶対」なるものの背後、あるいは根底にある「神」的なものは、ゲルツェンの取るところではなかったことを意味している。ゲルツェンがヘーゲルから学んだのは、思惟それ自体に内在するとされる、自己の可能性を開示する力とその論理＝弁証法の持つダイナミズムそのものであり、そのダイナミックな力と論理を根源において、あるいは始源において発動させ支えている超越的な存在、すなわち、「神」ではなかったのである。

人間の思惟の本質が「神」の本質に通底すると言う認識は、ヘーゲルにあっては、後に『歴史哲学』の中で展開されることになる、「神」が人間を使喚して自らの本質を時間と空間の中で開示するという、「理性の狡知」と呼ばれる論理の前提であった。だが、この認識は、読み方によっては人間の神格化と同時に神の人格化でもある。そしてこれは詰まるところ、高い人間賛美の思想とも読み解かれる。ヘーゲルの断案からゲルツェンが読み取ったのはこのような解釈であった。しかも、人間は「神」から自立すべきであった。何故ならば、(ヘーゲル左派のことはここではしばらく措くとして)ゲルツェンの目から見れば、現実の「神」は、ロシア、西欧の別を問わず、実定的な存在に墮することによって、国家や教会等、個々の人間にとっては外在的な諸々の権威・権力の庇護者として機能しているに過ぎなかったからである。

では、「神」という支えを拒否した人間は「自立」の支えをどこに求めるのか。ゲルツェンにおいてそれを突き詰めて言えば、人間その人にしかありえないのだが、そうすると次に問題となるのは、人は如何なる人間であることによって自らを支えるのか、という問いであろう。そこで意味を持つのが「学問」なのである。単純化して言ってしまうと、「学問」を身につけた人間であること、である。では、その「学問」とは如何なるものか。それを語ることが第一論文の課題に他ならないのである。

Ⅳ 哲学者長谷川宏氏のヘーゲル理解には、ゲルツェンのヘーゲル理解に通ずるところがあり、いつでも驚嘆させられるのだが、『精神現象学』の思想的課題について述べた以下

の箇所には、特にその感が強い。というのは、これはまさにゲルツェンの『ディレタンチズム』論文の思想的課題としても読み替えることができるからだ。

『精神現象学』はべつに〈意識の経験の学〉とも名付けられていた。構成を見ても分るように、ここでさまざまな経験をめぐる意識は、学問的にとくに練磨された意識ではなく、私たちが自他の位置に日常ごく普通に見かける意識であって、その意識が、最も単純で卑近な〈感覚的確信〉から、最も普遍的な〈絶対知〉へと上昇してゆく過程の分析が『精神現象学』の主題をなしている。その過程を一つの必然的な過程として描き出すことによって、ヘーゲルは日常意識にとっての学問の必然性を、そして同時に、学問にとっての日常意識の必然性を論証しようと考えたのだった。学問が日常生活を侮蔑し、日常の経験意識を離れた高踏的な理論を展開するのでもなければ、また、日常意識が学問を内容空疎で煩瑣な知識の体系と見なして、これを敬遠するのでもなく、両者がふとい必然性の絆で結ばれ、一つの統一的な地平を形成しうること、このことを闡明するのが恐らく『精神現象学』の最大の思想的課題であった。」(5)

「学問」は何よりも「日常意識」に立脚していなくてはならない。これは「学問」と「日常意識」の関係のアルファでありオメガである。「学問」が「日常意識」から離れた時、その持つ「普遍性」は抽象的なものに止まることによって、それは現実のなかに存立の基盤を失い、滅びるほかないだろう。だが、他方、「日常意識」はそれ自体に止まる限り、「現実的」ではあってもいまだ如何なる「普遍性」も持たない「私的」意識でしかなく、それは確固たる思想的根拠となることは出来ないだろう。

では、両者はいかにして出会うのか。

ヘーゲルは言う。「絶対的に自分の外へ出て行きながら純粹に自己を認識するという、このエーテル（活動の場）そのものが、学問の大本であり、知の一般型である。哲学の始まりは、意識がこの場に身を置くことを前提条件とする。」

これが両者の出会いの前提条件である。予め言っておけば、ヘーゲルはここではまだ「絶対的」な本質の背後に「神」を明示してはいない。その限りで、この命題はゲルツェンの許容しうるものであったはずだ。

更にヘーゲルは言う。「(その) 学問が個人の自己意識に要求するのは、自己意識がこのエーテル（活動の場）へと上昇し、そこで生きる能力を獲得し、実際に生きることである。」

「自分の生きている世界こそが現実の原理をなすと確信している自己意識には、自分は学問の外にあると感じられる以上、学問は非現実の形式である。だから、学問は自己意識の世界と学問とを統一しなくてはならず、もっと的確に言えば、自己意識の世界が学問に包摂されることを示さねばならない。それ以前の、現実性を欠く学問は、潜在的な内容や、内にこもったままの目的しか持たず、活動する精神ではなく、鈍重な精神にすぎない。潜在的な学問は外に出てゆき顕在的にならねばならないが、その過程が学問と自己意識が統一される過程にほかならないのである。」(6)

ゲルツェンが先に「学問に将来に憂慮すべきものはない」書いた時に彼が念頭に置いて

いたのは、ヘーゲルにおいて示された「学問」のこの方向に誤りの無いことを確信していたからであろうし、また、その彼が「私の個性が真理と競い合っている間は、個性は自分の我意のみに服従し、真理を制限し、真理を抑圧し、歪曲し、自分に服従させるからである。」(Ⅲ - 12、邦訳 67 ページ参照) と書く時、彼が念頭に置いていたのは、「自己意識」(長谷川の言い換えによれば「日常意識」) に対するヘーゲルの要請であった。又、ゲルツェンが「ディレッタント」たちを批判して次のように書いているのは、ヘーゲルの考え方の援用と読むことが出来るだろう。

「学問から離れることによって、彼らは自分のぼんやりした感覚—明瞭な形をとることはないが、さりとて、間違ふということもありえない感覚—に依拠するようになる。感覚というのは個人的なものだ。わたしは感ずるが、他人は感じない—これは共に正しい。証明は不要であるし、そもそも証明などできるはずはない。だが、真理への愛の火花が現にありさえすれば、勿論、真理を感覚や幻想や気まぐれの隘路に引き込もうとはしないはずだ。心情ではなく、理性が真理の裁判官なのだ。では、理性には誰が裁判官なのか。理性それ自身である。」(Ⅲ - 16、邦訳 71 ページ参照)

この一文に、先の問い—「人は如何なる人間であることによって自らを支えうるのか」とい問いへのゲルツェンなりの答えをみることで出来るだろう。「学問」を通じて素朴な「自己意識」(「日常意識」) から「理性」に段階に高まった人間それ自身によって—というのがその問への答えである。

即自的感觉から出発するという点で彼は(ヘーゲルと共に)自分たちの立場を「リアリズム」と呼ぶ。[「われわれはリアリストである」(Ⅲ - 13)]そしてそれが「学問」によって「理性」に階梯に高められているがゆえに、彼は(ヘーゲルと共に)自分(たち)の立場を「理性的リアリズム」とも名付け、(Ⅲ - 16、邦訳 71 ページ参照)このような立場を共にしないものをゲルツェンは「ディレッタント」と呼ぶのである。

例えば「学問を信用せず、学問に携わることを好まない者」(Ⅲ - 8)「学問を文字面だけで理解し、その生ける精神には触れようとしない者」(同)「学問を趣味としているだけの者」(Ⅲ - 10)「死んだ世界のことを懐かしがっているだけの者」(Ⅲ - 11)等々。

これを要するに、西欧の最新の知識(それは多かれ少なかれ市民革命の時代を反映していないはずはない)を吸収しながら、それらの根源的な意義を理解せず、西欧とは似ても似つかないロシア社会の現実に目を瞑り、内面の葛藤に苦しみながらも、自ら「余計者」となって身を持ち崩して行く者、あるいはそのような現実と心にもなく折り合うことによって農奴主としての立場に安んずる者、現実の醜悪さに過去の黄金時代を対置しつつ、それに回帰することによってこれを乗り越えようと夢想する者たち、等々「デカブリスト」以後の知識人たちの陥った病弊を包括的に批判し去ろうと言うことなのである。

ところで、「理性の裁判官は理性自身である」とは詰まるところ「人間は人間である」という同義反復の宣言に等しい。だが、果たしてこれは根拠のない宣言であろうか。

そもそも中世思想の根本のところにある思想は、「神は神である」という同義反復ではなかったか。何故ならば、「神」と言う主語が別の述語を持ってしまつては最早「神」ではなくなってしまうのだから。

近代哲学が中世的な神学思想から離陸しえたのは、「神は神である」と言っている「人間」の存在に気づいたからだ。だが、ここでも「神は神である」と言う命題そのものは否定されはてはいなかった。ヘーゲルもまた、この枠内にあったと言ってよい。ただし、彼はそのことに人が気づいたという事実に、人と神とを結びつける隘路を探り当てたのであった。

だが、「神は神である」と言っているのが人間であるとすれば、「神」を「神」たらしめているのは「人間」だと言ってもよいだろう。とすれば新たな命題は「人間は人間である」でしかありえないだろう。

そのことに気づいたのはフォイエルバッハであった。かくして、「神が人間を創ったのではなく、人間が神を作ったのだ」という『キリスト教の本質』の命題は、現代思想の方向を指し示すものとなった。ゲルツェンがフォイエルバッハのこの本を読んで快哉を叫んだのは故なきことではない。フォイエルバッハの発見に、自らの思索の過程を踏まえていち早く共鳴しえたゲルツェンは、その意味で、フォイエルバッハと共に、現代思想のとば口に立っていたと言うことが出来るだろう。かくしてゲルツェンはヘーゲルの位置を次のように確定しうる地平に立つことが出来たのである。

「ヘーゲルを狡猾だとか偽善者などと呼ぶべきではない。新しい見解は以前の見解と遠く離れようとしていたが故に、彼自身、自分の諸原理のあらゆる帰結を告白する勇氣がなかったのだ。そこから避け難い帰結—多くの実践的結論における曖昧さが生まれる。彼が望んでいるのは、おのずから流れる真の自然な結論ではなく、現にあるものと和解していることである。彼には、他のものに語ることが恐ろしいようなことを語るのが、恐ろしかったのだ。若い学派はより多くを口に出して言うことが出来た。彼らにはヘーゲルにあった周囲の事実の世界への畏敬の念は希薄であった。しかし、忘れてならないことは、こうした念が希薄であるのは、ヘーゲルが若い世代を高みに昇らせたからである。彼らはその高みから、ヘーゲルが到達して彼らに開示して見せたものを、丁度、山に登った者に見える眺望のように、一目で見ることができた。ヘーゲルが昇った時、彼には山以上のものを見るわけには行かなかった。彼はこのことに驚愕した。だが、山は彼が味わったあらゆる体験、あらゆる運命に余りに多く結び付けられていたのだ。時間の中での理念の発展とは、常にこのようなものだ。それ故に、先人に判決を下す場合には、あくまで公平でなくてはならない。ルターも、ミラボーも、プラトンも、皆乗り越えられた、つまり、深められたのだ。」(Ⅱ - 230、強調原文)

Ⅴ 上の文章は1842年9月30日の項からの引用だが、この時ゲルツェンはすでに第1論文は書き終えている。第1論文におけるゲルツェンがヘーゲルの影響圏の中に丸ごといたわけでないことは、上に見てきたことから明らかだが、さりとて、そこにはこれ

ほど突き放した見方が出来るほどの距離も感じられなかった。むしろ、初期ヘーゲルのラジカリズムを自らのラジカリズムと重ね合わせながら、そのラジカリズムの核心とも言うべき「弁証法」を自らの問題関心に即して援用している、といった感があつたのである。とすると、ゲルツェンの「ヘーゲル離れ」は、どうやら、第1論文以後のことといえそう。ここで念のため、これ以後の論文の執筆時期を日記によって確認しておく、第2論文が執筆されているのは42年5月の中旬のことであり(Ⅱ-212)、第3論文が執筆されているのは、同じく42年11月末のころのこと、(Ⅱ-246) これら二つの論文は同年12月の末に、ほぼ時を同じくして書き終えられている。(Ⅱ-254)そして、注目すべきことに、この第3論文の末尾に上の引用文がほぼそっくりそのまま使われているのである。

では、第1論文執筆終了後のこの展開は、どのように辿ることができるのか。

何よりも先ず、ゲルツェンが42年7月に流刑を解かれモスクワへの帰還が許されたという事実が大切だろう。帰還後の当初こそ「モスクワとの出会いは楽しいものではなかった。近しい者たちは殆ど誰もいない」(Ⅱ-219、7月25日付け)などと、孤独を託ってはいいたものの、いざサロンへの出入りが始まり、論争の輪の中に飛び込んでみると、再び活気に満ちた日常が始まることになるのであった。

この時期、モスクワのサロンでは西欧とロシアの進路を巡り、熱い議論が行われていたことは周知のことだが、今、その詳細に立ち入っている暇はない。一部は既に別なところでなされており(6)、又一部には別稿を用意する予定である。そこで以下では本稿の課題に即して論点を絞り、日記のうちからこれに関連した記述のみを拾って行くことに限定したい。

先ず目に付くのはヘーゲル左派への言及が急に増えているということである。例えば、42年7月29日の項には、モスクワではカトリシズムに対する正教の優位が声高に論じられていると言うのに、「ドイツでは若いヘーゲル主義者たちが実定的宗教を厳かに否定しつつある」と書き、ロシア思想の立ち遅れが嘆かれている。(Ⅱ-221)

ついで8月15日の項では『ドイツ年誌』を読んだ後の感想として、次のように書かれている。

「彼らにとってドイツ哲学は講壇から現実生活に進出しつつある。社会的、革命的になりつつある。肉体を得つつある。したがって、出来事の世界における直接行動に移りつつある。そこでは政治教育における大きな進歩がはっきりと見て取れる。ドイツ人たちは通常彼らに浴びせられている非難から殆ど自由にありつつある。」(Ⅱ-223)

「論文の一つははっきりと次のように結ばれている。〈明確に断固として決せねばならない。『キリスト教と君主制か、哲学と共和制か』ここには確固たる深い思想と、それと静寂主義の性格とを共に持って政治的解放へと向かうドイツがある。解放の事業におけるドイツとフランスの性格がいかに対照的かは、『ドイツ年誌』と『独立評論』とを例に取れば明白だ。〉(Ⅱ-224)

ところで、ゲルツェンが言及している論文を『ドイツ年誌』の中で突き止めたシペトは、ゲルツェンがこの論文を恣意的に引用していることを指摘しているが、(8)それはそれで別

の様々な関心が掻き立てられるというものだろう。しかし、ここでは差し当たり、ゲルツェンが「哲学」を「共和制」と共に、新時代の理念に掲げていることに注目して置きたい。ゲルツェンにとって「学問」とは「哲学」のことであり、しかもヘーゲル「哲学」とその流れを（ゲルツェン的な意味で）正当に汲む「哲学」、若いヘーゲル主義者の「哲学」なのである。

以下、いささか余談めくが、「学問」＝「哲学」＝「若いヘーゲル主義の哲学」と言う語の連環は、新しい想念を呼び覚ます。今、このことに少し立ち止まってみたい。

つまり「学問」と「科学」の関係についてである。

ここに言う「学問」と言う語は、ロシア語では наука、英語、フランス語では science、ドイツ語では Wissenschaft であるが、いずれの言語にあっても、通常の使い方に従う限り、互いにそのまま転換しうる、つまり、訳語の問題で悩むことはないのである。だが、日本語ではそうは行かない。すなわち、上のヨーロッパの各語には「科学」と言う訳語も可能なのであり、しかも「学問」と「科学」では日本語の観念が必ずしも一致しないところに悩みがあるのである。即ち、「学問」といえば幾分なりとも理論化され体系化され洗練された（その限りで抽象的でもある）知識の集積を指し、「科学」は「学問」と言う観念に包摂されながらも、これに更に、実証性、法則性、具体性という観念も付け加わるのである。

実際、これまでのわが国の研究書・研究論文の中ではこの論文が、一再ならず「科学におけるディレクタンチズム」と訳されてきたし、私自身、そのような訳語を用いたこともあるのだが、これを敢えてここでは「学問の・・・」と訳したのは、本稿では主としてヘーゲルとの関連を述べると言うことに眼目があり、しかも、ヘーゲル研究の領域では専ら「学問」と言う語が用いられているという事情があったからだ。しかし、話が進んで、「ヘーゲル左派」との関連に言い及ぶ段になると、事情は若干異なってくる。即ち、彼らは自分たちの知的営為に「学問」と言う語のもつ洗練性よりも、多少粗野で荒削りではあっても、むしろその実証性、法則性、具体性の方を誇らしげに言い立てるようになるように思われるのである。若いヘーゲリアンがやがて「哲学」を離れ、社会理論の構築へと関心を行きに行くことになるのも、このような文脈の中で考えれば、当然の成り行きとして理解できるだろう。やがてエンゲルスが自らの社会主義＝共産主義を従来の（「空想的」）社会主義から区別して、「科学的社會主義」と呼んだあの矜持が、彼ら若いヘーゲリアンには顕著なのである。そしてゲルツェンもまたこの矜持を分け持っていたとすれば、以後「学問」と言う語に代えて「科学」を用いるべきだということになるだろう。だが、それでは記述を余りに煩瑣なものにするだろう。それ故、ここでは наука は、常に「科学」とも読み替えうるということを含んだ上で、引き続き、「学問」と訳すことにしたい。

余談というにはいささか重い話であったと思うが、ここで再び日記に帰ろう。

42年9月22日の項である。ここでは後期のヘーゲルは自らの初期の原理(弁証法)の帰結の前にたじろいだ、若いヘーゲル主義者たちはこれを越えて進んでいる、言った意味のことが書かれている。「ヘーゲルがこれらの原理を放棄したのは彼が das Bestehende(存

在するもの)を愛し、これに敬意を払っていたからだろう。彼はこれが攻撃に耐えられないであろうことを知っていた。そして、彼は攻撃を加えることを欲しなかった。彼には差し当たり自分の原理をとことん突き詰めるだけで十分だと思われたのだ。若い世代はこれらの原理から出発した。前に踏み出すその一步が das Bestehende の深く刺し貫く攻撃に他ならなかったのだ。」(Ⅱ - 229)

そして、次に先に引用した箇所が続くことになるのである。

以上が第2論文と第3論文執筆中と思われる時期におけるヘーゲル、および若いヘーゲル主義者への言及のあらましである。では、こうした観点がこれらの論文にどのように反映されているか、これを見ることが次の課題となる。

Ⅵ 第2論文では「現代思想」の概観から始まり、西欧思想の歴史がスケッチされている。それはあたかも『自然研究書簡』の下書きと言った感のある大掴みな素描だが、これを今日只今のものとして読んでもさほどの違和感はない。

ゲルツェンは思想における現代を「古典主義」と「ロマン主義」の対立が和解に達しつつある時代と見なしている。結論的に言えば、「和解」を齎したのはヘーゲルで、ここから新しい時代が始まろうとしている、と言うのがゲルツェンの時代認識である。

では「古典主義」とは何か、「ロマン主義」とは何か、そしてこの両者は如何なる原理を体現していたのか、そして、その原理はいかに和解されたのか、そして、和解から如何なる新しい原理が生まれ出とうとしているのか。

19世紀の初頭はフランス革命への反動の時代であった。革命を支持した人々の間には「憂愁と空虚感、悔悟と絶望、裏切られた期待と幻滅、信念への渴望と懷疑」が支配した。(Ⅲ - 25) この苦悩から逃れるべく、フランス思想は「信仰と騎士道的剛勇さと勇気の統一と言う魅力的な特質」を持った「中世の偉大な幻影」に救いを求めた。(Ⅲ - 26)「それまで封建的なものを全て軽蔑していたフランスはネオ・ロマン主義に傾倒した。」(同) 折りからドイツにもロマン主義が台頭しつつあった。それは時期尚早な「宗教改革」への反動として、神秘主義的でカトリック的であった。両者は仲良く出会った。かくして「カトリックの中世」への回帰がロマン主義の旗印となった。(同)

しかし、全てがロマン主義に屈服したわけではなかった。教養の基本をギリシャ・ローマの古典に依拠していた「ヴォルテールと百科全書の直接の継承者たち」―「古典主義者」たちは「若い世代を軽蔑の念を持って」眺めていた。(同)

だが、古典主義もロマン主義もいずれも「二つの偉大な過去に属する」。前者は古代の世界に属し、後者は中世の世界に属する。だが、今やいずれも独立した居場所を持つことは出来ない。何故ならば、現代は古代にも中世にも似ていないからだ。(Ⅲ - 29-30、邦訳 83-84 ページ参照)

そもそも、古典・古代の世界において人々は自然を敬愛し、自然と一体なって生きていた。自然の中には神々がいた。人々は自然の摂理に、神々の支配のもとにあったが、人は

同時に自然と神々の側に生き、神々に美の衣を着せ掛けることによって、自然を賛美し、自然と、神々と一体化した生活の中で満ち足りていた。(Ⅲ - 30)

これに対して、中世はキリスト教の時代だが、その基本的性格を規定しているのはカトリシズムでありロマン主義であった。ここで思想の基礎となっていたのは「唯心論と先験論」であった。精神的なるもの・天上的なるものと、物質的なるもの・地上的なるものとは対立物となり、その闘争の中で前者が優位を占め、後者は貶められた。「自然は虚偽であり、真実なものではない。一切の自然的なものは捨て去られた。人間の精神的本体は〈肉が影を落としていることに顔を赤らめた〉」。自己の無限性と自然に対する優越性を悟ると、人間は自然を無視しようとした。その結果、「古代の世界が夢にも思わなかった魂の豊かさ」が明らかにされ、「美に代って靈性が芸術の目的となった。」だが、「生命は己の二重性に苦しみ、内的不調和に悩み始めた。」(Ⅲ - 31 - 32、邦訳 85-86 ページ参照)

だが、人間はこの不自然な緊張感の中に長く止まっていられなかった。「真の生」が己の権利を主張し始め、「感情と理性」がこの声に呼応した。「古典主義の世界が死者たちの中から蘇り、中世の精神の全く対立する動きが人間的活動のあらゆる分野において己の存在を宣言し始めた。」(Ⅲ - 33)

新しい世界はこの動きの中から「生まれた」(Ⅲ - 34) 新しい世界は別の肉体を求めた。目は古代世界に向けられた。ローマのサンピエトロ寺院の造営はその象徴であった。「ゴシック建築はピエトロ寺院の後ではもはや不可能であった。それは過去のもの、アナクロニズムとなった。」(Ⅲ - 35、邦訳 89 ページ参照) 絵画も再び大地にしっかりと根をおろした。「イタリアの絵画はビザンチン様式から脱却し、明らかに、元の古代的な美の理想に帰ったのである。」(同)

同様の変革が文学の世界でも起こった。セルバンテスは意地悪な皮肉を持って中世世界の無力さと時代遅れを嘲笑し、ボッカチオはカトリックの修道生活の欺瞞を暴いた。(Ⅲ - 35-36)

「シェークスピア―それは二つの世界の人である。彼は芸術のロマン主義の時代を閉じ、新しい時代を開く。その天才は人間の主観性を余すところなく深く十全に開示し、情念と無限性を余すところなく明示し、生を究めてその深奥に潜む生の秘密を大胆に追求し、見出されたものを暴きたてた。その天才は最早ロマン主義のものではなく、これを踏み越えるものであった。」(Ⅲ - 36、強調原文、邦訳 90 ページ参照)

その間にもカトリックとプロテスタントの戦いは続いていた。その戦いの中でカトリックは若返り、プロテスタントは成人した。だが、新しい世界はそのどちらのものではなかった。そのことを体現するのはエラスムスであった。「彼は言った。〈人文学に従事しているので、法王とルターの闘いに口を挟むことを欲しない。〉と。」(同)

この人文主義的世界の思想は古典主義的世界にもロマン主義的世界にも根を持っていた。その世界の思想はそのどちらでもあり、そのどちらでもなかった。古典主義的世界とロマン主義的世界は新しい世界に自己の墓場を見出さねばならないと同時に、自らの不死も見

出さねばならなかった。何故ならば、両者には永遠に全人類的なものもあったからだ。あらゆる人が成長の過程でロマン主義の時代を経ることからも、それは知られる。又、両者の違いは人間的な資質と気質の違いとしても、いつの時代にもどこにでも存在しうるであろう。だが、このことと排他的な流派が存在すると言うこととの間には、無限の隔たりがあるのだ。(Ⅲ - 37-38)

ゲーテとシラー—彼らの天才の光によって相対立する傾向は統合され、完全な一つの見解となった。

そして 19 世紀—新時代はナポレオンの進軍によって始まる。それを迎えたのは「ゲーテとシラーの賛歌であり、カントとフィヒテの力強い思想」であった。(Ⅲ - 38)

そしてヘーゲル：「ヨーロッパ中に鳴り響き、ナポレオンと並んで口にされる最初の名前は、偉大なる思想家の名前であった。諸原理の身震いするような闘い、血なまぐさい争い、粗暴な廃棄の時代に靈感を受けたこの思想家は、哲学の基礎として、対立物の和解を宣言した。彼は敵対しあうものを斥けたのではない。彼はそれらの闘いを生命と発展の過程と理解したのである。彼は闘いの中に闘いを除去する至高の同一性を見たのである。われわれの時代の深い意義を内に蔵したこの思想が意識に到達し、詩人たる思想家 [ゲーテのこと] によって語り出されるや、それはすぐに思弁的な弁証法の思想家によって、学問と言う整然とした厳しい形式で展開されたのであった。」(Ⅲ - 39、邦訳 93 ページ参照)

第 2 論文はこのように、ヘーゲルの登場をもって終わっている。そして、ポスト・ヘーゲルの時代たる現代は如何なる時代であるか、それを示すのが第 3 論文の課題となる。

第 3 論文の冒頭でゲルツェンは理念 (原理) の盛衰のサイクルについて書いている。それによれば、あらゆる理念が生まれ実現される過程で、その内部にこれを破壊するような理念が必ず生まれる。この対立関係が「輪廻」と異なるのは、この対立のうちに人類は進歩し発展するということだ。

ある原理 (理念) は多くの人々に受け入れられ実現されてゆく過程で、より深く究められ、精緻なものとなって行く段階が必ずある。そしてやがてそれは体系化され制度として確立する。そしてこのプロセスにおいて否応なく知の「専門化」が進み、そこに知の独占権が生ずる。ゲルツェンはこれを「学者の職人組合」と呼ぶ。これは理念の発展・深化の段階にあってこそ「不可欠な有機的組織体」ではあったが、だが、その傍らで新しい原理が生まれ育って来る段階になると、これは最早有害なものと化す。ゲルツェンによれば、現代はまさにそのような新しい理念と古い理念の交替期なのである。今やこの種の「学者」には退場願わねばならない、とゲルツェンは言うのである。彼は書いている。

「現代の学問は自らを明るみに出し、万人に身を投げ出すことが求められるような、成熟した時代に入りつつある。現代の学問には講堂や会議室では退屈であり窮屈である。それは広々とした場所に出たがっている。それは生活の現実的諸分野で本当の声を出したがつている。このような傾向にもかかわらず、それは学者のカーストの手中にある限り、た

だ願望するに止まり、生き生きとした要因として実践の場の奔流に入り込めない。ただ生きた現実を知る人々だけが学問を生活の中に根付かせることができる。偉大な仕事が始められた。それは静かに行われているのだ。」(Ⅲ - 44、邦訳 97 ページ参照)

つまるところ、第3論文の趣旨は上の記述に尽きると言っておいて大過ないだろう。

Ⅶ 第1論文においてヘーゲルを学んだ成果が示され、更に進んで第2、第3論文ではヘーゲル左派的立場からヘーゲルの時代的存在意義を確定した上で、第4論文ではいよいよヘーゲルを乗り越える一步が宣言されることになる。

この論文が出来上がった日は、論文に末尾に記されているところによれば、「1843年3月23日」である。論文の完成した日付をこのように確認した上で、改めて想起しておきたいのは、同年1月7日付けの日記の中に見られる、「ドイツにおける反動」についての感想である。周知のようにこの論文はバクーニンが「J.Elysard」なるフランス人名で『ドイツ年誌』の42年10月号に掲載したものである。その内容に立ち入っている暇はないが、差し当たりごく大雑把に、ヘーゲル左派のモチベーションをフランスの左翼が深い共鳴を持って受け止めたという意味を持つ論文であった、といっておけばいいだろう。ゲルツェンはこの時「Elysard」なる人物が何者かを知らず、文字通り、ドイツ思想とフランス思想の幸せな出会いと受け止め、次のように書いた。

「芸術的で素晴らしい論文だ。これはおそらく（私に知る限り）ヘーゲルとドイツ思想を理解する最初のフランス人だ。これは民主主義的党派の声高で公然たる勝利の雄叫びだ。」

「フランス人がドイツの学問を理解し、これを一般化しその普及に努め始めるようになる時に、der Betätigung（行為）という偉大な言葉が始まるだろう。ドイツ人はこのことへの言葉をまだ持たない。この問題において、おそらく、われわれもまた貧者の一灯（лестра）を献ずることぐらいはできるだろう。」(Ⅱ・256-7)

だが、翌2月15日付けの日記には「J.Elysard とベリンスキーからの手紙」(Ⅱ - 266)という短い記述があることから、この頃には、ゲルツェンは例の論文の本当の筆者がバクーニンであることを知っていた、ということが分るのである。

このような一見瑣末と思われるかもしれないことを書くのは、実は第4論文ではロシアの思想的役割が「貧者の一灯」以上のものとして声高に宣言されているからだ。つまり、ゲルツェンは、バクーニンがかの「Elysard」であったという事実の中に、彼自身新しい潮流と見なしていたヨーロッパの思想界における、ロシア思想の果たしうる役割の大きさを読み取ったのではないか、ということなのである。そのように推測すれば、第4論文におけるゲルツェンの自信に満ちた語り口もうなずけるというものだろう。

さて、論文の実際の論述の順序は前後することになるが、再びヘーゲルへの言及から始めよう。

「第3論文で—と彼は書いている—われわれはヘーゲルがしばしば自らの原理を一貫させていないと、と書いた。だが、何人と言えどもおのれの時代を超えてたつことは出来ない。」

彼において学問は最も偉大な代表者を持った。彼は学問を極点まで推し進め、そのかくも稀なる強い力に、恐らくそれとは知らずに、強い打撃を与えてしまった。何故ならば、前へ進む歩みは全て実践的諸領域への歩みでなくてはならなかったからだ。彼個人は知ることだけで満足した。それ故、彼はこの一步を踏み出さなかった。…新しい時代は理解されたことを現実の世界で実現することを求めている。」(Ⅲ - 82)

では、それは如何なる行為によって為されうるのか。「理性的で道徳的に自由で、激しく精力的な行為」(Ⅲ - 71) によってだ。

では、そのような行為をなしうるのは如何なる人間か。ここで第4論文の最初に戻ろう。

ゲルツェンは書いている。「学問は先ず個人性 (личность) に犠牲を求める。心情を引き渡すことを要求する。これは絶対条件である。」(Ⅲ - 65) だが、個人性は学問の中でそのまま消滅するのではない。「学問は個人的なるものを一般化することによって昇華させる。学問において個人性が滅びる過程は生成の過程である。直接的に自然的な個人性が意識的で自由に理性的な個人性となる過程である。個人性は新たに生まれるために一時留め置かれるのである。」(Ⅲ - 66) また言う—「自然的直接性の中で死することは精神において蘇ることを意味しており、仏教徒のように、終わりのない無の中で消滅することではない、己に対するこの勝利は葛藤のあるときに可能であり、現実的である。精神の成長は肉体の成長と同じように困難なのである。」(Ⅲ - 67)

このような人間には知識だけの「平安な観照やヴィジョンの至福だけでは足りない。彼は渴望の充足と生の苦悩を求める。彼は行動を求める。何故ならば、行動だけが人間を満足させることが出来るからだ。行動は個人性そのものである。」(Ⅲ - 68-69)

ヘーゲルは『歴史哲学』において、このような行動へと駆り立てられる人間の情念の真の出所を神に求め、理念の実現される有様を「理性の狡知」と呼んだ。だが、ゲルツェンには最早人間の理性や情念を陰で操る神など必要はない。彼は理念に実現に向けての人間の行為を自らの責任の下におく。「行動は個人性そのものである」とはその謂いである。また彼はこのようにも言う。

「理性的で道徳的に自由で、激しく精力的な行為の中で、人間は自らの個人性の現実性に到達し、自ら現象の世界において永遠化する。かかる行為において、人間は時間性の中で永遠であり、有限性の中で無限であり、類と自分自身を体現するものであり、己の時代の生きた自覚的器官である。」(Ⅲ - 71)

「理性的で道徳的に自由で、激しく精力的な行為」！一幾重にも重ねられた形容詞のこの重みに、何も言えず何も出来ない状況の中で生きることを余儀なくされた、力ある者の呻き声を聞き取るべきであろう。

では、このような行為を担える人間はどこに見出せるのか。それはロシアにおいてだ、とゲルツェンは言う。ここには再びお馴染みの例の「後進性の優位」の論理が顔を出す。

「恐らく過去を生きることの少なかったわれわれは学問と生活、言葉と行為の真の統一の体現者となるだろう。歴史の中に遅れてやってきた者に与えられるのは、骨ではなく、

汁気の多い果実である。実際、われわれの性格の中には、フランス人の最良の側面とドイツ人の最良の側面とを結びつける何かがある。われわれはフランス人とは比較にならないくらい学問的素養に満ちた考え方をすることが出来るし、ドイツ人の俗物的町人的生活に馴染めないわれわれには、ドイツ人には決してない gentlemanlike な何かがある。そしてわれわれの額には、フランス人の額には決して凝集することのない、偉大な思想の痕跡が頭れているのだ。」(Ⅲ - 73)

このような断言に「学問的」裏づけなど求めるべきではないだろう。この論文は同時代の人々の精神を鼓舞する、一種のアジテーションとも読むべきなのである。ある友人はこれをベートーベンの「エロイカ」に準えたが(Ⅱ - 265)、確かに4つの論文にはその4つの楽章に似た響きがある。とりわけ末尾の一文は、「解放」への切なる思いを籠めて歌い上げた、激しいフィナーレである。今は、ゲルツェンをしてそれを存分に歌わせて、本稿も閉じよう。

「学問の神殿の扉から人類は、意識に鼓舞されて、昂然と頭をもたげて出てゆくだろう。Omnia sua secum portans(すべてをわが身につけて)―神の都の創造的な建設に向かって。

学問の和解は知識によって矛盾を取り除いた。実生活における和解は至福によってそれを取り除くだろう。実生活における和解はエデンの園のもう一本の木の果実である。アダムはその果実を血の汗を流し、困難な労苦の果てにもぎ取らねばならなかった。―そして彼はそれをもぎ取ったのである。

だが、これからはどうなのだろう。まさにどうかということこそ未来の問題なのだ。われわれには未来を予知することが出来る。それはわれわれこそが、未来の三段論法が立脚する前提にはかならないからだ。―しかし、それは一般的な抽象的な形で予知しうるにすぎない。やがて時が到れば、諸事件の稲妻が黒雲を引き裂き、邪魔物を焼き払い、未来は、[アテネの守護神=引用者注] パラスのように、完全に武装して生まれ出ることだろう。未来への信仰はわれわれの最も高貴な権利であり、何人によっても奪われることのない至善なのだ。未来を信ずることによってわれわれは現在への愛に満たされるのである。

そして、この未来への信仰こそ苦難の時にわれわれを絶望から救うだろう。そしてこの現在への愛は善き行為によって生きたものとなるだろう。

1843年3月23日(Ⅲ - 87-88、強調原文)

注

(1) А.И.Герцен. *Собрание сочинений в тридцати томах*, Изд.АН СССР, М.,の巻数(Ⅱ)とページ数(206)とを意味する。以下同じ。

(2) 41年6月25日・西暦7月7日付けオガリョフからの手紙[カールスバード]、Н.П.Огарев. *Избранные социально-политические и философские произведения*. Под.общ.редакцией М.Т.Иовчук и Н.Г.Тараканова, т.2-315

(3) 邦訳『過去と思索』第1巻、金子幸彦、長縄光男訳、筑摩書房、1998年、

(4) ゲルツェン、和久利誓一訳「科学におけるディレクタンチズム」世界大思想全集、哲学・文芸思想27、河出書房、昭和29年所収のページ数を表す。ただし、引用は必ずしもこの訳に忠実ではない。

(5) 長谷川宏『ヘーゲルの歴史意識』講談社学術文庫、1998年、40ページ

(6) ヘーゲル、長谷川宏訳『精神現象学』作品社、1998年、016、017ページ

(7) 拙稿「ゲルツェンの見たチャアダーエフ」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ(社会科学) no.6 2003年、pp.1-16.

(8) Г.Шпет, *Философское мировоззрение Герцена*, Экскурс 2, Герцен и Фейербах, Петроград, 1921, стр.83.

第四章

ゲルツェンとロジチェフ

[序]

コロンビア大学「バトラー・ライブラリー」の稀構本・手稿部門には「バフメーチェフ・アーカイヴ」と呼ばれる、亡命ロシア人関係文書のコレクションがある。本稿はここに収蔵されている資料、「ロジチェフ・ファミリー・ペーパーズ」に基づき、ゲルツェンに対するロジチェフの「思い入れ」の跡を辿ることにより、従来見過ごされていたゲルツェンの思想的遺産の継承関係の一端を明らかにすることにある。（「バフメーチェフ・アーカイヴ」というのがどのようなものかということについては、別のところ（「成分社」のホームページ、『リレー・エッセイ』）で書いたことがあります。本日はそのコピーを用意してありますが、概略をお話しておきますと、「バフメーチェフ」というのは 1917 年に 2 月革命でできた臨時政府のアメリカ駐在ロシア大使であります、これが 10 月革命後にアメリカに亡命しコロンビア大学の（確か）工学部の教授となった。その後、68 年、ブレジネフのチェコ侵攻に際して、プラハに集まっていた亡命者の資料がソヴィエトに接収されてしまい、「西側」で自由に使えなくなってしまったということから、改めて資料の集約作業が計画され、結局バフメーチェフのいるコロンビア大学にその拠点の一つができたということなのです。もう一つはスタンフォード大学の「フーバー研究所」で、こちらには戦後の冷戦時の資料が集められているということで、より政治的な意味合いの強いアーカイヴであるのに対して、「バフメーチェフ」の方は、ロシア革命に関連した資料が多いということです。

フョードル・イズマイロヴィチ・ロジチェフ(1854-1933)の生涯の詳細は本文ならびに稿末に掲げた略年譜に譲り、ここでは予めその概略を記しておけば、トヴェーリ県の名門地主貴族の家庭に生まれ（1854 年）彼は、ペテルブルグ大学を卒業後 74 年（22 歳）に持村に帰り治安判事として自治体活動に挺身し、1905 年革命後は「カデット」派の国会議員（トヴェーリ県選出）となった。雄弁家として知られる彼の今日に伝わるエピソードとしては、時の宰相ストルイピンの強圧的な政策を批判し、彼が反体制派を縊るのに用いた絞首刑用の索を評して「ストルイピンのネクタイ」と呼んだことが想起される。17 年 2 月に臨時政府が発足すると、彼はフィンランド担当のコミッサールとなったが、10 月革命後にはいち早く亡命し、一時期西欧各地を転々とし、結局はゲルツェンの長女ナタリア・アレクサンドロヴナの住むローザンヌに定住し、そこが終焉の地となった。（33 年没）

その間、彼自身の言葉によれば、ゲルツェンは彼の思想と行動の導きの糸であり続けた。彼はその最晩年に当たる 1932 年、不治の病の床にあって、自らの生涯を回顧する長大な手紙を書いているが、その中で彼はこんな風書いている。

「私の政治意識はゲルツェンとフランス革命史を読んだ印象の元に決定されました。人権宣言は私にとって座右の銘であり理想であり続けていました。これらの原理によってロシアの問題、とりわけ農民問題や民族問題に対する私の態度も決定されたのです。」（『回想』158）

周知のように、ゲルツェンの思想は多くの場合、革命思想の系譜の中で語られてきた。しかし、ゲルツェンという人の思想がこのような枠組みの中だけで論じることのできない広い幅を持っていることは、1912年にゲルツェンの生誕百年を記念して、当時の思想界がさまざまな角度からゲルツェンについての論じ、それぞれが彼の思想の後継者をもって任じたことによっても知られる。レーニンの例の「ゲルツェンの追想」がマルクス主義者（ボリシェヴィキ）からの発言であるとすれば、「リベラル」派からは、ストルーヴェ、フランク、ブルガーコフなどの発言があること知られている。だが、ここに挙げた「リベラル」派の人々が70年代生まれで、いずれも「ロシア・ルネッサンス」期の思想家といわれる人々であることを考えると、彼らより半世代早いロジチェフの存在は、ゲルツェンと「ロシア・ルネッサンス」の世代の中間に位置することが分かる。その意味で、ロジチェフという人の生涯の軌跡もまた、リベラルに対するゲルツェンの影響を論ずる場合の、一つのケース・スタディとなりうるだろう。

もっとも、あらかじめ言うておけば、彼を「思想家」と呼ぶことは出来ないだろう。略年譜をざっと辿ることによっても明らかなように、79年にわたるその生涯の中で、目立っているのは自治体の活動や国会議員としての仕事であり、まとまった著作としては、生前に断続的に発表し死後にまとめられた『回想』がある程度である。つまり、ロジチェフという人は、「思想家」ないし「理論家」というよりは「実践家」なのである。

だが、その「実践」を支える精神たる「自由への愛」(Peter Struve *My Contacts with Rodichev, The Slavonic Review*, vol.12, 1933-34 p.365「私はかつてロジチェフを自由を愛する人と呼んだことがある。実に自由こそ彼が生涯を通じて愛してやまぬものであった。ロシアの専制政府のデスポチズムに彼は唯一の敵とロシアにとっての主要な不幸とを見た。ロジチェフは才能豊かな詩人にしてリベラリズムの司祭長であった。))の背骨には、ゲルツェンが常に居続けた。本稿の課題とは、つまるところ、そのことを具体的な事実関係に即して明らかにすることにあるのである。

[1]

ロジチェフがゲルツェンの存在を始めて知るのは1872年のことである。当時まだペテルブルグ大学の学生であった彼は、病弱な母親の湯治のお供で西欧を歴訪し、ジュネーヴでゲルツェンの著作と出会ったのである。彼はその時のことを熱い思いを籠めて書いている。

「1872年ジュネーヴでたまたまゲルツェンの著作が手に入った。それは彼の死後に出版された論文集であった。私はこの本を手放すことができなかった。それは私にとって自由な精神の啓示であった。

私は母に伴われてベルリンからパリへ、パリからジュネーヴへ旅した。パリで私に最も強い印象を与えたのは『フランスとイタリアからの手紙』であり、『牢獄と流刑』であった。ジュネーヴで私は『過去と思索』をやっと手に入れた。

私はまさに信従すべき人にめぐり合ったのであり、生涯を通じて彼を愛したのであった。ゲルツェンは私にとって自由思想を最初に宣言した人たちーノヴィコフやラジシチェ

フから、デカブリストや60年代の活動家たちにいたる、生きた伝統を体現していた。彼はロシアの解放とヨーロッパの運動との生きた結び目であった。

しかし、何にも増して、そして何よりも先ず、ゲルツェンの価値は精神の自由にある。彼はいかなるドグマにも膝を屈することはなかった。作家は驚くほどに大胆である。彼は後に「爆弾王」と異名されることになるブルボンが群集からピストルで狙撃するに適当な距離にいた時に、ナポリの市民が折角の機会を逸したことを残念がったが、他方において、プスコフの租税が一人のプーシキンを生み出したことを残念とは思わないと、大胆にも言うてのけたのであった。」(『回想』13)

「ゲルツェンは陰謀家でも反乱者でもなかった。この自由の意識が彼を四囲の状況から屹立せしめ、彼を不羈の人たらしめ、変化の時代にあつて簡明にして安定した不動性をもたらし、判事はおろか、後には警察にも、ドゥーベルトにまでも感銘を与えたのである。デカブリストの時代以降、ロシアには人物がいなくなったが、ゲルツェンはニコライ治下の30年間、魂を鼓舞する例外であった。屈することのなかった数少ない人々の一人であった。彼は成したことによってのみならず、まさに存在したことによって、ロシアの自由に寄与したのである。」(『回想』14)

「ゲルツェンは単なる作家ではなかった。彼は私の生涯を通じて私の愛する作家であり続けた。彼の生涯にも多くの誤りがあったことを知った今、私の目には、かつて若々しい感情によって飾られたあの後光に彼が包まれということはなくなったが、それだけに彼は私にとって身近で親しみやすい、そしてより理解できる存在となっているのである。(『回想』15)

若いロジチェフはゲルツェンに会いたいと思った。しかし、当のゲルツェンは70年にはすでに死去していた。そこでロジチェフはゲルツェンの盟友オガリョフに会うことにした。アーカイヴにはこの時にロジチェフがオガリョフに宛てて書いた手紙のコピーが残されている。日付は1872年7月22日、発信地はジュネーヴ。「私はペテルブルグ大学の学生です。もし、あなたさまが私に会ってくださるという可能性をお与えくださるならば……」といった、いとも硬い文章で始まるこの手紙には、これまで遠くからはるかに臨んでいた著名人への若々しい畏敬の念が溢れている。「もし私があなたさまを訪問することを不都合とお考えになるとしたら、せめて小さなお写真でもお送り下さいませ。私としてはもうそれだけで深く感謝申し上げます。」(BRA Collection Rodichev Family Papers Box7 Folder: To Nikolai Platonovich Ogarev)

幸いにしてオガリョフは彼にあってくれることになった。興奮のあまり、彼は自分がオガリョフに何を話したのか覚えていないほどであった。「私の眼に涙が浮かび、彼の眼にも涙が浮かんでいたように見えたことだけを覚えている」と彼は『回想』の中で書いる。(14)

この時のオガリョフは彼と内縁関係にあった女性の息子なる人物をロジチェフに引き合わせた。ヘンリーという名のこの男は急進派の一人で、インターナショナルでバクーニン派に属していた。彼はロジチェフをゲルツェンに心酔しわざわざオガリョフを尋ねて来た

ほどの者だからてっきり自分たちの同志と思い込み、ヨーロッパの革命運動の実情を熱心に語り、ロシアの労働者の間にプロパガンダの可能性はないかとロジチェフに尋ねた。ロジチェフはあいまいな答えを返すしかなかった。男は更に尋ねる。「」そもそも彼らは集まると何の話をしているのでしょうか。彼らは何をしているのでしょうか。」私はなんと答えたらよいものか分からず、戸惑い、思わず本当のことを言ってしまった。」連中は飲んでいますよ。」—「私と同じようにね」オガリョフはそう言って指で自分を指した。」(『回想』14)ヘンリーは更に秘密結社の必要性を説いた。ロジチェフはここにネチャーエフの思想を認めて、しばし彼と論争した。しかし、「オガリョフは黙ったまま」だった、とロジチェフは回想している。(『回想』14)

小さなエピソードではあるが、ここには同じ世代の青年の間でのゲルツェンの思想の受け止め方の違いの大きさがよく伺える。また、最晩年のオガリョフの有様も窺わせるエピソードとしても興味深い。このころ、彼は盟友ゲルツェンを失い、バクーニンやネチャーエフの思うままに操られていたのである。

その後翌年にロジチェフはもう一度オガリョフに会っているが、彼その人についてロジチェフがさほど強い印象を受けていないのは、革命運動史ならびに思想史におけるオガリョフという人の存在の影の薄さを物語っていると言えるだろう。

とは言え、帰国後もオガリョフとの文通は途切れたわけではなかった。アーカイヴには1872年から74年にかけて書かれた3通の手紙が残されている。

たとえば、1872年の手紙(日付不詳)では、チェルヌィシェフスキーの減刑と流刑地の変更(サラトフへ)についての嘆願書がボトキン博士から出され、当局も一旦はそれを検討したが、本人が減刑も移送も拒否したために、沙汰止みになり、むしろ監視は強くなったという話を報告している。

また、73年3月10日(西暦3月22日)の手紙では、ラヴロフの雑誌『前進』について、自分としては少しも面白いところはないのだが、第3課はこれを危険視して国内への持込を禁止している。それでもやはり国内には入ってきていて、それを所持している学生が罰せられている。モスクワでは30人の学生が検挙された、と報告している。

同じ手紙の中ではサマラ県の飢饉のことにも言及されている。以下、その概要を記すと：—政府はこの事実を認めていないので政府からの援助期待できないが、婦人を中心に救援活動が始まり、40万ルーブルが集まった。しかるにツァーリによって派遣された調査団は、飢饉が知事によってしかるべき処理され、餓死者もいない、と報告した。そのため、婦人会はその活動を停止してしまった。このような時にこそ、「コロコル」のような雑誌の存在は有益なのだ。誰もが生き生きとした言葉と指示とを待っている。ところがわが国では国内にそのような言葉を期待できない。勢い、ラヴロフの『前進』のような雑誌が読者を得、崇拜者まで生まれるようなことになってしまう。50年代、60年代に蒔かれた種は一体どこへ消えてしまったのだろう。民衆は騙されているから、自分たちが愛し感謝しているツァーリに刃向かうことなどないだろうと言われているけれど、胸に手を当てよくよく

考えて見れば、ツァーリを愛しているのは百姓だけではないということに思い当たらざるをえないのだ。－

現存するオガリョフ宛ての最後の手紙は1873年あるいは1874年のもので、ここでは文部大臣トルストイの民衆への教育政策が各県の貴族団によって競って支持されていることへの不満が語られている。「何もかもが精気を失い、腐敗しています。・・・40年代のニコライ時代は重苦しく、今よりも状況は悪いくらいでしたが、それでもあの頃は人々にははっきりした目標も期待も理想もありましたし、農奴制の廃止という民衆の心に確かに触れる何かがありました。しかし、今のロシアの生活にはゲルツェンが言っていたような内発性（イニシアチヴ）がありません。だから、私の思うに、誰もが些細な活動に夢中になったり、あるいは、古い旗印にしがみつき、61年や62年のお題目を相も変わらず唱え続け、当時の敵を相手に未だ戦い続けたり、そのこと自体に反感を抱いたり、とうの昔になくなり、舞台から退いた連中の思い出にふけっているだけの党派を追い掛け回しているのです。」

(Folder: To Nikolai Platonovich Ogarev v.p., 1872-1873 or 74)

[2]

帰国したロジチェフは仲間にゲルツェンの思想を吹聴しようとする。しかし、彼らにとってゲルツェンは民衆の境遇に共感を寄せる、一寸有能な旦那階層の作家の一人に過ぎなかった。この時代、若者たちの心を捉えていたのはチェルヌィシェフスキーだったのである。「70年代の学生は政治的自由という問題にあまり関心を持たなかった。－ロジチェフは書いている－最も過激な学生を支配していた理念は社会主義革命の理念で、ぼんやりとはあったが、ロシアは自由な共同体の大きな連合のようなものとして夢想されていた。憲法という問題に対しては否定的であったし、社会的自由の法的保障というようなことには無関心であった。」(『回想』16)

通常、ゲルツェンの思想はナロードニキ主義の先駆と見なされている。確かに、「農村共同体を基にして資本主義を経ずに社会主義を」という戦略に関する限り、両者の思想的な近似性は疑うべくもないが、ロジチェフのこの証言を聞き、また、ゲルツェンが『過去と思索』で書いている若い世代との確執とを思い合わせると、両者の間には超えがたい溝があったことも疑いない。ここには思想の理論的継承性と思想的体質とは必ずしも常に一致するわけではないことの事例がある。この問題を思想の歴史の中でどのように扱うべきか、興味深い問題であろう。

実際のところ、ゲルツェンには憲法とか法的保障という観念は希薄であり、彼にはむしろ「法」という観念そのものを西欧でブルジョアジーが自らの既得権を守るための方便に過ぎないという考え方のほうが強く、その意味でも、ゲルツェンは道標派の批判するいわゆる「インテリゲンツィア」の体質を色濃く持っていたのである。それに民衆信仰に基づく共同体信仰もまた、ゲルツェンはナロードニキと共有していた。にもかかわらず、ナロードニキとは「そりが合わず」なかった。これもまた紛れもない事実であった。

想像の域を出ないのだが、ゲルツェンが生きていて、若いロジチェフに会っていたならば、両者は深く共鳴しあうものを感じあったことだろうと思う。それは単に両者が共に貴族の出身であったということだけでは説明できない要因、また、思想性とも必ずしも関係のない、言うなれば、人間性に対する感性の共通性に由来するものではないかと思われるのである。

もちろんこれはゲルツェンとロジチェフの間にあったのは感性的な共通性だけだったと言う意味ではない。そこには共通の思想的課題もあった。それを一言で言い表せば、「ロシアの近代化」ということにつきるだろう。

思うに、ゲルツェンの思想的課題は「ロシアの西欧化・近代化」と「西欧・近代の克服」とを同時的に実現するということにあった。少々乱暴な図式化を取れば、前者を犠牲にしても後者を解決しようとしたのがナロードニキであり、また、スラヴ派であったのに対して、後者を犠牲にしても前者の解決に重点をおいたのがリベラルであった、といいつつよい。

では、ゲルツェンにとって「近代化・西欧化」の本質はどこにあったかといえ、人間の尊厳性の意識の確立、一言でいえば「ヒューマニズム」の確立であった。農奴制のもとでの非人間的な行為を目の当たりにするにつけ、ゲルツェンにとってこの課題の解決は焦眉の問題であった。政治体制の歴史的進歩性とは関係のない、また、政治的に見て体制派であるか反体制派であるかとも関係のない、ありとあらゆる「デスポチズム」への憎悪はここから生まれる。それはフランス革命を主導した思想、とりわけヴォルテールにつながる思想、というよりは感覚・感性であった。ロジチェフがゲルツェンの中に認め、共鳴したのはこの思想的課題であり、その課題意識の根底にあるこの感性・感覚だったのである。

しかし、他方で、ロジチェフには「西欧近代の克服」という意識は極めて希薄であった。筆者の知る限りでは、ロジチェフには西欧・近代を論じたものはない。（これは半世代下のリベラルとの違いである。しかし、今はこの点に立ち入ることはしない。）しかも、ロジチェフはロシアが西欧・近代を克服するための担保としてゲルツェンの提示した「農村共同体」の機能についても、極めて否定的である。これは彼が治安判事として農村の実態と深くかかわったことから得られた認識であった。彼は書いている。

「共同体に実際にかかわり持つまでは、私はゲルツェンの言う共同体の偉大なる意義という説に忠実であったが、私にとってロシアの生活の重要な問題は自由の問題であった。1876年当時であっても、1906年当時と同様、私が考えていたのは人民のための土地ということであった。『自由を、そして土地も』だが、自由なくして土地に何の意味があるろう。ゲルツェンの言葉から私が共同体に見ていたのは、ロシアの人民の発展の保障であった。あとはただ、自由がありさえすればよかった。私は、ヴェシエゴンスク治安判事会議の事案で共同体の問題にこの目で触れるようになるまで、また、農民の福利その侵害や不正といった問題において共同体がいかに無力かを知るまでは、長いことこした見解を抱き続けていた。」（『回想』、16）

「40年の間農奴時代のやり方を破壊しようとしてきたが最後まで破壊しつくすことができなかったことを知った。これらの農奴制時代の習慣が民衆の間にいかに永くまたいかに強く残っているか、・・・人間の尊厳性の認識や個人の感覚がいかに緩慢にしか育っていないかをみた。

治安判事になってから2-3ヶ月して早くもこうした見解に疑問が生じ始める。

農民が購入して私有地となった土地には共同体の支配は及ばないのである。そして、これらの土地の所有者たちには自己の所有権の意識が極めて激しくまた強く、彼らはこれを何としてでも守ろうとするのである。

「共同体それ自体には土地を獲得する能力はないことも知った。土地を買いとる能力をもった者たちは共同体を望んではおらず、“無能力者”たちとつきあうことも望まず、必要最小限度の範囲にとどめておきたがっている、ということもわかった。」

「共同体は何よりもまず、課税と徴税のため道具であることがわかった。『皆は一人の敵』というのが共同体のモットーなのである。

「共同体は徴税権を持つものの手に握られた道具であるが、しばしば金持ちの手に握られた道具でもある。有力な農民は分与地のほかに、広大な土地を持っている。冬になると彼は自分で購入した土地から取れる干草で家畜を養うので、隣人よりも二倍、三倍もの家畜を養うことができるのである。が、夏になるとミールの放牧地を使い、ミールの草をいのように食べさせるのである。」(回想、37-38)

ロジチェフの見るところによれば、共同体は耕地の改良という点でも無力であった。彼は書いている。

「トヴェーリ県では一人当たりの分与地は4.5デシャチンであり、そのうち耕地はおそらく3デシャチン以上はあるのに、秋撒きの種は一人当たり一デシャチンで以下ではない。これは黒土地帯の農民の一人当たり分以上である、通常の良い収穫であれば、十分生活してゆける作高である。しかし、通常の収穫のためには飼料が必要である。つまり、家畜だ、干し草だ、牧草地だ、だというわけだ。それとてもしばしば十分ではない。牧草の作り方を変えることだってできるはずなのだが、そのやり方を見れば、共同体の影響というものがいかに少ないかを目の当たりにすることになるし、ゲルツェンの同じ言葉が思い返されるというものだ。『共同体の課題は農業経営の成否にはない。』」(40)

「農民が土地に手入れを行わず、ただ自然の力だけを利用しているようなプリミティヴな経営の条件のもとで、共同体が発展するという例がないわけではないが、それは土地が実際に肥沃で、人間はただこれを利用するだけでほかに何もする必要がないという場合だけだ。

こうした考えに私は次第に捉えられていった。現実が書物から得られた信仰として受け入れられた見解を覆していったのである。この点に関して私は共同体的所有についてのポスニコフの学位論文を思い出さないわけにはいかない。70年代の青年にとってこの書物は必読書とみなされていた。本は面白いものであった。イギリスにおける農業経営がいかに

に高い水準にあるかを描き出すことによって、ポスニコフは農業経営の発展のいかんは農業者によって耕される土地が誰の所有に属するかには関係がないということを立証しようとしていた。イギリスでは農業経営は賃貸地において発達しているのに対して、ロシアでのそれは共同体的な一時的に所有される土地において発達している、というのである。が、ポスニコフは遺憾なことに、イギリスの農業経営が発達した際のひとつの条件を見逃していた。それは、賃貸人たる農業者の利害が、法律によって保障されているということである。残念ながら、イギリスの賃貸関係についての立法やアイルランドの土地運動はナロードニキの思想にとって気づかれないままであった。ロシアの共同体は利用者の利益を保障するための通常の法律を作り出すことがなかったのである。

ロシアの農業経営の成否を決める中心的問題は、これまでも、そしてまた、今もなお、個人の自由の問題、自由な人間をいかに育成するかという問題であり続けているのである。人権の問題、個人の権利の問題は・・・ロシアの生活の根本的問題なのである。かくして私はこうした農業者独自の法律がぜひとも必要だという信念をもって、また、これが実現されるのを見たいという願望を持って、私は判事の職務を担うことになったのである。」(41)

[3]

共同体の機能への否定的な評価はロジチェフの社会主義離れを決定的にするが、しかし、これはロジチェフにおいてはゲルツェン離れとは結び付くことはなかった。彼にとってゲルツェンの思想の本道は「個」の解放、個人の主体性の確立という点にあったからだ。ただ、ゲルツェンにおいて「個」の解放といい、主体性の確立といい、いずれも一人一人が自らの内面において自立的に達成すべき倫理的・道徳的課題であり、そこには個人に対する法的保護という視点は皆無であった。その点、時代状況の違いのしからしめるところか、思想家と実務家という資質の差のしからしむるところか、ロジチェフは法による個人の保護の保障ということ自らの課題とする。「弁護士制度」の確立ということが彼の主要な課題となるのである。他方で、ロジチェフは民衆への啓発活動の前提として、民衆教育にも意を用いている。彼は『回想』の中でトヴェーリ県の民衆への教育活動の成果について書いているが、そこで語られている例として「マクシーモヴィッチ学校」がある。これはP. P. マクシーモヴィッチ(1817 - 1892、65 - 79年、トヴェーリ県カシンスク地区選出のゼンムトヴォ議員)によって1870年に設立された女子教員養成機関で、対象となったのは農民出身の少女であった。このような学校の出身者と大都会あるいは地方都会の中高の教育機関で学んだ知識人たち(後に「第3要素」третий элемент—1900年サマラ県の副知事コンドイジによって命名された—と呼ばれることになる人々 『回想』212)の積極的な協力のもとに充実した民衆教育が展開され、70年代の末にはトヴェーリ県の民衆の識字率は40%に上ったと書かれている。(『回想』58)

しかし、こうした充実した地方自治体の活動は国家官僚の眼には危険なものと思われ、

政府筋からの干渉が幾度となくなされた。しかしこうした干渉を撥ね退けてなお自治体活動は進められ、80年代の初めには全国的な規模で憲法制定への機運が盛り上がっていたのであった。

その機運を一気にしばませてしまうのが81年の3月1日事件（「人民の意思党」によるアレクサンドル一世暗殺事件）である。これによって世論は一変し、一気に反動化がすすむことになるのである。アレクサンドル2世のもと、ロリス・メリコフの改革に期待していたロジチェフとすれば、この事件は痛恨の極みであった。彼は書いています。「アレクサンドル二世の改革の事業が完遂されていたならば、民衆の力、民衆の創造性はあらゆる方面に解き放たれたことだろう。」（『回想』79）

ロジチェフの活動の一貫した方向は、官の力に対抗しうる民の力を如何に創出するかに向けられていた。そしてその力の源をむき出しの力ではなく、啓蒙的・教育的な力に求めていた。その点、ロジチェフがゲルツェンの著作の内、最晩年の論文である「古い同志への手紙」をとりわけ高く評価しているのは、頷ける。ゲルツェンの政治的遺言書とも言われるこの論文で、ゲルツェンは（ネチャーエフ的な）陰謀や（バクーニン流の）暴力的蜂起による体制変革のやり方の弊害を説き、民衆への啓蒙活動の重要性を語っているのである。たとえば、以下に引くのはその一節である。

「打建てられようとしている新しい秩序は、人をきる剣であるのみか、護りの力でもなくてなりません。古い世界に打撃を与えることによって、その中で救うに値するすべてのものを救済するだけでなく、障害とならぬもの、独自のものもまたその運命のままに残して置かなくてはなりません。精神の貧しい芸術的意味の乏しい変革は惨めです。それは過去に獲得されたすべてのものから、ただ口には糊する道をもたらしことが唯一の取り柄でしかないような、退屈な仕事場を作り出すだけでしょう。」先に私はこの文章を「精神における貴族・ゲルツェン」を示すものとして引用したことがあるが、（『過去と思索』3-601）それは私がこの文章に「リベラル・ゲルツェン」の真骨頂を認めたからに他ならない。

1881年3月以降、地方自治体運動は冬の時代を迎えることになるのだが、その時代もやがてアレクサンドル3世の死によって終わりを告げるかに見えた。若いニコライ二世の時代が始まるのである。

新帝の即位にあたりトヴェーリ県の貴族団の中には、新帝に祝いの言葉を述べ、彼に期待するとことを述べようという機運が盛り上がり、ロジチェフはその文章の起草をゆだねられる。ロジチェフは起草文の趣旨を述べた上で、文案を提案していますが、そこには「リベラル・ロジチェフ」の真骨頂が示されているように思われるので、以下に訳出して見た。

「私たちが希求するのは何にも増して、法の支配であります。君主の思想と意思との明瞭なる表現たる法をして、私たちを支配せしめんことを、万人をして例外なく、とりわけ権力を代表するものたちをして、この法に従はしめんことを。これこそが平和と真理との第一の枢要な条件であります。人民の幸せは、その生き生きとした諸々の力を自由に発揮

することに、自覚的に活動すること(деятельность)にあります。ただ生き生きとした活発にして自由な、そして共同的な働き(союзный труд)の中でこそ、人民の幸せも各人の幸せも大きなものとなります。個々の機関のみならず個々の人々のこのような活動(деятельность)と、このような活動に基づく諸権利が、揺るぎなく保証されんことを。人民の思い、私たちの願いはその表現を見出さねばなりません。こうしたことを求める私たちの声が、こうした思いの表明が常に陛下のお耳に届くよう、法に則していかなる障害を受けることなく常に自由に直接に陛下に届くように、期待いたします。私たちは人民の生活に内実を与える生き生きとした社会活動(общественная работа)の発展と自由な伸長と詠歌の下さるならば、祝賀文の草稿を提案させていただきたく思います。」

この趣旨は全会一致で承認され、ロジチェフは引き続き草案を読み上げます。以下、その抜粋です。

「ロシアの人民への陛下のお勤め(служение Ваше русскому народу) (強調引用者)の始まる意義深い日に当たり、トヴェーリ県のゼムストヴォは臣民の祝意をここに謹んで奉呈致します。

「私たちは玉座の高みから人民の望むところに耳を傾けていただけるであろうという期待を抱いております。私たちの幸せが法の不断の執行のもとに、大きなものになりかつ強固なものとなることを切望いたしております。何となれば、ロシアにおいては君主の意思の執行を体現する法こそが、この権力をたまたま個々に代表するさまざまな者たちよりも高みに立たねばならないからです。私たちは個々人の諸権利と社会的諸機関の諸権利が揺るぎなく保証されるものと、衷心より信じます。

陛下、諸々の行政機関を代表する者たちのみならず、ロシアの人民の願いと意思の表明が玉座の高みにまで届くように、私たちは社会的諸機関がそれらにかかわる者達の諸々の問題に関してその思うところを述べる可能性と権利とを期待しております。陛下、私たちは陛下の治世においてロシアが、生き生きとしたあらゆる社会的力と共に、平和と真理の道を邁進することを期待しております。私たちは、玉座と祖国とに等しく忠順なるあらゆる階層の代表達との結びつきの裡に、陛下の権力が新しい力の源と、陛下の寛大なるお指図が成功裡に執行されるための保証とを見出されるものと、信じます。」

だが、これに対して、ツアーリからの思わぬ反応が待っていた。以下、その「お言葉」である。

「忠誠なる心を現さんと参集したすべての身分の代表者たちに会えることは余の欣快とするところである。ロシアの民一人一人の古来固有なるこの心根の真実を、余は信じて疑わない。されど、聞くところによれば、近年、いくつかのゼムストヴォの集まりにおいてゼムストヴォが国内の祭りごとに容喙せんと夢想するものたちの声が聞かれたとのことである。みなのはよく知っておくがよい、余は民の安寧のために力の限りを尽すことによつて、余の忘れがたい今は亡き父君のなされたのと同じように、専制の原理を確固不動のものとして維持するであろう。」(88)

そしてあろうことか、奉書を起草したロジチェフはあたかも犯罪者であるかのように扱われ、公職を追放されてしまうのである。

以後不遇の時代は 10 年近く続き、政治の表舞台に復帰するのはやっと、1905 年革命後のことであった。彼はペトルンケーヴィチらの奔走によって公職追放の処分を解かれ、トヴェーリ県選出のカデット派の国会議員となって、政界への復帰を果たしたのである。以後、彼は第四国会まで国会議員として議席を護ることになるが、その間のエピソードとしては、第一国会の中で、ストルイピンによる反体制運動への弾圧を議政の壇上から批判し、例の「ストルイピンのネクタイ」演説を行い、不穏当の発言として懲戒処分を受けたことが挙げられる。概して、ロジチェフは雄弁をもって知られ、彼が演壇に立つ日には傍聴席は一杯になったと言われ、ストルーヴェは彼とマクラークとストルイピイとをもって「三大雄弁家」と呼んでいる。(Peter Struve My Contacts with Rodichev, The Slavonic Review, vol.12, 1933-34, p.363) その雄弁さが買われて、後に、1971 年 2 月以降、彼は厭戦気分の濃厚な前線の兵士の前に立って、戦意を鼓舞する演説をするという役割を担うことになる。もともと、これはロジチェフが心ならずもやったことではなく、むしろ、戦争の継続は彼の政治的信条のしからしむところでもあった。彼はこの戦争をドイツに対するロシア民族の存亡を賭けた戦いと位置づけていたのである。こうした立場からロジチェフは 8 月の「コルニーロフの反乱」と呼ばれる事件においても、コルニーロフの行動を支持している。もともと、この事件が果たして「反乱」と呼ぶのが妥当かどうかについては、たとえばリチャード・パイプスの説などもあり、今日では一概には言えないところであるから、コルニーロフを支持したことをもって「非ゲルツェンの」とか、そもそも戦争継続論自体がゲルツェンの信奉者らしからぬ、などという議論をしてみても不毛だろう。それに、あらかじめ言っておけば、本稿の課題は国会におけるロジチェフの活動の跡を辿ることではない。実は国会での彼の演説の草稿はアーカイヴにタイプライトされた形できちんと残されており、これを丹念に読めば国会活動の跡は明確になるはずなのだが、何分にもそれは膨大な量に上り、これを読むことは生半可なことでは到底出来ないし、冒頭に先にも記したように、本稿の課題はゲルツェンに対するロジチェフの「思い入れ」の跡を辿ることなのである。そこで、以下では、彼の国会活動を離れ、ゲルツェンとの関係に戻ることにしよう。

[4]

その際、主として依拠するのは、「ロジチェフ・ファミリー・ペイパーズ」に残されている、ゲルツェンの長女ナタリアへ宛てたロジチェフの手紙である。それは署名のついたものだけでも百数通、その他署名のないもの、葉書なども加えると百数十通に上る。本来これは往復書簡であるべきなのだが、ロジチェフは 1917 年 10 月以降、ペテルブルグを逃れて南ロシアを転々とし、更に国外に脱出し、西ヨーロッパ各地（アテネ、パリ、ジュネーヴ、ワルシャワなど）をも転々とすることになるので、その間に、ナタリアからの手紙は

散逸してしまったものと思われる。

これに対してナタリアの側はロジチェフの書簡を大切に保管しておいたわけで、彼女はさすがにゲルツェンの娘であるといわざるを得ない。ゲルツェンという人は、自分の歴史的な存在意義について深く侍むところがあり、自分にかかわる資料は極めて丹念に残しているのである。それは自分の手紙すら写しを取っておきたい程に徹底していた。一だからこそあんなに膨大な回想を残したわけだが—そんな男の娘にすれば、この種の資料を保存するという事など、むしろ常識に属していたのであろう。

手紙は実にさまざまなところから書かれている。1917年以前はタヴリーダ宮殿のロゴの入った上質の便箋に書かれたものが多く、彼の活動の場が偲ばれる。また、発信地の表記がペテルブルグからペトログラードに変わっていることには、時代の状況の移り行きが見て取れる。他方、オデッサからの手紙は紙の質も悪く、筆跡も雑なものが目に付く。パリからの手紙にはホテルのロゴが見える。以下、余談に属することだが、概して、手稿を相手とした仕事の面白さは、書き手の心境や書かれた時の周囲の状況などに思いを馳せることができるという点にある。これまでも、私には、たとえばニコライ大主教の手紙や日記など、活字になる前の段階で接する機会が幾度となくあったのだが、その時にも書き手であるニコライの息遣いまでもが感じ取られて、実に楽しかったことを覚えている。今回の場合は家族とも別れ別れになって逃亡の途上にある人の書いたものを読むわけだから、とても面白いなどという心境にはなれないとは言え、それでもアーカイヴ・ワークの醍醐味を味わったことは確かである。

以下にナタリア・ゲルツェン宛てのロジチェフの手紙のリストを掲げておく。

Ms Collection. Rodichev

Box 7 Letters of Feodor I. Rodichev to various persons

Folder: To Natalia Aleksndrovna Herzen

Folder:1912-1913(Petersburg)5a.l.s/12-9-25(10-8),13-9-3(16),13-1-2(15),13-10-23(11-5),13-10-31(11-12)).

Folder:1914(Petersburg,,Brindisi,Italy)5a.l.s./2-18(3-3),2-21(3-6),3-30(4-3),5-16(29),8-12

Folder:1915.(Petrograd) 1 a.l.s./11-23(12-6)

Folder:1916(Petrograd) 3 a.l.s./1-28(2-10),1-29(2-11),7(20)

Folder:1917(Petrograd&Moscow)1a.l.s.3 a.l./5-11(24),8-16(29),12-3(16),12-7(20)

Folder:1918(v.p.) 3 a.l.s. 2 a.l./1-9(22),8-11,9-29,10-10

Folder:1919-2~8(v.p.)3a.l.s,1a.l./2-25(12)(Одесса),5-30(17)(Athenes),6-13(7-30)(Бэлград),6-25(7)(Бэлград)-

Fold:1919-10~12(Belgrade & Paris) 9 a.l.s, 1 a.l.

Folder:1920-1(Paris) 6 a.l.s., 1 telegram.

Folder:1920-2(Paris) 8 a.l.s., 1 telegram

Folder:1920-3~5(Warsaw and v.p.) 3 a.l.s., 1a.l.

Folder:1920-6(Warsaw) 7 a.l.s..
Folder:1920-7(v.p) 7 a.l.s., 1 a.l.
Folder:1920-8(Paris) 1 a.l.s., 3 a.l., 1 telergam.
Folder:1921-1~2 (Paris) 6 a.l.s.
Folder:1921-3 (London) 4 a.l.s., 1 a.p.c.
Folder:1921-4~8 (Paris) 6 a.l.s.
Folder:1921-12(Sierre, Switz.) 1 a.l.s., 2 a.p.c.s.
Folder:1922-1(Sierre, Switz.) 11 a.l.s., 2 a.p.c.s.
Fold:1922-2(Sierre, Switz.) 8 a.l.s., 2 a.l.
Folder:1922-3(Sierre, Switz. & n.p.) 5 a.l.s., 1 a.l.
Folder:1923~1933(v.p.) 8 a.l.s., 2 a.l. 1 a.p.c.
Folder:Rome & Brindini, Italy, 10 & 10 Aug. n.y. 2 a.l.s.
Folder:Lausanne, & Paris, Oct. 1919 4 a.l.s.
Folder:1912-10-12(11-12)(CHI6)

さて、手元に残されている手紙のうち、最も古いのは 1912 年 9 月 25 日付けのものである。この手紙は先便で送ったモスクワのゲルツェン家の写真についてコメントを加えたもので、この手紙の書きぶりからすると、両者（ロジチェフとナタリア）の手紙のやり取りは既にかかなり前からなされたことが伺われるのだが、この種の文通がいつから始まったものは、残念ながら、この度の調査によっては明らかにはなしえなかった。それと、1912 年といえば、ゲルツェンの生誕 100 周年にあたる年で、いろいろの記念祭が行われたはずなのだが、これらについての言及も、残念ながらこれらの書簡には見出されなかった。

翌年にはゲルツェンの好んだボクロフスコエ村の写真を送ります、といった手紙がある。この頃の付き合いはこの程度のものであったということであろうか。

16 年 1 月 28 日付けの手紙はロジチェフとのゲルツェンとの思想的な接点を知る上で興味を惹かれる手紙なので、関連した部分を訳出して置こう。

「1 月 9 日は貴女のお父上の年忌に当たりますが、これは私どもには結婚記念日でもあります。そしてさらにロシアにとっては 1905 年の記念日でもあります。そしてフランスには 1793 年の記念日—ルイ 16 世の死んだ日に当たります。」

[Folder:1912-1913(Petersburg)1916-1-28(2-10) (CHI6)]

手紙の冒頭における、ただそれだけの挨拶だが、ここではロジチェフがゲルツェンと 1905 年革命とフランス革命とを一つの連想によって結び付けていることに注目したい。ついで、「この春には直接お目にかかりたいものです」と書いているが、これが実現した様子は無い。「お目にかかる」場所がロシア（モスクワか、ペテルブルグか）であるのか、ヨーロッパ（スイス、ローザンヌ）であるのかも、この文面からはうかがい知れない。ゲルツェンの遺族にロシアを訪問させたいという企図をロジチェフが持っていたとしても不思議はな

いのだが、このあたりの事情が判然としないことも残念なところである。

[Folder:1912-1913(Petersburg)1916-1-28(2-10) (СП6)]

...9 января – это годовщина Вашего отца – дени моей свадьбы. И еще русская годовщина 1905 года. И французская годовщина 1793 – день смерти Х VI. ... Л

А знаете – с сегодняшнего дня я начинал писать надежду, что Вас увижу этой весной сс буду гоорить с лицом к лицу?

...В Декабре один еврейский журнарист поместил одну статью некоем Бен-Ами(...), где Б.А. рассказывает, что раз, за обедом у русского эмигранта Драгоманова, в Женеве, он встретился с Вашим братом Александром Александровичем. Б.А. рассказывал про книгу Дрюмона La France Juive, в которой Дрюмон доказывал, что все революционеры – еврей – вот, например – Герцен. – А.А.-ч засмеялся и сказал: В этом есть доля правды. Как так? – Да моя бабушкм со стороны отца – была еврейка.]

さて、運命の 1917 年に入ると、この年のものとして残されている最初の手紙は 5 月 11 日付けのもので、ここにはこんなことが書かれている。

「貴女は私どもの革命が平穏に、整然と行われたと書いておいでになりますが、私たちは 1300 人もの犠牲者を埋葬したのです。1848 年 2 月 24 日、パリの革命は 400 人の犠牲者を出しただけだったと思います。今や最初の勝利の日々は過ぎ、危惧の日々、危機の日々が始まりました。もともと私は今も楽天主ですが、... にはともあれ、一旦自由を味わった以上、人々がもはや絶望的な隷属に陥ることはないということを、私は知っています。1865 年、エドガー・キネはこのように考えて自らを慰めたものですが、私たちにとってこれは慰めではなく、私たちの信念の根拠であり、希望の根拠でもあります。ナタリア・アレクサンドロヴナ、今こそ貴女はモスクワにおいでにならなくてはなりません。モスクワは革命の町ではありませんでしたが、早晚、ロシア共和国の首都となることでしょう。」

[Folder:1917(Petrograd&Moscow)1917-5-11(24)(СП6)]

Вы пишете, что наша революция пришла так спокойно, так же стойко. Мы похоронили 1300 покойников. Революция 24 Февраля 1848 в Париже стоила кажется 400 жертв. Теперь первые торжественные дни прошли и начались дни тревог, дни опасностей. Я остаюсь оптимистом.... Что бы ни было, я знаю: народ, который раз был свободен уже не впадет в безнадежное рабство. Этой мыслью утешался себя Edgar Quinet в 1865 году. Для нас это не утешение – это основания нашей веры, нашей надежды.... Наталия Александровна, теперь Вы должны непременно побывать в Москве. Она не была городом революции, но рано или поздно она будет столицей русской республики.]

ちなみに、ナタリア・ゲルツェンは臨時政府の発足に「自由ロシア」の成立を認め、その成就を祝って、1917 年 4 月 6 日付けで臨時政府宛ててこんな祝電を送っている。

「臨時政府御中

アレクサンドル・ゲルツェンの理想の名において、自由ロシアを熱烈に歓迎いたします。

ゲルツェン (スイス、ローザンヌ)」

[Folder :Correspondence Herzen, Natalia Aleksndrovna Telegram1917-4-6

Gouvernement Provisoiner Petrograd

Au nom de l' deal d' Alexandre Herzen

acclamons chaleureusement la Russie libre

Herzen

(Swiss Lausanne)]

17年2月に成立した臨時政府でロジチェフはフィンランド問題担当の人民委員になり、多忙になって日々を送っていたことは『回想』の中でも書かれている通りだが、そのように忙しい中であっても、ゲルツェンへの配慮は欠かされることはなく、たとえば、同年8月16日—と言えば、コルニーロフの「反乱事件」の直前に当たる時期に、こんな手紙をナタリアに寄せている。

「ゲルツェンの記憶を永遠に残す委員会の組織に取り掛かりました。その目的とするところは (1) 遺骸と記念の品々をモスクワに移すこと。(2) ゲルツェンの住んでいた家を買収することです。貴女のお父上がモスクワで最後の数年をお過ごしになった、A. ヤーコヴレフの大きな家にはとてつもない高値がついています。その隣にある、貴女が生後数年を過ごされた小さな家のほうも協会のものにしなければなりませんし・・・(墓所について) 私には別の考えがあります。少年の誓いがなされたヴォロヴィヨフの丘に、お二人(ゲルツェンとオガリョフ—引用者注)を埋葬するのです。」

[1917-8-16(29)(M)

...Я предпринял образование комитета увековечения памяти Герцена.Цель его 1) перенесение тела в Москву и памятника, 2) приобретение дома где он жил. Большой дом А.Яковлева, где Ваш отец прожил последние годы своего пребывания в Москве. — Стоит черезчур дорого. Можно бы и следовало бы приобретать в общественное достояние соседний маленький дом, где Вы провели первые годы Вашей жизни.... (о месте магия) У меня другая мысль — похоронить их на Воробьевых горах, там где произошла детская клятва двух друзей...]

もっとも、この計画はあの当時の状況下では実現するはずはなかった。ロジチェフは12月3日付けの手紙で書いる。

「ロシアは崩壊の危機に瀕しています。・・・アレクサンドル・イヴァノヴィッチの記念碑の問題について言えば、当分据え置きにせざるをえないことを、ご理解いただけるものと思います。」

[1917-12-3(16)]

...Россия в collapse. жидать.Что касается вопроса о памятники А.И. тем более о перенесении его прах – Вы сами понимаете – можно ли об этом говорить теперь.]

さらに4日後の12月7日、ロジチェフは ヴォロヴィヨフの丘（通常、「雀が丘」と訳され、ゲルツェンとオガリョフが専制政治の打倒と農奴制の廃止のために生涯をかけて戦うことを誓った場所として知られている。）を見たことのないナタリアに、それがかつてイタリアの国王イムベルトがそこに立ってその絶景ぶりに驚嘆したという丘であることを教え、いずれその写真を送ろうと約束し、さらに旧居の買収については、契約が一旦は整ったのに、最近の経済状況に家主が気持ちを変えたために、暗礁に乗り上げていることを告げたあと、最近の状況についての次のような感想を述べている。ここには12月段階における彼の状況認識がうかがえるので、以下に紹介しておこう。

「私の楽天主義は誤っていました。・・・私はロシアの民衆についての観念を見直さねばならないのではないかと恐れています。と申しますのも、若い世代—法や学校や学問や産業などの—20世紀文化の影響をこうむったあの世代が、冷血にも200万人もの人々（ママ）を殺害したのです。これらは勇敢で、血気盛んなものたちばかりです。残ったものと言えば、冷たい血のしおれかえった臆病者や、隷属によって育てられた古い世代ばかりです。彼らがなしたのは自由の名による革命ではなく、野蠻人による文化のポグロームです。

私は、ロシアが自ら進んでポーランドの運命を選び取ってしまったのではないかと恐れています。私には革命と呼ばれているもののこれらの結果を受け入れる決心がつきませんし、まだこれらを受け入れたいとも思いません。私には、この先、恐ろしい過酷な反動の年月、果てしもなく長い年月が続くように思われます。恐怖は知識人に致命的な変化をもたらしつつあります。ロシアにおける第3の反動の目撃者とならねばならないのです。第一の反動を私は1881年3月1日以降に体験しました。第二の反動は、1907年に、君主とロシアが辱められ弱体化した1907年以降に体験したのです。」

[1917-12-7(20)] ..Мой оптимизм был осуждения. Я считал напряжение воли, усилия диалд(?)-теме необходимым условием спасения. Но – где же совладать со стихией. Боюсь что нам придется пересматривать наше представление о русском народе. Ведь молодое поколение, то, которое подверглось влиянию права, школы, науки, просыпленности – культуры 20 го века – оно обезкровлено убило до 2 миллионов – ведь это храбрые и пылкие – остались хлоднокровые, вялые, трусы и старшее поколение, воспитанное рабаами. Они делали не революцию во имя свободы, а погром культуры как жикарь.

Боюсь, что Россия сама себе уготовала судьбы Польши. Не решаюсь и не хочу еще примириться с этим результатами так называемой революцией. Я предвижу годы, долгие годы страшной, жестокой реакции. Ужас совершается в умах ракавая перемена.

Должен быть придется быть свидетелем 3-ей реакции в России – первую я пережил после 1 Марта 1881 г. Реакцию...вторую после 1907 презренную слабосменную монархию и Россию.]

1918 年 1 月、憲法制定会議がボリシェヴィキの武力によって強制的に解散され、臨時政府の閣僚に対する逮捕状が出ると、ロジチェフはいち早くモスクワを脱出して南ロシアへ向かう。この時から生涯にわたる逃亡と亡命の生活が始まることになるのである。その逃亡の初期の段階に属する 1919 年 2 月では、「今日はオデッサ、数日後にクリミア、さらにロストフ・ナ・ドヌー、その先はわからない」と、自身の先行きの不安を語りつつも、またロシアの行く手へも危惧の思いを書き送っている。

「私はロシアで進行中のことを革命 революция とは呼びません。あれは反革命 ретрореволюция です。新たな証拠—それはウクライ全土にわたる紛れもないユダヤ人ポグロームです。」 [Folder:1919-2~8(v.p.) 1919-2-25(12) Одесса

я русское движение называю не революцию, а ретрореволюцией. Это варварство чистой крови. Доказательство новое - сплошной еврейский погром на всей Украине.]

その後、彼の居所は転々として定まるところがないのだが、その幾分なりともの詳細は年譜に譲るとして、ゲルツェンとの関係に絞って手紙を辿っておくと、先ず、ソヴィエト国内にゲルツェン著作集刊行の話が持ち上がっていることへの反応が興味を引く。ロジチェフの関心事はゲルツェンの著作への権利の帰属の問題であった。一旦国有財産になってしまえば、ナタリヤへの印税はどうなるのだろうか。彼は書いている。

「ソヴィエト国内でレムケを中心にゲルツェンの著作集刊行が計画されていますが、彼らにそれをやらせてはあなたには何も手に入らなくなります。この件で私の関心事はあなたの手に入る印税だけです。いずれにしろロシアで印刷するとなるととてつもなく高くなりますし、そもそもどこに読者がいるのでしょうか。その種の人たちはみな亡命してしまいました。・・・私はレムケのことをとやかく言いたいとは思いませんが、1913 年の抗争に始まり・・・17 年以降の彼の沈黙にいたるまで、何もかも不可解です。」

[Folder:1920-June1920-6-4

Все равно в России печатание будет нестерпимо дорого и где читающая публика? Оно чуть не вся в эмиграции...Я не хочу обвинять Лемке, но начиная с сопротивления в 1913 годукончая его молчанием с 17 года – все верх неудач.]

上の文章ではソヴィエト時代で最初のゲルツェンの著作と書簡集の編者であるレムケに対する屈折した感想が興味を引くが、その背後に如何なる事情があったのか、遺憾ながら、今の私にはこれを明らかにするだけの知見はない。いずれにしろ 21 年にベルリンでゲルツェンの回想録『過去と思索』が初めて完全な形で出版されたのは、ソヴィエト国内の動きへの対抗措置であったといつてよいだろう。

これにはロジチェフが冒頭の解説を書いているが、その中で彼はゲルツェンがボリシェヴィキから如何に遠い存在であったかについて、こう言っている。

「ボリシェヴィキたちはゲルツェンの死後 50 年祭を執り行い、世界中に向かって、また自分たちに向かって、ゲルツェンが自分たちと共にあったと言い張ろうとしている。しかし、彼らの心性はゲルツェンの大きな人間的な精神とは全く相反するものである。それは彼の平和主義的な精神とも、比類なき率直さ・真率さとも、彼の高雅で美的な洞察力とも無関係なのである。」「ゲルツェンは如何なるファナチズムとも、いかなるドグマとも、いかなる制約とも無縁であった。」「自由と理性、これこそがゲルツェンの二つの柱石であり、二つの導きの星であった。」[Boxes 23. Manuscripts. Rodichev, F.I. "Preface a 'Passe et souvenirs'" p.3、4]

少々話の本筋を外れる恐れがあるのだが、この時刊行された『過去と思索』の発行部数と値段、そして印税についてのロジチェフとナタリアとのやり取りについても、少し触れて置きたいと思う。というのは、このやり取りから当時の出版事情や亡命者の生活事情が垣間見られるように思われるからである。

「2 万 5 千マルクというのは 50 万マルクの 5 パーセントということですが、これは、1 万部を発行し、その分として書店から 50 万マルクを受け取る、つまり、読者からは 60 万マルクを受け取るという、ゲッセンの計算によっています。これは初版としては大きすぎる数字です。2 巻本に 60 マルクなどという値段はあまりに高すぎます。ロシア人の読者にこの本に 60 マルクを出せるという人が 1 万人も見つかるのでしょうか。値段はもっと安くしなくてははいけませんし、1 万部というのも多すぎます。」

[Folder 1920-7 1920-7-2

...25,000 марков – это 5 процентов с 500,000 марков, следовательно, будет считать Гессен: мы должны издать 10,000 экземпляров, за которые получить от книжного магазина 500,000, т.е. от публики 600,000. Это начинающего издательства слишком большое дело. Да и цена за 2 тома 60 марков слишком велико. Среди русской публики не найдет 10,000 людей могущих на книгу затратить 60 марков. Книгу надо пустить дешевле, и 10,000 слишком много.

この話がどのような決着を見たか、ここに残された手紙から辿ることができないことは、返す返すも残念なことである。

さて、そうこうしているうちにも時代は移り、ロシアでは内戦がボリシェヴィキ派の勝利のうちに収束し、ソヴィエト史ではネップ期と呼ばれる時期に入る。この時期、ロシア（ソヴィエト）では政情が安定し、社会主義という枠内においてはあれ、市場経済が復活し、ソヴィエト体制そのものの新たな展開と思われたことから、亡命者の中には本国他政府の呼びかけに応じて、祖国に帰る決心をするものも少なからずあったことは、周知のとおりである。そして、「道標転換派」と呼ばれる人々をその典型的な事例として、こうし

た人々の多くがスターリン体制の下で、「不遇を託った」などという生易しいものではなく、肉体的に抹殺されていったこともまた、周知の通りである。この点、「カデット」の領袖として、臨時政府で閣僚クラスの職責にあったロジチェフにしてみれば、おいそれと帰国するわけにはいかなかったという事情もさることながら、ボリシェヴィキを見るロジチェフの眼には、いささかの変化も見られなかった。彼はナタリアに書いている。

「私の願いがこれらの道徳的白痴どもの支配が最終的に終わりを告げることであることをご理解下さい。すべてはこのことにつきます。連中が権力を握っている限り、ロシア国民の不幸が終わることはありません。ロシアの国民は死滅してしまうでしょう。彼等を根絶することによって初めて健全化ははじまるのです。当然、それには時間がかかるでしょうが。」 [Folder: 1921-12 1921-12-31] .

..Поймите мое пожелание, чтобы господство этих нравственных идеотов препрапациялось наконец. В этом все. Пока они у власти, несчастье русского народа не может кончиться. Он будет умирать...Только с устранением их начнется выздоровление, по необходимости медленное.]

更に翌年の手紙では

「先ごろパリで見た芝居に、登場人物のこんな台詞があります。《J'ai eu tort envers lui, mais je lui ai pardonné.》（彼らにはひどい仕打ちをしてしまったが、今では連中を許しているよ。）ボリシェヴィキが恩赦の中で言っているのはこの台詞です。《俺たちは連中を掠奪し、殺せるやつは殺してやった。だが、俺たちは連中を許してやろう。帰ってきてもいいぞ。銃殺しない間は生かしておいてやろう。財産も奪わないうちは持っていていいぞ。自由などはないだろう。ブルジョア的自由はな、だが、共産主義の制度にだって飢えて死ぬ自由はあるのだ。》 私は信ずることも、疑うこともできません。しかし、私は連中の恩赦を、盗賊がもはや奪うものがないほどに奪い尽くした当の犠牲者に向かって行いう恩赦だと思っています。」 [Folder: 1922 22-1-27]

先ごろパリで見た芝居の中で、主人公がこんなせりふを言っていた。《J'ai eu tort envers lui, mais je lui ai pardonné.》 Эти слова большевики предают в своей амниции: «мы их сграбили, кого могли убили, но мы их прощаем. Могут вернуться. Останутся живы, пока не расстреляем. Могут приобретать имущество, пока не отнимаем. Свобода не будет — это буржуазная, так же как свобода умирать с голоду в коммунистическом институте.» Не могу ни верить, ни сомневаться, но оцениваю их амнистию как ту, которую разбойники дают своими жертвам, когда с них больше взять нечего.

帰国を拒否したロジチェフの反ボリシェヴィキ活動がいかなるものであったか、私の調査はそこまで行き届いてはいないが、その後の歴史の流れに徴してみれば、彼（ら）のいかなる活動も功を奏することはなかったことは、周知の通りだろう。

晩年のロジチェフは貧困と孤独に苦しんだ。心の支えは妻と娘の存在であった。確かに、ゲルツェンの遺族、とりわけナタリアからは、精神的な援助もさることながら経済的な援助があり、彼を励ましはしたが、しかし、1932年に妻のアレクサンドラが死去してからというもの、彼の気力も急速に衰え、最晩年は「湿疹」に苦しみ、苦悶の裡に死去したのである。その苦しみの中で書かれた、殆ど最後の手紙とも言えるものが、ポーランドの亡命者レドニツキニ（アレクサンドル・ロベルトヴィチ）へ宛てた手紙である。この報告の冒頭近くで引用した文章―「私の政治意識はゲルツェンとフランス革命史を読んだ印象の元に決定されました。人権宣言は私にとって座右の銘であり理想であり続けていました。これらの原理によってロシアの問題、とりわけ農民問題や民族問題に対する私の態度も決定されたのです。」―はこの手紙の一節である。

本来、レドニツキへの病氣見舞いとして書き始めた手紙ではあったが、図らずも長文にわたり、むしろ自らの人生の回顧といった趣を呈してしまったのは、己が生の終わりの近いことを感じ取っていたからであろうか、心に残るいくつかの箇所を以下に訳出しよう。

「わたしの心境はといえば、次の二つに帰着します。一つは亡き妻への想い、これは私の意識の中に沁みこんで一瞬たりとも離れることのない哀しみです。そして第二は、祖国の運命に対する喜びのない見方です。」（『回想』157）

「ないものへの哀しみ、つまりは愛と闘うことはできませんし、そうしようとも思いません。私は生活の全てを、ロシアの現実、ツルゲーネフのロシアの丸まる一つの時代を、思い出の中で生きています。私の愛してきたものは皆、壊わされてしまいました。私の愛した場所はどこも荒廃してしまいました。私の働いた場所も殆ど全て荒廃してしまいました。……そしてここ、異郷にあって、私的な思い出を共にする人は誰もいなくなりました。リヴォフ公もアレクセイ・アレクサンドルヴィチ・スヴェチ（ロジチェフの義兄）も亡くなりました。ロシアにだって、思い出を分かつことのできる人は少なくなっていました。……そして私はもっぱら亡き妻の書き残したものとの対話に時を過ごしているのです。」（『回想』157）

手紙はやがて自らの人生の回顧に移り、祖国への愛とその将来への危惧の想いが表白され、そしてその回顧と想いは最後にこんな文章に行き着くのでした。

「現実を観察するにつけ思い起こされるのは、丸々幾つもの「愚か者」の世代についての歴史家ミシュレの言葉です。マルクス主義という名の愚かしさの勝利―これがロシアの現実なのです。

「こんな考えを口にすると肉体的生活も幾分楽になるような気がします。つまり健康になれるような気がするのです。しかし、今更それがどうだというのでしょうか。私は9月の1日以来、病の床にあります。病は重くなる一方です。今はひどい湿疹に罹っています。体中が熱く、夜も眠れず、苦しみを終わらせるために篝火の中に飛び込んだヘラクレスの神話を思い思い起こしています。

夜は眠れず、寝るのは昼間です。まとまったことは何もできません。私は今、思い出に

生きています。数々の明るい思い出が生き生きと蘇ります。こうした思い出に浸っていると心が休まるものです。アレクサンドル・ロベルトヴィチ、過去から私の心を明るく照らして下さい。そして私の中で過去についての明るい思い出と今に生きる精気あふれる喜びに満ちた感情をも、与えて下さい。・・・」

「こんな拙い文章ですが、ささやかな感謝の気持ちとしてお受け取り下さい。揺れ動く気持ちで書かれたこの文章を、どうか退屈せずに読み通してくださいますように。」

この手紙に日付はありません。ただ、この文章が死の床の苦痛の中で、途切れ途切れに書かれたのであろうことは、この手紙に書き添えられた娘、アレクサンドラの次の文章によって知られます。

「尊敬するアレクサンドル・ロベルトヴィチ！

父の手紙を父に代わってお送り申し上げ、併せてこれを機に今一度ご厚情に感謝し、新年のご挨拶を申し上げます。

父の容態は思わしくありません。ひどい湿疹に悩まされ、そのため心臓が弱くなっているのです。

果たしてこの冬を越せますものやら……。秋からずっと臥せっており、すっかり衰弱しておりますので。

くれぐれもご自愛の程を。敬具

A. ロジチェヴァ」(『回想』170)

ロジチェフは1933年2月28日、ローザンヌにおいて死去した。享年79歳であった。

ロジチェフ（フョードル・イズマイロヴィチ）略年譜

- 1854（0歳）ペテルブルグに生まれる（2・9）生活をしていたのは主として父の所領のあったイズマイロヴォであった。家庭内には体罰の風習。
- 1855（1歳）ニコライ1世死去（2）、アレクサンドル2世即位
- 1856（2歳）クリミア戦争終結（3）
- 1861（7歳）農奴解放
兄のドミートリイ、ペテルブルグへ。一家は祖父と祖母の所領のあるヴァトカへ。解放後祖父は所領の経営を父に任せることにしたのである。
- 1863（9歳）正式の教育の始まりこのころから、家庭教師マリア・エヴグラフォヴナ・パーヴロフスカヤ（後のミハイロフスキー夫人）のもとで、ロシア史、数学などを学ぶ。同時に、平等思想も。家庭内の日常生活にも解放感
- 1864 ゼムストヴォ（地方自治体）の設置
- 1866（12歳）イギリス風の全寮制の中学 Гирса（ワシリー島）に入学。学則も緩やかな開放的な雰囲気。しかし、システムチックな教育ではなかった。間もなく（春）実科中学（реальная гимназия）へ。「中学はロシアの中等学校がいかなるものでありうるかを示していた。」（回想、3）「中学にいた4年間、私は激しい言葉や厳しい態度を記憶していない。当時私はこれを当然のことと思い、ほかのありようなどありえないと思っていた。やがて、トルストイ伯やカトコフ流のジャーナリストなど、66年以降のあらゆる反動を理解するにおよび、このことにはいかなる価値があったか、時流に抗するためには、どれほどの性格的な力や献身や忍耐力が必要であったかを、理解したのであった。」（回想、4）ギムナジヤノ活気はどこから来たのか。通常、60年代は否定の時代、ニヒリズムの時代と言われているが、特徴的なのはむしろ「ヒューマニズ、人間性」であった。（回想、5）不幸にして、66年、カラコーゾフによる皇帝暗殺未遂事件以降、反動化が進むようになった。
- 1867（13歳）マリア・エヴグラフォヴナ・パーヴロフスカヤ、ニコライ・コンスタンチーノヴィチ・ミハイロフスキーと結婚。フョードルは式で聖像画を持って侍した。披露宴にたくさんの作家たち。ネクラソフに会う。
- 1870（16歳）ゲルツェン死去（1・21）卒業、ペテルブルグ大学（理数学部数学科）入学。（ギムナジヤから大学に入ったのは二人だけであった。もう一人は、後にプスコフ県ノヴォルジェフ郡貴族団長となったレフ・リヴォフ）当時のペテルブルグ大学にはメンデレーエフやメーチニコフが教えていた。
- 1871（17歳）パリ・コンミュン ネチャーエフ裁判（夏）

- 1872 (18歳) 母とヨーロッパ旅行。ゲルツェンの著作(『過去と思索』)を知る。オガリョフと面会
- 1874 (20歳) 秋に卒業。法学部の授業を聴講。当時法学部にはレトキン教授、グラドフスキー教授らがいた。「ヨーロッパ列強の国家法についてのグラドフスキーの講義は国家において実現された自由の理念の発達史であった。ロシア史の講義でグラドフスキーは専制と法とを結びつける方途を探っていた。」(回想、9)「概して70年代の半ばころからロシアの知識人の間で議論の軸となっていたのは、憲法についての問題であった。」(同)「ロシアはプロレタリアートの発生を免れるだろう。共同体がロシアを救うだろう。これが当時流行の信仰であった。」(同)学生運動(ナロードニキ運動は既に過去の話。「ロシアでは政府が学生と一緒に革命運動を煽っている。」(同、10)「牢獄は革命のアカデミーである。」(同、21)
- 1875 (21歳) ヘルツェゴヴィナ蜂起(7・9) 夏 兵役
- 1876 (22歳) 汎スラヴ熱「スラヴの自由の大義はロシアの自由の大義」(回想、25)(最初の政治的アジテーション) オットマン・トルコへのボスニア・ヘルツェゴヴィナの蜂起に共鳴し、セルビアに従軍(学生の従軍は禁じられていたが、先年の兵役時の階級(砲兵下士官)によって志願) 実戦に参加。同年、ヴェシエゴンスク地区自治体により、治安判事(ー91年まで)に選出を期に帰国(大学に残るように求められていたが、地方自治体活動を選ぶ)
- 1877 (23歳) 露土戦争(4・24)
- 1878 (24歳) ヴェーラ・ザスーリチによるトレポフ狙撃事件(1)メゼンツェフツ暗殺事件(4)テロ活動の原因そのものには理解を示しつつもテロそのものに対する人々の情緒的対応に批判的(回想、22-23)ヴェシエゴンスク地区選出のトヴェーリ県地方自治体議員となる。(ー95年まで。その間、貴族団長[ー91年まで]、治安判事代表も勤める)立憲運動に参画。当時トヴェーリ県の人口の85%は農民。彼らとの付き合いの中で、社会の進歩的役割としての農村共同体についての考え方が変わる。
- 1879 (25歳) ソロヴィヨフによる皇帝暗殺未遂事件(4)
- 1880 (26歳) 結婚(エカテリーナ・アレクサンドロヴナ・スヴェーチナ)(1・9)
- 1881 (27歳) アレクサンドル2世暗殺(3・1)アレクサンドル3世即位。
長女(ソフィア)誕生
- 1882 (28歳) (農村問題に関する)「覚書」(後のストルイピンの見解の先取り)を「カハーノフ委員会」(1881-1885)に提出

- 1883 (29歳) 次女 (アレクサンドラ) 誕生
- 1891 (37歳) земский начальник の設置に反対して、貴族団長を辞任 (6)
- 1894 (40歳) 「国民教育」についての提言。シャホスコイやメンデレーエフらとその実現に挺身。(1906年に実現) ニコライ2世即位 (10)
- 1895 (41歳) 新皇帝に宛てた上奏文がニコライの逆鱗に触れて、以後ゼムストヴォでの活動を一切禁止される。帰農。(дни картофельной уборки)
- 1896 (あるいは97) (42あるいは43歳) 禁書所持の疑いで家宅捜査を受ける。ゲルツェンの2, 3の著作を没収される。
- 1901 (47歳) 病気の妻の療養をかねて西欧旅行 (シレジア、ニースのサナトリウム) 帰国直後にカザン大寺院前での学生の示威行進にコサック兵と警官襲い掛かるという事件。内務省と法務省への抗議の声明に署名。政治的に前科のあるロジチェフは自宅逮捕、2年間のペテルブルグ追放
- 1903 (49歳) スイスで自由主義者の政治結社「解放同盟」の発足に参画 (1)
«Вопросы адвокатской нравственности и права»を書く。(«Право» 誌 1904年1月25日に掲載)「この問題に対する私の見解は一度としてぶれたことはありません。何故ならば、法、人権、民族性—ここにこそ私の不動の基礎があるからです。」(「レドニツキへの手紙」『回想』161)
- 1904 (50歳) 日露戦争 (2-05・9) 公的活動の禁、解かれる。「同盟の同盟」に参画 (5)
- 1905 (51歳) ポーランドとロシアの立憲運動の提携に参画 (1・9)、日露戦争終結 (9) 10月宣言 (10)
- 1906 (52歳) 第一国会 (4-7) ヴェシエゴンスク郡貴族団長となる。(一〇七年) トヴェーリ県選出の議員となる。政治犯の恩赦と死刑廃止に論陣。「第一国会最大の弁士」との異名を取る。(ストルーヴェはロジチェフとマクラコフとストルイピンを「三大雄弁家」と呼んでいる。)「農民の共同体離脱に関する勅令」(ストルイピンの改革の開始) (11)
- 1907 (53歳) 第二国会 (2-6) 飢饉救済活動。
第三国会 (11-12・6・20) 「ストルイピンのネクタイ」演説 (11・17) により、懲罰を受ける。
- 1912 (58歳) 第四国会 (11-17・2) このころスイス (ローザンヌ) でゲルツェンの遺族 (ナタリア、オリガ等) との親交始まる
- 1914 (60歳) 第一次世界大戦 (7-19・1、パリ講和会議)
- 1916 (61歳) 「1906年の降誕祭の頃から、私は君主制の崩壊の近いことを確信していた。」(『回想』166)
- 1917 (63歳) 2月革命、臨時政府発足。フィンランド問題担当委員 (コミッサール) となる。戦争の継続を訴えて前線を回る。コルニーロフの反乱事件 (8)

では反乱を支持。10月革命以後は潜伏。

- 1918 (64歳) 9月ペトログラードを脱出、南ロシアへ向い、キエフ、オデッサ、さらにクリミア半島を転々とする。
- 1919 (65歳) ロストフでカデットの仲間とともに南ロシアの義勇軍の組織に助力。ロシアを去る(5・1) コンスタンチノーポリ、アテネ、ベオグラード、パリへ
- 1920 (66歳) 1月20日、パリで(?)でゲルツェンの追悼会を開く。
2-3月ローザンヌのゲルツェンの遺族方に滞在。さらにワルシャワへ。ストルーヴェに呼ばれてパリへ。亡命者仲間の内輪もめに嫌気がさして、秋にローザンヌに戻ることにする。
- 1921 (67歳) 一月、パリで憲法制定会議の元のメンバーに招かれて講演、ついでロンドンに。さらにパリで、ミルコフ、ペトルンケーヴィチらに会い、党活動。ジュネーヴで病に倒れる。(肺炎?) ナタリア・ゲルツェンの経済援助、赤十字の援助を受ける。(ロジチェフの窮状についての情報がパリに届き、ペトルンケーヴィチが奔走) ゲルベルリンでゲルツェンの『過去と思索』刊行。序文を書く。
- 1924 (70歳) 盟友ペトルンケーヴィチ、プラハへ去る。
- 1928 (74歳) ペトルンケーヴィチ、死去
- 1932 (78歳) 妻、エカテリーナ・アレクサンドロヴナ死去(2)
- 1933 (79歳) ナタリア・ゲルツェンのもとでE・H・カーと会う(2・12)
ローザンヌで死去(肺炎)(2・28)